

大正五年四月發行

校友會雜誌

第拾四號

山口縣立萩中學校校友會

致格用

山口縣立 萩中學校 校友會雜誌第拾四號目次

表面題字は松陰先生手
寫稿本中より選びて撮
影引延したるものなり

口繪

○大典記念工事車廻○展覽會出品優等書畫

會誌

○部長改選○各部委員選舉○表彰式○車廻起工式○部長補缺選舉○車廻築造○柔道部記事○縣下各學校聯合武道大會記事○辯論部記事○野球部記事○漕艇部記事○尺素一東○會費決算報告○基本金決算報告○短艇新造費積金決算報告

藝苑

○奉祝俚辭 特別會員 安藤 紀一
○水の音 同 金子 乙助
○一日一事 第五學年 吉田 操
○同 阿部 頼音

目次

○我が見たる朝鮮の風俗 第二學年 井上 盛義

○沖浦に遊ぶ 同 萩原 新市

○御茶屋の池 同 磯松 嶺造

○略 同 櫻井 敬三

說林

○教育勅語と士規七則 特別會員 村上 俊江

○山本京大學生監演說要旨

○三宅雪嶺博士講演要旨

○陸軍中將渡邊男爵講話

○澤柳博士講演要旨

○松陰先生の中心思想 松陰追慕會に於ける村上校長の演說要旨

校誌

○山本頁吉氏の來校○卒業式○賞品賞狀の授與○昭憲

皇太后御一週年祭遙拜式○修學旅行○伊藤書記の長逝
 ○一日行軍○雪嶺博士の來校○小野田中佐の來校○海
 戰講話○毛利公爵の來校○渡邊中將の來校○山根代議
 士の來校○澤柳博士の講演○眞鍋中將の來校○御聖影
 奉戴式○御大典奉祝式○提燈行列○松陰先生追慕會○
 送迎覺報

附錄

○本校沿革略○職員表○卒業生一覽
 ……………八四頁

奢が甚惡しき事に候家が貧になるのみならず
 子供のそだてまで惡しくなるなり

松陰

大 典 記 念 士 規 七 則 碑



山口縣立 中學校 校友會 雜誌 第拾四號

會誌 (自大正四年一月 至同 年十二月)

部長改選

四學年 桑田 茂樹

四月八日、始業式終了の後、各級長の改選あり、結果左の如し。

- 第一學年 桑田 茂樹
- 第二學年 桑田 茂樹
- 第三學年 桑田 茂樹
- 第四學年 桑田 茂樹

四月二十八日正學年 四級 贈 會誌 一冊、當選者左の如し。

會誌



筆湧江山氣文驕
雲雨神
第五學年 阿部 賴吉

短綆不可以汲深
井之泉
第四學年 桑田 茂樹

明月松間照
清泉石上流
第三學年 和田 茂忠

清真寡欲萬物
不能移也
第三學年 賀川 古

孝弟也者其爲
仁之本與
第一學年 中村 利作



- 正學年 桑田 茂樹
- 第二學年 桑田 茂樹
- 第三學年 桑田 茂樹
- 第四學年 桑田 茂樹
- 第五學年 阿部 賴吉

山縣元中學校 校友會雜誌 第四拾四號

會誌 (自大正四年一月至同年十二月)

部長改選

四月八日、始業式終了の後、各部長の改選あり、結果左の如し。

- | | | | |
|-----|--------|-------|-------|
| 柔道部 | 廣田 近三 | 劍道部 | 長東 有郎 |
| 野球部 | 庄野 貞一 | 馬球部 | 田中市郎 |
| 漕艇部 | 山本百合熊 | 水泳部 | 相島 直一 |
| 辯論部 | 土江知太郎 | 書道部 | 安藤 紀一 |
| 畫道部 | 田中百合之助 | 雜誌部 | 藤井 百輔 |
| 賞品掛 | 頓野 多介 | 岡本 祐澄 | |

各部委員選舉

四月二十八日、各部委員の選舉行はる、當選者左の如し。

會誌

- | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| ○柔道部 | 吉田 稔 | 赤島 眞介 | 坂田 義亮 | 三好 市郎 |
| 伊藤 敏三 | 村岡 幸吉 | 花田 好定 | 百濟 芳雄 | |
| 福川 秀夫 | 山川 恒久 | 吉浦 文治 | 栗屋 義純 | |
| 羽仁 通祐 | 山本登代治 | 中山 靜太 | 釜田 幸作 | |
| 中村 忠道 | 飯田 剛一 | 横山 良晴 | 井町 敏正 | |
| 宮崎 恒介 | 坪井 六郎 | 鷺海 一 | 松本 忠一 | |
| 磯松 嶺造 | 坪井 七郎 | 桑原 仁作 | 玉置 一 | |
| 山本 悦三 | 荒地愛二郎 | 瀧口 吉春 | 瀧口 純 | |
| 松浦 梁作 | 吉田 操 | 松浦 梁作 | 高 武夫 | |
| 鈴木 昭夫 | 谷井 完 | 兒玉 義清 | 仁尾 重人 | |
| 志賀 義雄 | 野北 彦次 | 田中友之助 | 河村 宜介 | |
| 林 只一 | 伊藤 俊光 | 阿部 芳市 | 松浦 孝義 | |
| 藤原 忠二 | 村田 四郎 | 山本 裕一 | 阿部 時彦 | |
| 中島 武彦 | 藤谷 金伍 | 進藤 常雄 | 長嶺元二郎 | |
| 櫻井 敬三 | 石田 藤一 | 清瀬 勘一 | 西永 彰治 | |
| 堀野 實 | 玉木 正夫 | 矢島 良雄 | 熊谷 眞夫 | |
| 松村 正一 | 阿武 芳輔 | | | |
| 阿部 綱吉 | 中村 貞夫 | | | |
| 田中 政太 | 須子 英一 | | | |
| 上川 忠夫 | 内田 秋藏 | | | |

- 一學年 荒地愛次郎
三學年 田中友之助
五學年 阿部 綱吉

- 四學年 桑原 芳樹
三學年 和田 義忠

- 一學年 賀川 古
五學年 山本 裕一

- 四學年 長嶺元二郎
一學年 中村 利作

- 二學年 櫻井 敬三

- 五學年 阿部 時彦

- 庭球部 堀 儀一 三好 城輔 中野 常二 上利 勤介 宮川 保次 林 只一 藤村 正亮 津森 象一 阿座上源助 小田 芳雄
- 中村 敏雄 井上 庸造 山本 利秋 楊井 政一
- 前田 壯一 藤田 孫吉
- 野球部 益田 兼施 三好 市郎 小田安一郎 藤田 慶三 來島 清七 宮本 謙介 大岩 龍起 和田 義忠
- 漕艇部 坂田 義亮 三好 市郎 吉田 操 阿武 芳輔 須子 英一 桑原 芳樹 原東 宗一 時山 孝一
- 雜誌部 松村 正一 中村 貞夫 吉田 操 白根 鶴松 松浦 梁作 高 武夫 藤原 忠次 池内 久 倉重 義雄 齋藤 清治 齊藤 剛 進藤 常雄 白根 鶴松 倉田 正一 村田 四郎 中山 靜太
- 褒賞掛 白根 鶴松 倉田 正一 村田 四郎 中山 靜太

表彰式

十一月十日、此記念すべき吉日をトし、午後三時より、田總田中兩教諭の十年勤績表彰式を行ひたり。

表彰文

本校教諭田中市郎君ハ博物科ヲ以テ本校教諭田總百合之助君ハ圖書科ヲ以テ共ニ明治三十八年ヨリ任ニ就カレ爾來職ニ在ルコト廿二十年其ノ間一意勤勉各其ノ教授ニ工夫ヲ凝シ訓練ニ懇誠ヲ輸シ其ノ熱心ナル施設ニ由リテ學科ノ面目ニ斬新ヲ加ヘ其ノ熱練ナル策ニ由リテ生

大正四年十一月十日

田中市郎 田總百合之助

車廻起工式

御大典奉祝記念事業として、玄關前に車廻を作り、碑を其上に建て、土規七則の文を刻する事に衆議一決し居たるを以て、奉祝表彰の二式を終へたる後、午後四時より起工式を舉行したり。神官の祭式形の如く行はれ、村上會長鎌を把りて三たび土を起し、終りて、生徒總代として、吉田操君左の祝辭を朗讀せり。

祝辭

天高シ金波浩瀾トシテ樂ヲ奏ス氣清シ紅葉燃テ錦色鮮カナリ大内山瑞雲深クシテ至聖即位ノ大典ヲ舉ゲ給フ盛ナル哉 皇威益々赫耀シ國運愈發展ス蒼生鼓腹シテ 聖壽ノ無疆ヲ賀シ同胞擊壤シテ 寶祚ノ萬歳ヲ祝ス生等萩中學校生徒亦將ニ大典奉祝記念碑ヲ建立シ以テ今日ノ慶幸ヲ永遠ニ記念シ生等方光榮ヲ無窮ニ傳ヘントス鑄リ把リ土ヲ糞プハ以テ勤勞ヲ弊ムルノ 聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期シ碑ニ土規七則ノ文ヲ刻スルハ朝ニ仰ギ夕ニ誦シ之ヲ心肝ニ銘シ以テ身ヲ立テ道ヲ行ヒ無限ノ 聖恩ニ報イ國運ノ發展社會ノ進歩ニ貢獻スルトコロアラント欲スルナリ今ヤ世界ノ大勢漸ク動キ生等ガ活動ノ機運ハ將ニ熱セントセリ此ノ時此ノ際碑ノ工ヲ起スハ此レ生等ガ發展ノ階梯ニ向上ノ一步ヲ運ブナリ亦快ナラズヤ謹ンデ祝辭ヲ述ブルコト爾リ

徒ノ規律當ニ振肅スルヲ得其ノ十年一日ノ如キ盡力ハ斷エズ本校ノ幸福ヲ増進セリ其功績ノ各大ナルコトハ誠ニ本校歴史ノ一章ヲ飾ルニ足ルベシ苟モ本校校友タルモノ豈ニ之ヲ感謝セザルベケンヤ凡ソ其ノ職務ニ忠實ニシテ功績ノ顯著ナル人ニハ膏ニ感謝ノ意ヲ致スベキノミナラズ又其功績ヲ表彰シテ職ヲ勤メ學ヲ勵ムモノ、模範タルコトヲ明示セザルベカラズ二君ノ如キハ實ニ吾等校友ノ模範ト云フベシ爰ニ國家最高ノ大典ノ舉ゲラル吉日ニ當リ二君ノ爲ニ感謝表彰ノ式ヲ行ヒ謹ンデ銀時計壹個ヲ田中君ノ足下ニ贈呈シ謹ンデ中央卓壹脚ヲ田總君ノ足下ニ贈呈シ以テ紀念トナス冀クハ二君益々其ノ健康ヲ保全セラレ永ク國家ノ爲ニ本校ノ教育ニ盡力セラレンコトヲ

大正四年十一月十日

萩中學校々友會長 村上俊江

答辭

不肖等謝劣寡聞ヲ以テ乏キヲ教諭ノ末ニ承ケ爾來十年所當ニ備々焉トシテ傳フル所實ヲ失ヒ語ル所妄ニ陷ランコトヲ恐ル而モ幸ニシテ大ナル過失ナク以テ今日ニ至ルコトヲ得タル所以ノモノハ一ニ衆賢扶掖ノ賜ト諸子選順ノ徳トニ因ラズンバアラズ惠賢既ニ願ク感謝辭ナシ而ルヲ況ンヤ更ニ此 至尊大禮ヲ行ハセラレ億兆并舞スルノ日に於イテ不肖等ノ爲ニ特ニ此式ヲ舉ゲ申ヌルニ重贖ヲ以テセラル、ツヤ不肖等吳王朝セズ漢皇几杖ヲ賜フノ感ナキ能ハズ愧悚交ミ至ル古人木李ノ惠モ尙瓊玖ヲ以テ之ニ報ゼント欲スルモノアリ不肖等此厚賜ニ報ズル當ニ何ヲ以テスベキカヲ知ラズ衆賢幸ニ棄テ給ハズンバ不肖等亦愚勉努力職職ノ職ヲ免ル、コトヲ期セン是亦報ズルニ匪ズ永ク以テ好ヲ爲サント云ヘル意ニ外ナラザルノミ謹ンデ謝ス

大正四年十一月十日

山口縣立萩中學校生徒總代 吉田 操

右朗讀の終るを遅しと、會長は壇上につゝ立ち、「教育勅語と土規七則に就きて」との熱烈なる演説あり、式終りたるは四郊の暮色漸く蒼然たる頃なりしを以て、一同直に用意の夕食を喫し、提燈行列の準備をなしたり。會長の演説は別に筆記あり説林欄に收む

部長補缺選舉

辯論部長土江教諭辭任の結果、部長に空席を生じたるが爲に、十一月二十三日、補缺選舉行はれ、西川教諭當選せられたり。

車廻築造

十一月二十七日、放課後より、大典記念事業車廻築造に要する土沙の運搬に着手せり。是より、毎日一中隊宛、職員監督の下に、土車五輛を輓きて指月山麓に至り、土沙を滿載して、毎車五往復し、十二月四日に至りて終り、築庭工寺田某をして工事に着手せしむ、碑は安藤教諭揮毫せられ、石工武林某之を鐫す。既に

成りて玄關前の面目大に改れり。

柔道部記事

三月二十三日、午前十時より、春季柔道部大會を開催す。教師中村廣田兩先生及び先輩桑原(二段)佐々木(初段)兩氏の審判の下に試合は開始せらる。本日部員一同の頗る元氣なりしは甚だ喜ぶべきことなりと雖も、活氣其度を過ぎ、不規律なる行爲をなす者ありて、校長の戒言を聴かざるを得ざりしは、實に我部の爲に惜む所なり。請ふ武を修業する諸君よ、以後再び斯る失態を演ずること勿らん事を。例に倣りて、左に聊か妄評を試みん。

幼年組、寺田君、本部に入るの日尙淺しと雖も見處あり、益々勵め。金子君の今日振はざりしは平素の練習の足らざるが爲か。阿部君、有望たるを失はず。體技兼ね勝れたる綿谷君益々振へ。玉木君、阪田池田の兩勇士を仆して、猶意氣衝天、遂に好敵手村上君と引分をとる、亦望多し。野村君の大藤君に勝ちしは見事なりき。小田君の技見るべきものあり。福本君、體軀技術兩つながら備はる、大いに努めて我部の爲に盡

共に法あり。西永君、元氣未だ充分ならずと雖も、藤川君と共に技術體軀群を抜く、他日の奮闘期して待つべきか。余は關谷羽鳥二君に對する評語を知らず。只言ふ、奮勵して以て我部の爲に盡せと。三輪君、常に變らず元氣横溢なるは感心。花田君、得意の肩車實に見事なり。共に將來我部の重鎮たらん。岡崎君、平素の熱心効を奏せず、遺憾なり。宮本君の技や餘り敏捷ならずと雖も進退法あり亦侮るべからず。宮川君の技未だ熟せずと雖も常に利あり、要を得るに庶幾き者と言ふべきか、益々奮ふべし。高原君、體技兼備す。坂本君の大外刈は妙ならずや。福本君は試合毎に進歩の跡明なり。怠る勿れ。巨漢大谷君に敗れしも、最後迄奮戦せし努力と勇氣とは賞すべし。有延君と大谷君とは本日の好取組、一進一退、互に秘術を盡して相闘ふ、亦壯絶快絶。上利君の巴投も本日は其効著しからざりき。横山山川の兩勇士、本日は何故共に振はざりしぞ。久保田君の體軀技術共に衆に絶するものあり、奮つて我部の爲に盡せ。好漢寺田君、君の技たるや則ち君獨特のものたり。中野君との勝負は實に觀る者をして勇壯と叫ばしめたり。善甫君、得意の巴投を以て大敵大

せ。山本君の足拂、大深君の袖投共に見るべし。大谷君、進退法あり、善く攻め又善く守りたれども、倉重君の巨軀に敵せず遂に敗れしは遺憾極りなしと雖も、余は君が未來に多大の期待を有する者なり。田代君、體軀短少なれども、大腰巻込を得意とし、將來恐るべき勇者ならん。唯元氣の振興せざりしを憾とするのみ田代君に勝ちし藤村君も亦一方の猛者なるが、早く敗れしは残念なり。前田友森の二君、元氣あり勇あり。進藤君も亦同じ。山田君、嗚呼君の軀幹の長大なることよ。技術の習練を怠る莫れ。金子阿武兩君は力量體軀衆に勝る。唯技に乏しきを悲む。柳井君、今少し熱心になりては如何。然らば必ず上達せん。慢心は何事にも大禁物と知るべし。吉村君の寢業、河村君の左大腰は實に妙を得たり。法に適ひて迫らず、堂々たるものなり。山本君、軀技兼ね勝れたる勇士の一人か。百濟君、平素の猛烈なる練習其効見はれ、其得意とする大腰には向ふ者なく、觀る者をして感嘆せしめたり。但し意氣の揚然たるを尊しとす。吉浦君、今日の振はざる何故斯は甚しかりしか。今後大に練磨し以て他日の大捷を期せよ。後藤君の巻込、巨漢今田君の足拂、

谷君を屠りしは亦本日の一壯觀なりき。伊藤君攻守共に法あり。木島君、得意の跳腰も、強敵伊藤君には効少なかりしも、流石は猛將、蹶起して遂に拂腰にて仆したりしは實に美事なりき。脊負投を得意とする上田林兩雄の勝負亦壯觀を呈したり。好漢村岡君、林君を仆して、大力無雙の山田君と取組む。互に勇を鼓して相闘ふこと久しく、村岡君よく攻め善く守りたれども、山田君の巻込見事にきまりて遂に敗れたり。村岡君悵然として退くや、肥大漢阪田君、必勝を期して起つ、又奮戦すること暫時、猛虎の荒るゝ様を示せば、他は又雲龍昇天の勢を示す。一進一退、或は攻め或は守り觀る者拳を握りて聲なし。流石の阪田君も遂に山田君の膝車に後れをとりぬ。白軍利少しと見て、大將三好君は猛然として風を卷いて起ち、突けば開き、開けば進み、實に雙龍の空中に争ふが如く、勝負何日果つべしとも見えざりしが、遂に老練の猛將三好君の勝となりぬ。斯て日漸く西山に暮き、名残りの光一しきり照り映ゆる頃、赤軍の大將吉田君、三好君を敗りて、勝利は紅軍に歸しぬ。

十月二十八日、秋季大會を開催す。二百有餘の部員

悉く元氣旺盛、必勝を期して來り集る。斯くて、中村廣田兩先生の審判の下に、河村石津兩君の取組より始る。石津君よく攻めよく守り、河村山縣二君を破り、宇野君、石津君を仆せり。君の技は前田君のと共に冒險的にして且見るべきものあり。尾木君進退法に適ひ技亦敏捷なり。室田君は體技兼備の勇士なり、勉むべし。田中君の小内股侮るべからず、唯元氣無かりしを惜む。伊藤君の足拂や實に要を得たりと云ふべし。羽仁君、平素を忘れず益々努力せよ。巨漢倉重君、技尙乏し、大に奮勵すべし。村崎君、日頃の元氣に似もやらず、今日の晴れの場に振はざりしは何故ぞ。余は君の平素の熱心に對して深く同情す。實に我部少年勇士の一人たり。雜賀君、君の技や敏活にして妙なり。君は確に將來を有せる人と云ふべし。益々振ひて我部の爲に盡せ。石田君體力共に衆を抜けども技の敏活ならざるを惜む。前田君は前途有望の勇士なり。今田君、平素の熱心なる修業の効は遺憾なく其美事なる力量を發揮し満場の部員をして感歎の聲を漏らさしむ、實に午前中の花形なりき。願くば愈奮勵して我部の爲に盡せ。進藤君、君の元氣と敏活なる技とは觀る者をして

亦勇壯なりき。本永君の脊負投は見る者をして感嘆せしめ、羽鳥君の大腰亦妙なりと言ふべし。羽鳥山本小田倉橋の諸君、更る更る杉山君に對ひしも、杉山君獅子奮迅の勢を以てよく衆を破る、君の巴投は實に天晴なり桑原君小軀を以て克く本日の花形杉山君に組み付き、秘術を盡して是を破りしは亦壯絶なりき。腕力家花田君、桑原君と奮戦し、功を奏する能はざりしも、實に我部有望の士なり、益々努力せん事を切望す。中野君の脊負投頗る妙を得、有延君の大外刈亦眞に法に適へり。有延君の寺田君の内股に仆され、平素の熱心なる練習振りを悉く發揮し得ざりしは誠に遺憾なりと言ふべし。寺田君の内股には常に感服す。久保田君と戦ひ互に秘術を盡し、或は進み或は退き、觀る者をして痛快を絶叫せしめたり。伊藤君得意の足拂を以て、笠井原の兩巨漢を仆し、遂に三戸君の爲に敗らる。益田君不幸にして大谷君に敗ると雖も、必ずしも悲觀するに足らず、益々斯道に努力せられん事を切望す。木島君の跳腰は實に蘊奥を極めたりと言ふべく、能く大敵大谷上田二君を敗る。君は實に我部の明星たり。益々勉めて大に我部の爲に盡す所あれ。林君、よく大敵來島

感歎の外なからしむ。勝敗は天命なり何を悲觀するを要せんや。益々努力すると共に此の物々たる元氣を永久に失ふこと勿れ。平田君の巻込は美事なり、唯態度を慎むを要す。田代君不幸にして振はざりき。努力すべし。後藤君の奮闘振實に壯なりしが、不運なる哉負傷の爲に退く。百濟君元氣横溢、體技兼備の勇士なり益努力せよ。余は將來君に望む所多し。吉浦君の本日振はざりしは何故ぞ。敗れたりと雖も屈す可らず。西永君の大外刈は實に妙なり。本日の白眉たるを失はず植村君、寝技の必要は勿論なれども、立業の必要なる事は更に大なり。余は君の立業の見るべき者無きを惜む。桑原君の大外刈は眞に要を得たりと雖も、河内君の猛擧には敵する能はず、遂に胃をぬぐ。小軀の進藤君と巨漢山崎君との取組は今日の好コントラストなりしが、其小漢よく巨漢を投げたるに至つては亦一壯觀たりき。山崎君、體力衆を抜くと雖も技術無きを如何せん、願くば益々努力せよ。藤井君、脊負投を以て進藤君を破りたれども、強敵齋藤君に敵せず遂に押へ込まる。厚東君の大腰見事にして善く守永木村の巨漢を屠り、藤村君、勇往猛進遂に厚東阿武の二君を仆す、

君を仆したりしが、遂に坂田君に敗らる。山田君の大軀、敵を眼下に見下す様雄々しく、攻守大いに努め、村岡君亦極力奮戦したれども共に敗れたり。坂田君の勇奮壯絶快絶、實に觀者をして嘆聲を漏らさしめたり。紅軍の大將三好君と戦ひ、毫も臆せず、兩虎或は攻め或は守り、互に秘術を盡して相挑む事數分、實に風を起し雲を呼ばん慨あり、觀衆をして手に汗を握らしめたり。然れども、敵は新手なるが上に我部一流の猛將なれば、月桂冠は遂に三好君の頭上に歸したり。終りに臨み一言す。今日は、部員一同元氣旺盛にして良く戦ひ、且靜肅を守り、從來往々非難の聲ありし禮儀作法を重んぜしを喜ぶと共に今後益々進歩する所あらんことを切望す。當日の番組並に勝負左の如し。

(MY生)

秋季柔道試合番附





劍道

- 國中 伊藤駿治君 ○ 豐中 田村修君
- 齋藤清治 ○ 宮崎恒介
- 山師 太田 實君 ○ 岩中 星出 威君
- 永田 晴二 ○ 中村忠道
- 下商 青山謙二君 ○ 岩中 田中 豐君
- 坪井六郎 ○ 兼田幸作
- 山中 有富乙熊君
- 飯田剛一

京都青年武道大會記事

八月五日、柔道部よりは三好市郎、吉田稔、村岡幸吉、劍道部よりは飯田剛一兼田幸作坪井六郎の六君、我が校選手として、京都武徳會の主催たる全國青年演武大會に出演せり。

柔道部の成績頗ぶる良好にして、各自名譽のメダルを

土江部長開會の挨拶に次で志賀君登壇、平易なる熟練と題して、海軍收賄事件を引證し、延いて、現今中學生の世間に惡評あるは、學理の蘊奥を極めんとし、平易なる熟練を怠るにると結べり。二年級と雖も其態度其音調天晴將來の好辯士たらしむ。本日の辯士中最も落ち付きたるは關谷君なりき。歐洲戰爭の我國に及ぼせる影響、帝國を雄飛せしむべき責任を擔へる青年の覺悟、嘗て吉田造士館長の講話中に在りし夜明造集の比喩を引來りて、青年易老學難成を戒めて降る。杉山君天下の高僧然として、君が専門の經文中より南無阿彌陀佛の功德を説かれしも、斯道に疏き吾人には解し難かりしは遺憾なりき。前回の富士紀行にて名を揚げたる須子君、腕を振ひ卓を打つて我校端艇部の不振を歎じ、宜しく海に浮ぶべしと叫ぶ、其意氣や大に嘉すべかりしが、將に降壇せんとするに當り、「終りに臨んで諸君の健康を云々」は實に滑稽なりき。平川君の英語暗誦、練習不足の爲か稍々流暢を缺き、従つて態度も亂れたり。されど處女演説としては先づ成功と云ふべし。續いで登りし河崎君、友愛は根本的道德なりと疾呼す。君が日頃の性格も表れていとゆかしかりき。

授與せられ、劍道部も亦成績甚だ惡しからざりき。(T.M生)

辯論部記事

六月廿五日、春季辯論部大會を講堂に開く。當日の出演辯士並に演題は次の如し。

- 一 開會の辭 土江 部長
- 二 平易なる熟練 志賀 義雄
- 三 青年の前途 關谷 等一
- 四 眞宗 杉山 貳顯
- 五 端艇部の不振を嘆ず 須子 英一
- 六 ユリアス、ケーザル(英文) 平川 太助
- 七 友愛は根本的道德なり 河崎 隆輔
- 八 精神一到何事不成 篠原 信一
- 九 剛柔兼ねし將軍乃木(英文) 谷井 完
- 一〇 時代と國民 瀧口 純
- 一一 農業論 仁保 晋
- 一二 景清穴(英文) 長嶺元二郎
- 一三 修學旅行談 寺田 寶藏
- 一四 閉會の辭 土江 部長

今少しく落着きたらむには尙ほ一層善かりしならん篠原君「何の糞」を以て一貫す、君は確に雄辯の士なり。但し此の種の論一あるは可二あるべからず、且又其論旨往々曩に呈出の原稿に一致せざりしは惜むべし。谷井君の英語演説依然として我部の重鎮たるを失はず。是亦好辯士を以て目せらるゝ瀧口君歐洲大戰亂と我國民の覺悟とに就きて述べし、早きに失して聴取難かりしは遺憾なりき。仁保君敲卓數度、農業の必要を説く用意或は題中に在り或は題外に出づ、其態度には尙工夫を要すべきもの無きにしもあらず。長嶺君が自作英文を以て景清穴の紀行談ありしは最も喜ぶべし。一般に英語演説は今一層高聲ならざれば不判明の點多し。最後に立ちしは寺田君なり。過日の修學旅行に就きて語る。長時間の演説に聴者を倦まざらしめし者は君が精細なる觀察にあり。吾人は君が勞を多とす。部長の閉會を宣せられしは正午を過ぐる二十分。賞與は審査の上追つて授與することゝなれり。今回の登壇辯士は僅に十二名、近來見ざる小數なりき。抑も本部は思想の精鍊辯論の練習の爲めに置かれしもの、かくも出演者の少なきはすべてに完璧に達せし爲めか、吾人

はかくあれと祈れども、かくありと信ずる能はず。次回には諸君の振つて立たれんことを祈る。妄評多罪。

(R、M)

野球部記事

九月二十三日會友西林君の審判の下に、第二中隊對第三中隊の試合を舉行す。兩軍共によく戦ひしが、三中軍の運や拙なかりけむ、勝利は遂に二中軍に歸したり。其メンバー及成績左の如し。

二内三吉後小藤篠横大

(内)

中野戸田藤田原山岩

41 0 5 2 18

P C IB IB IB SS LF CF RF

打球四三得
數球球振點

三木須飯阿坂山原山柳

37 2 6 4 16

中島子田上田本田本井

(内)

十月二日、會友渡邊君の審判の下に、第一中隊對第四中隊の試合を舉行せり。四中軍の先攻にて始り、四中軍の勝となれり。當日のメンバー左の如し、

一和大前行阿三平中杉

中田草田本上戸川野山

P C IB IB IB SS LF CF RF

三戸君立死す。應援益々振ふ。

てサードアウトとなる。

第三回、四中軍振はず、田中山本宮本の三君相次いで斃る。二中軍亦不振、村岡吉田兩君死し、内野君一壘に進みしも、小田君三振せり。

第四回、四中軍かくては果てじと、大いに元氣を鼓舞して、上利君の生還を初めとし、伊藤君凡死の後は宮川奥田益田の三君、痛快なる飛球にて壘を得、津森君死球に出で、何れも生還し、茲に一舉五點を得たり。田中山本兩君の凡死にて二中軍と代り、藤田君の凡死の後、三戸君SSに勢猛なるゴロを送りて壘を得、遂に生還し、後藤篠原二君の凡死にて止む。兩軍の應援はより盛となれり。

第五回、宮本君SSをオーパーし、上利君死球に出で伊藤君はRFに、奥田宮川兩君はSSに飛球を送りて、順次生還す。二中軍大いに焦燥の所あり、益田君CFに飛球を送りて進みしも、二壘に刺され、津森四球を得て進壘し、田中君フライをLFに得られて死す。山本君全力を以てフライをLFに送りて進み、津森君生還す。宮本君のフライにて山本君生還。宮本君二壘に進みしも上利君の死にて二中軍と代る。横山君四球を得、村岡

四津田上宮益宮伊山奥
中森中利川田本藤本田

十一月五日、放課後、第二中隊對第四中隊の決戦を舉行せり。審判は會友渡邊君にて、兩軍の選手熱血を注ぎて、猛烈に戦ひしが、月桂冠は遂に四中軍の手に歸したり。當日のメンバー及成績左の如し。

二内三吉後小藤篠横大村

(津)

中野戸田藤田原山岩

42 2 5 4 16

P C IB IB IB SS LF CF RF

打球四三得
數球球振點

四津田上宮益宮伊山奥

37 0 1 6 26

中森中利川田本藤本田

(内)

第一回、四中軍先攻し、田中君四球を得て一壘に進みしも、山本宮本上利の三君の凡死にて、二中軍代る吉田君美事にIBをぬきて一壘を得、内野君CFにフライを飛ばせて、吉田君生還。小田君亦CFにフライを送りしも獲られて死し、藤田三戸兩君相つぎて斃る。

第二回、伊藤宮川兩君凡死してサードアウトとなる。奥田君四球を得て一壘を得、益田君CFにフライを飛ばせて、一舉に二點を得、津森君の三振にて、攻守地を換へ、後藤君の三振、篠原君の凡死、横山君の三振に君の大フライにて横山君生還す。吉田君又もIBをぬきて、村岡君を生還せしめて、二壘に進む。内野君フライをLFに送り獲られて死し、小田君のフライにて吉田君生還、四中軍一時色を失ふ。藤田君凡死せしかども三戸君のIBオーパーにて小田君生還、次いで三戸君生還す。後藤篠原兩君よく打ちて進壘せしも、横山君の三振にて止む。此回、兩軍各々頗る狼狽し、應援極めて盛なりき。

第六回、伊藤君CFにフライを送り、宮川君は四球を得て、共に壘上の人となる。奥田君フライをRFに獲られて死し、益田君RFをぬきしによりて、伊藤宮川兩君生還、津森田中兩君なすことなくして二中軍と代る。此時、村岡君負傷せし爲め大岩君と代る。元氣を鼓舞して攻め立て、大岩君IBにグラウンダーを送りて、一壘を得。吉田君亦然り。IBの失にて大岩君はIBを、吉田君はIBを得たり。内野君フライを打ちしも獲られ、小田君のIBオーパーにて、大岩吉田兩君生還。藤田君はPの失にて、三戸君はIBの失にて進壘し、小田君生還續いて藤田君亦本壘に入る。後藤篠原兩君の凡死にて、三戸君立死す。應援益々振ふ。

第七回、山本君三振、宮本君フライをCFに送り、上利君は四球にて、又伊藤君はIIIBオーバートにて、漸次進壘して満壘となる。宮川君兩腕に力を籠めてRFをぬき、宮本君生還、奥田君CFにフライを送りて、上利伊藤兩君生還、又益田君の一壘打にて宮川奥田兩君生還す。益田津森兩君は壘上の露と消え、二中軍代りしも吉田君フワーブルをIIIBに獲られて死す、内野小田兩君一壘に死す。

第八回、先づ山本君死し、宮本上利兩君共に三振す二中軍代り、篠田君先づ斃れ、三戸君三壘をオーバートし、後藤君又もIIIBオーバートにて二壘を得て、三戸君生還す、篠原君の飛球にて後藤君生還、横山大岩兩君凡死す。第九回、勝負の數此一回に定る事とて、兩軍共に全力を出して戦ふ。伊藤君IIIBオーバートにて猛進して二壘を奪ひ、宮川君のIIIBオーバートにて伊藤君生還、奥田君益田君共に四球にて進みて満壘となる。津森君凡死したれども、田中君IIIBオーバートにて三君共に生還、宮本君のCFに送りしフライにて田中君生還。上利君一壘に刺されて、ツアアウトとなる。伊藤君四球にて一壘に進みしも、宮川君の三振にて代る。吉田君SSにグラウン

第二中隊對第三中隊の撰手競漕となり、兩隊の盛なる應援の裡に勝敗決し、午前の分終れり。午後の分に入りて、第一中隊對第四中隊の撰手競漕も花々しく行はれ、夕陽漸く西山に春く頃、第三中隊對第四中隊の決戦競漕は開始せられたり。飛ぶが如く漕ぎ出でたる二隻の船相前後して進み、群衆は手に汗を握りて之を觀る。かくて勝利の月桂冠は遂に四中隊に歸しぬ。當日の選手及び其の勝敗は左の如し。

須子 英一	藤田 慶三		
阿武 芳輔	篠原 信一		
第三中隊〔勝〕	横山平四郎	第二中隊〔負〕	池谷 澄
〔十分卅五秒〕	木島 清七	〔十一分十秒〕	村岡 幸吉
坂田 義亮	高原 敬介	三好 市郎	吉田 操
村田 四郎	寺田 寶三	第一中隊〔負〕	中野 常二
山本 賢二	〔十一分〕	行本 盈三	山川 恒久
〔十分十七秒〕	厚東 宗一	須子 英一	阿武 芳輔
阿武 治郎	村田 四郎	寺田 寶三	

ダーを送りて、先づ一壘に刺され、内野君大フライをCFに送りて二壘に走る、小田君LFとCFとの間をぬき、内野君生還、三戸君凡死して、ツアアウトなる。後藤君のCF飛球にて小田君生還、篠原君IIIBにグラウンダーを送りて一壘に刺され、二中軍は遂に恢復することを得ず。是に於て、二中軍十六點、四中軍二十六點にて、四中軍の勝となれり。(K、M)

漕艇部記事

五月二十七日の海軍記念日をトシ、和船競漕會を開けり。打曇りたる空を氣遣ひつゝ、結びし夢もいつしか破れて、明くれば二十七日、見渡せば、東天に彩雲を排きて出て來れる旭日の光、指月山頭を照し、滿校勇士の血自ら湧きて、喜胸に滿つ、故なきに非ざるなり。八時登校、講堂に於て桂中佐の日本海海戰講話を聞く。身は講堂にあれども、心は已に阿武河畔にあり。終りて、各中隊隊伍を整へ、競漕場なる橋本橋の下に到る。阿武の碧流は渺々とたへて我等を待つ者の如し。折しも、邊りの寂寞を破りて轟く一聲の煙花と共に競漕は開始せられたり。時の経過と共に、回を重ね

第四小隊〔勝〕	山本 賢三	第三中隊〔負〕	横山平四郎
〔十分六秒〕	厚東 宗一	〔十分十八秒〕	木島 清七
阿武 治郎	坂田 義亮		

尺素一東

拜啓暖氣益々相加り奮闘の好期に入り候處先生益々御健勝に渡らせられ誠に慶賀の至りに奉存候私事十四日朝五時萩地出發徒歩山口に出て汽車に投じ十五日早朝當地に到着表記の所に下宿仕候下宿より一町東に學校あり學校の背後三四町を距て、雲際に屹立するは鐵拐峰の連峰に御座候本日午前九時より入校式舉行せられ校長水島先生の祝辭並に訓戒あり私共に向はれ君等は一千餘名の中より合格して本校の生徒となるを得たるを以て随分得意ならんもかゝる時は兎角心の駒の手綱が弛み誘惑に陥り易く且つ此地は日々貿易交通盛んとなる故諸種の誘惑の魔が手を擴げ居れば大に注意ありたく又本校は當地最高の學府なれば他の範とする所なるにつき充分自重せられたしと申され候されば私は大に自重し決して誘惑に陥らず永年の先生の御訓育

をして徒爾ならしめざるやうにと覺悟致し居申候何卒時に觸れ折に觸れ御鞭撻被下度只管奉願候追々學校の様子相分り候はゞ更に悉しく御報可申上候草々頓首

四月十六日

横山繁介

村上先生 御侍史

謹啓一雨毎に木々は青葉に成り増り初夏の景色も充分と相成り机前に兀坐致し候事の痛苦を感じ申候然るに先生には不相變御清穉育英に御盡瘁遊ばされ涼氣自ら袖を拂ふ夏宵の樂をと思ひ浮べ給はぬ事かと恐察仕候降而私儀入學以來至て壯健にて一日も懈怠致し、事無之校則を嚴守し學事に勉勵致し居候間乍他事御休心被下度候是迄もなく御伺ひ可申上筈に御座候處御聞及にも可有之當校々長先生を始め諸先生方皆運動を御獎勵相成殊に相撲は極力御獎勵に御成り又近時(本月十五日以來)は毎日水泳を獎勵せられ此等の運動を恰も中學に於ける武道の如く正課として取扱はれ以て心身の練磨に盡力せられ候従つて吾々生徒の疲勞仕候事も夥しく學科の復習時間等は思ひもよらぬ事にて只豫習時間を一二時間得るに過ぎず候此の如くにて實に多忙

に多忙を極め心ならずも今日迄御無禮仕候誠に赤面の至に堪へざる次第に御座候當校にては愈々來月一日より暑中休業と相成る事に候へば孰れ近々歸省之上拜趨御伺候に及ぶべく候へ共不取敢御見舞旁々得貴意候尙時下氣候不順に候間折角御自愛の程祈上候草々頓首

六月二十三日

村上校長 玉案下

田中英熊

大正三年度會費收支決算

收入ノ部

- 一金七百七拾七圓 生徒會費
- 一金七拾參圓九拾八錢 職員會費
- 一金七圓貳拾九錢 雜收
- 合計金八百五拾八圓貳拾七錢

支出ノ部

- 一金四拾貳圓九拾壹錢 基金蓄積費
- 一金五拾五圓 短艇新造 同上
- 一金參拾五圓八拾壹錢五厘 劍道部
- 一金貳拾四圓拾壹錢 柔道部

金五拾四圓八拾參錢五厘 利子
合計金千七百六拾九圓貳拾參錢五厘

大正參年度短艇新造費積金

決算

- 一金百貳圓八拾五錢五厘 前年度繰越金
- 一金六拾壹圓六拾四錢五厘 本年度實收高

此譯

金五拾五圓 會費ヨリ蓄積ノ分
金六圓六拾四錢五厘 利子
合計金百六拾四圓五拾錢

大正參年度會基本金決算

- 一金百七圓四拾貳錢 野球部
- 一金六拾七圓七拾壹錢五厘 短艇部
- 一金拾壹圓八拾錢 游泳部
- 一金百六圓九拾錢 雜誌部
- 一金壹圓貳拾七錢 辯論部
- 一金六圓貳拾錢 書道部
- 一金壹圓貳拾參錢 圖書部
- 一金九拾五圓拾參錢 褒賞部
- 一金百五圓七拾七錢 雜費部
- 一金八拾八圓拾壹錢 臨時費
- 一金百八圓八拾參錢 剩餘金基金編入
- 合計金八百五拾八圓貳拾七錢

- 一金千四百六拾圓貳拾六錢 前年度繰越金
- 一金百貳圓四拾錢 寄附金
- 一金貳百六圓五拾七錢五厘 本年度實收高

此譯

金四拾貳圓九拾壹錢 會費ヨリ蓄積ノ分
金百八圓八拾參錢 全上 決算剩餘金

天下大物也。非一朝奮激所ニ能動一矣。其唯積誠動之。然後有レ動焉耳。

松陰

藝苑

奉祝俚辭

特別會員 安藤紀一

大正四年十一月十日、
皇上即位大禮。謹作擬賀表一古詩一、表奉祝之微忱。

表

臣某謹言。恭惟、
神聖建極寶祚與天壤無窮、與國揚烈。皇威與日月爭光。
臣某誠感誠恐頓首頓首。伏以、
天皇陛下御明聖哲允文允武、體神德而承天位、握乾符而臨寰宇。粵率遵明章、簡擇吉辰、昭告
皇祖皇宗之靈、大行登極統元之禮。臣某誠慶誠賀頓首頓首。謹按、
樞原之創業、祭政一致。
明治之更始、萬邦賓服。夫皇猷金聲、已敦本于初。洪謨玉振、固有待于今。

飢。追贈旌功烈。枯骨 恩露施。減赦分 嘉慶。罪囚 濺涕洟。大嘗宮恤恤。清朴遵先規。齋田既拔穗。始可 進饗醢。膳舍春歌起。明衣奉潔粢。鳳蓋過筵道。陪 從暮燭脂。天地加沈靜。庭燎動寒颼。神乎髣髴格。玉 幌不容窺。國栖淳素曲。鈴笛古音遺。參讚歌風俗。清 新節族宜。周旋如太古。孝享致虔祇。信知 皇國體。祭政本匪岐。大備供張盛。二條簇華輶。星輝金紫佩。雲湧綵繡帷。酒食豐且旨。海內聚珍奇。金華應 昭代。堪想伴郎辭。菟田武夫績。芳野神女姿。宴酣觀故事。五彩亂陸離。悠紀主基舞。獻壽侑瓊卮。萬歲太平樂。調長夜漏遲。共歡列星使。聖意萬邦知。賜饌覃州縣。普天 恩澤滋。大禮有終始。事畢謁 神祇。勢和城三 國。車駕日周馳。禱嘗承 丕緒。仁孝振 皇維。啓 端能濟美。純嘏奚復疑。國運同天壤。君臣福履綏。百千萬億載。寶祚永無移。

水の音

特別會員 金子乙助

氷 解 我が宿の笥の氷うち解けて今朝めづらしく水の音する

山家梅 光なき谷間の庵も咲き匂ふ軒端の梅に春を知

陛下篤念 先烈、以慎紹緒開端之儀。孝享 神靈以明治國教民之本。於是瑞穗之州福祿穰穰。平安之都衣冠肅肅。齋場進奏之祭、羣黎仰 宸衷之精一。饗殿陳樂之宴、中外祝 皇業之大成。猗歟 玄化之所被、山呼萬歲。天澤之所流、海躍魚龍。臣某有責行教育、何幸遇大典。無任誠懽誠祝并舞踊躍之至、謹具表以聞。

詩

神聖天猷遠。葦原 皇統垂。千秋傳寶器。一糸壯 帝基。隆隆大正運。既受累朝蓋。
天皇允明哲。億兆咸樂怡。旂蒙單闕歲。登極行大儀。率由有典範。設備飭官司。季春禮 廟寢。執幣先告期。國本農爲重。齋田問神著。田畯既齊戒。均服慎耘耔。美哉九月穗。穰穰若梁茨。平安十一月。山水瑞光熹。士女迎 鑾輅。懽聲盈九達。肅肅春興殿。掌典振鈴時。親拜維反始。崇祖厚倫舜。紫宸安 御座。彩飾列鳳麒。衣冠持劍箭。日月懸旌旗。
天皇宣明昭。首相奏壽詞。羣僚唱萬歲。三復撼丹墀。萬歲萬萬歲。嵩呼遍四陲。百姓謳歌響。振古未如斯。是日降 優旨。教孝養老衰。更問民窮苦。敷 惠賑寒

るかな

野春風 雲雀なく野路分け來れば咲き續く鈴菜の花に 春風の吹く

夕春月 網曳する聲もいつしか静りて夕月かすむ海つらの里

曙山花 松のかげいまだ小暗き山の端にほのぼの明くる花の色かな

山莊鶉 都人來ても聞けかし時鳥我が山里にをちかへり鳴く

風前薄 秋風に野邊のをすゝき穗に出ててそねく姿の面白きかな

霧中鹿 小山田の稻葉の上に立ちわたる朝霧がくれ鹿の音ぞする

路落葉 嵐吹く山下路にかし鳥の聲も聞えて散る紅葉かな

向埋火 冬の夜のさゆるも知らず思ふとちむつがたりする窓の埋火

雪中犬 降りつもる雪をけたてゝ狩犬の鹿追ふさまの勇しきかな

机 いろは歌習ひしころの忍ばれて古き机のなつ

かしきかな

面白く苔むしにけり我が宿の庭の立石年のつ
もりて

浪 濱松の梢わたりし風ながて夕しづけき波の音
かな

溪 山人の往來も絶えてましらく谷の下道村雨
ぞ降る

全 蕩かづら這ひまつはれるかけはしの危くか、
る谷の岨道

全 鮎走るながれに添ひて幾めぐりめぐり來にけ
む谷の細道

船 君が代は湊せばくもなりにけり出で入る船の
足しげくして

孤村 眞金路もまだ開けねば世の塵のかゝらて清き
山中の里

對鏡 むらさみの心もうつる心地して清き鏡はやさ
しかりけり

閑居苦 おもしろき庭の岩が根年ふりて蒸す苔清し山
かげの庵

古寺庭 木も石も苔の衣を重ねつゝ世の塵すぬ古寺

學生の輕き浴衣の後姿を見ては、彼は河野ならずやなど思ひし事もあだ
なりき。悲しといふもおろかななり。

彼は廿年に滿たざる若葉の齡を、無常の風の吹くにまかせて、忽ち黄
泉の客となりぬ。今更古き事の思ひ出されて、せきくる涙の止めあへざ
るをいかにすべき。彼は温厚なる人なりき。親切なる人なりき。或る夏
の眞晝、菊ヶ濱の砂の上に、紺青の海の景色を眺めつゝ、將來の希望ど
も語らひて夕暮の立籠るをも知らざりき。彼が福岡地方への修學旅行の
土産には福岡名所繪葉端書を持ち歸りぬ。嗚呼菊ヶ濱の言葉未だ消えや
らぬに、その人は已に往きぬ、土産の繪葉書は終に亡き人を偲ぶ形見と
はなりぬ、ああ。

彼は一人の母と一人の兄と一人の妹とありたり。母は彼等が行末をも
見極めて歸らぬ旅路の人とはなりぬ。兄妹相擁して嘆きしも、いかにせ
んすべも荒波のよるべき可憐き腕に野邊の送りをすませぬ。其後彼は
さる家の養子となりて東京の或る學校に入學し、兄妹遠き關山の雲に涙
の袖を分ちぬ。秋の夕、月影青くして澄み渡る蟲の聲を聞きし時、冬の
朝、北風枯木を鳴らして膚のきれんずる思せし時、一穗の寒燈の下、母
の針仕事し給へるかたはらに侍りて、涙ながらに語り給ひし亡き父の昔
話や、雪の朝、母の情の籠る暖き朝餉の膳に楽しく語り給ひし昔の夢や、
思ひ浮べて紅涙袖を絞りつべし。嗚呼、其人や今は現にもあらぬ白玉樓
の父母の膝下に短き人生の夢に泣く。嗚呼、薄命の兒よ、浮雲千里遠く
飛んで心なし。

七月廿八日、黎明星を踏んで杖を菊ヶ濱に曳く。海上模糊として淡く
漁火の色白し。波聲穩に、履聲時に砂頭の蟹を驚かしむ。松林の下、露
一點膚に落ちて清冷體を透す。紅輪半ば東天に現れて、金波浩々瀟々た

の庭

暑休 一日一事 五學年 吉田 操

七月廿五日、徒然なるまゝに英雄小説松平長七郎を讀みぬ。中に西行
法師の鳴立澤の和歌あり。已久しき間知らまほしく思ひ居たるものなり
これにならべて、作者明ならざるも、同じく鳴立澤の和歌あり。

心なき身にも哀は知られけり
鳴立澤の秋の夕暮

作者不明

夕暮をしのぶ昔のあはれさや
鳴立澤の春の曙

鳴立澤の語已に寂しき調なるに、秋の夕暮と添へしところ、秋の哀の
身にしみて、そぞろ涙の催さるゝ、さすがに法師は風騷の人なりけり。
又の歌、作者詳ならざるも、夕暮を偲ぶ昔のと云ひ起して、その語の悠
悠迫らざる且つは法師の秋の夕暮の寂しさに、先づ心を悲しき思に捕へ
置き、鳴立澤の春の曙と歌ひては、あだかも消えんとせる燈火のごと
く、一度は鳴立澤の語に蕭々たる秋の夕暮を悲ましめ、春の曙と止めて
は、急轉直下忽ちほのぼのと明けゆく澤の春景色に、平和胎蘗の思油然
たらしむ。嗚呼又非凡の妙手ならずや。

七月廿七日 亡友河野君の事を懐ふ。老小不定は憂世の慣とはいふも
のから、餘りにもはかなきものは人の命なる哉。河野君といふは己が友
にして、二年の昔、袖を東西に別ちてより、互に何の音信も無く、星移
り物換り、安否の程を知る由もなかりしなり。今日此頃歸省せる多くの
り。蟬聲漸く樹間に喧し。

七月二十九日、空母の人の命、五十路六十路は只一睡の夢の間なり。
若葉の蔭に永き行末の望にほゝえみし昨日の美少年も、今日は桐一葉風
無きに落ちて、頭上いつしか霜白し。人の心これを思ひて、或は浮世の
はかなきを嘆きて世を遁れ、或は一寸の光陰を惜みていそしみ勵む。人
生元よりはかなし。これを嘆きて世を通るゝは、果敢き世を益々果敢く
するに似たり。果敢きながらも五十路六十路の春秋は過ぎたなむもの
を。光陰を惜みて勵みなば、文の上にもせられて、幾千代かけて生き
ながらへむ事もやあらむ。されば人々よ、やがて死ぬ景色はみせて鳴く
蟬にならひていそしみ勵まむ哉。

七月三十一日、一坪ばかりなる畑に植ゑし茄子の、土かひ養ひし効著
しくあらはれて日々に延びゆく様面白き、殊に朝まだき露を宿して生
き々たる姿の我を迎へし涼しさ爽かさ、身にしみて心地よし。葉蔭に
微笑みし紫の小花、いつしか散りて、可愛き茄子と化身せしが、やう／＼
ふとりて三寸位の長さとなりぬ。摘み取りて籠に盛れば、滑なる膚に濃
紫のつや／＼しき、到底八百屋の店にならべられしものゝ及ぶべきにあ
らず。日々に著しく延びふとりゆく様を見ては、己が身の進歩のはかば
かしからざるをかこちもし、骨折し甲斐ありて、太き茄子の實りしを
見ては、因果應報の理を悟りもせしは皆菜園の賜なり。茄子の味の美と
共に菜園の眞味を味ひ得て樂し。

八月四日、黄昏の氣の沈めるをゆがせて、小き響を傳ふる蚊の羽音を
ゑらすごみを帯ぶれども、又柔さのほの見ゆるもの哉。血を吸ひて胡蝶
子の様なるを潰せし時の心地えもいはれず。されど捕り逃して、蚊の形
せる銀色の粉の掌に着きたるはこよなう口惜しきものにて、座敷の中を

追ひまはして、隙子にとまれるを力を籠めて打ちたゞき、太き穴を隙子に開くこともやあらむ。新しき蚊帳の香りはゆかしく、蚊遣火の窓より軒に傳るは面白し。蚊もあながちに憎む可きものは。

八月十日、水泳場の寒暖計は已に古りて、目盛りも定かならず。針金もて竹の片にしかとくくられたる姿は、あさましくもまたあはれなれど、己がつとめは怠らて、何十何度と示せるを水の中にひたす時は、見る見下るきび／＼しさ、人も亦かくあらまほしきものなり。みえずがたはいふに足らず。頭に霜のおけるをいとはて、人のつとむるこそ尊けれ。

八月十二日、世の人は蟬の聲をさわがしといふあり。されど晝寝の夢に通ふはいとどかに、葉蔭の讀書にうみし耳には面白き調なり。子供の紙袋つけたる竿を片手に、ぬき足して聲をひそめうかゞひよりしが、捕り逃して力なく見上ぐる様のかしく、幼かりし昔も思ひ出さる。くもの網にかゝりし羽根の夕風にゆらぐはこよなうあはれなり。

八月十三日、高き山の頂より見下せば、下界はさながら箱庭のごとく家は小石よりも小さく、目抜きの大道路を人の行來する様は、蛸の匍ひし跡を蟻の歩くにも似たり。白蝶の池の水を飲むが如きは白帆の浮べるなり。高き煙突の立ち昇るは線香のごとく、大川の曲れるは白き眞田紐にも比ぶべく、社の松の木は小石のかたはらに杉苔の生ひしが如し。只青空の廣がれるのみぞことさらに大なる心のすなる。空かける鳥は下界を見下して如何なる感をか抱くらむ。

八月十五日、夏を一個の人間に比ふれば、赫々たる日光は爛々たる眼光にして、白雲の累々たるは鬚髮密生して銀光を放てるもの、金山綠樹鬱々として大河麓に屈曲せるは、彼が紺の衣服に白縮緬の帯を纏ひて横

する、彼も亦稀代の英傑たるや明なり。吾人は彼が手段を捨てて遺訓と着實なる實行者たりしとを取る。英傑素より神に非ず。長を捨て短を取らば、君子英雄と雖も學ぶべからず。短を捨て長を取らば、奸雄愚夫時に學ぶべし。

八月廿四日、晝寝せる友の面を覆もて悪戯し、しばしをかきさしに腹を抱へしが、己も何時しか睡に落ちぬ。やがてさむれば、友は已にさめて机により書を讀み居たりしが、折節横目しては、くすくすと伏し笑ひぬ。ひそかに友の面をのぞけば、己の塗りし墨は痕をも止めず。こはと思ふと共に己が面の心地悪く引き付くるに氣付き、鏡をのぞけば、己が面とも覺えず、墨黒々とさながら化物のごとし。プラスマイナスイクオールゼロとて笑ひ崩れ、晝の徒然は慰められぬ。

八月廿五日、日獨戦争我が科學界の恐慌を來し、狼狽直に之が研究に従へば、近時漸く發明發見の曙光を認むるに至りぬ。必要は發明の母。然り必要は發明の母なり。然れども必要に迫られて發明するは凡なり。吾人の理想は發明し、然る後用途を發見する也。

八月廿七日、金剛事件未だ耳底を去らざるに俄然演説問題突發す。國家の大政に參與して國民の儀表たる者、何ぞ彼等が心底の腐敗せる。嗚呼帝國の前途憂ふべし。青年の覺悟益々緊要なり。市井往々粉面薄髮宛然婦女子に類する青年を認む。慷慨の士須らく鐵腕を奮つて、彼等が醉夢を覺醒すべし。

八月廿八日、友の頬にとまれる蚊を殺さばやとて、力を込めて打てば友は驚きてその顔のをかしさえもいはれず。蚊は靜かなる音たてゝ逃れ去りぬ。

臥せる姿か。彼が胸度は蒼穹遙遠として展開せるより潤し、炎々たる烈日、習々たる涼風、彼は威風凜凜萬物懾伏し、温容玲瓏玉の如く、幼童能く之に親む英雄の佛を存す。而して彼が心中圓き事西瓜の如く、白き事岩に碎くる急瀾の如し。

八月二十日、豊臣秀吉傳を讀む。彼は尾張中村なる水呑百姓の倅と生れしも、蚊龍は終に池中のものならずとかや。藤吉郎秀吉、一度好漢信長の僕となるや、吞舟の才は機に應じ時に従ひてあらはれぬ。或は清洲の城普請に、或は桶狭間の關擊に、或は姉川の合戦に、而して漸く群を抜き衆に超え、下僕藤吉郎は終に羽柴筑前守秀吉となりぬ。西征の軍に將として高松の城を水攻めにやましし折しも、突如本能寺の變は傳りぬ。直ちに和を結び軍を反して、山崎の合戦に忽ち光秀を討ち果せしが人の運命こそ誠に奇しものなれ。本能寺の變は自づと天下の政權を彼が手に歸せしめたり。彼一度大權を掌握するや、或は聚樂の行幸を辱らし、或は供御を奉獻して先主の遺志に報ひ或は大坂の金城を越して天下の泰平を志しぬ。大政大臣を拜し關白を辱らし、身は人臣の榮を極め、齡は已に六十を超えたりしも、彼が霸氣は益々盛んにして遂に征韓百萬の軍を起しぬ。軍扇一度之を拂へば、鷲林八道明蒙古懾伏して更に生氣無し。嗚呼何たる痛快兒ぞや。然るに好事魔多きは人生の常にして、天は終にこの英雄に齡を假さず、遠征未だ功をなさざるに、名古屋城頭英魂空しく天に歸しぬ。嗚呼惜い哉。

八月廿一日、徳川家康傳を讀む。彼が陰險なる權謀術數を弄して、大坂を屠り、天下を掠奪し、一度大權を掌握するや、自家經營にのみ孜孜汲々として、終には一萬萬の皇室を制し奉りしは、斷じて之を敬すべからざるも、能く泰平三百年の根柢を築き、死して別格官幣社に廟食

り。蟬の聲も何事か語るが如く哀れを帶ぶ。

八月廿一日、終始は宇宙自然の限界にして相一致して、一點をなし、その間は一つの圓周をなす。されば宇宙間に介在する森羅萬象一つとしてこの理を受けざるはなし。太陽地球月其他總ての天體皆球形にして、その軌道は圓周をなし、太極は弓形をなして、支那人之れ者焉と稱せり。生は始なり死は終なり。幼年時代は老年時代に、青年時代は壯年時代に、其々對稱し、而して生れんとする瞬間と死せんとする瞬間とは相一致す。即ち生死は一點にして、幼若壯老の時代は圓周を形成する圓弧の各部分なり。苦と樂と孰か始めにして孰か終なる。苦の極終に樂と變ず。而してその瞬間は認め難し。即ち苦樂一致して一點をなし、その間は一の圓周なり。西に進行すれば終に東に出で始點に歸着す。歸着點は終點なり。始點終點の間、圓周ならざるべからず。冷熱の極判然たらざれば冷熱の極判然たらざるが如し。温と寒とは凡人に對稱す。今夕時計十二時を報ずる最後の一點は休業の最終點にして、始業の始點なり、吾輩今後は大半徑の努力をなして、大圓周の終點に達せん哉。

發休 一日一事錄 五學年 阿部 鞆 音

七月二十日、午後、同人二三を伴ひて、指月山後の大瀨に至り、蝶蝶などあまた得たり。こゝに奇なる一事ありけり。そは横に筋の入りたるいともしき魚の我が乳を襲ひ脛を噛みなどしたる事なり。人の子の乳を求め脛をかちるを想ひうかべていとをかしかりき。

七月二十三日、曉起、大正四年度臨時大掃除を爲す。床板を撥して塵埃を一掃す。銅鏡一個を得て、その復活を喜ぶ。午後検査官來り、乍ち

通過す。而かも近隣不合格の家多し。

七月二十八日 夕涼かた／＼、管弦祭を觀んとて菊ヶ濱に行く。長汀曲浦、盡く人も埋まりぬ。朝鮮館賣の寝言らしきもの、さては飽湯賣の聲、淺草名物カリ／＼の歌など聞きて、二更にもなりぬる時、提灯數多點けたる船の管弦奏でつゝ河口に入りたれば、人々拍手打ちて拜みけり。むくつけき男の大桶肩にしたるが、賽錢を大聲にて請ひ求むるものとをかし。我は、無病息炭の爲にとて、大いなる御幣にて頭拂はれたれど、賽錢上げざりければ御利益の程もいと心細し。

七月二十九日、午後、鯨七十六尾を釣る、而かも大なるもののみなりき。余は、昨日より、阿部式鯨釣法と號し、假りに之を浮釣と云ふを案出せり。沖に出づる事三町、體を浮べ、立泳ぎにて釣る。水中別に眼鏡を用ひ、大なる魚のみを擇んで之を釣る。常に魚に従ひて行く。鯨數千、壹尺になん／＼たるもの之が先頭たり。餌一個にて、多きは八尾を獲。意ふに鯨釣を爲す者は多し、然も浮釣をなす者は只少年に限らる、蓋しそれ輕捷事に當るを要すればなり。

七月三十一日、夕景、八時半、用辨あり、初めて荻發察署に到る。暑氣甚しく八十度を示す。署内にて耳に入る所は悉く異様に感ず。曰く「明日の護送は何人之に任ずるか」曰く「某は前科者、某は罰金七拾圓、某は證據不充分にて無罪放免、今夜住吉曲馬興業の廣告提灯行列は參加人員百二十名なり」と。目を轉ずれば、住吉祭禮雜沓調査簿送願番簿戸口移動調査簿等用意周到なるに驚く。署を辭して歸る。途上提灯行列あり。

八月三日、夜、興業物樂隊の響に、足をそらざまにし、吸ひ込まるゝやうにして住吉境内に入りけり。天下一品珍人會とて、指の三本なる者

るを知らず。二更前、獨り西の濱に上りて火葬場に到る。既にして火葬行列來る。乃ち衆を呼び火葬を見ん事を促す。武田氏のみ我に従ひ、他は尙船に在り。人散ず、即ち火葬場に到る。火焰赫々、一種凄愴の氣を帯びて一同の顔を照す。爆竹の如き音と共に棺破裂して骸現れ、火中に双脚を没入す。燭を炙るに彷彿たり。皮膚黒く焼け、肉白く現れ、脂肪流れ燃えて觀者の衣袂爲めに悉く臭く、煙燒け落ち、足首薪上に轉ぶ。是に於て脂肪進る事甚しく、右足亦折れ、人をして慄然たらしむ。火は愈々燃え、響音爆々、紅蓮の煙を通じて顔面の焦ぐるを見る。尋て腕も亦火中のものとなれり。

「火葬場や……」の拙き洒落も座興の功を奏せず。余はおぼるげに覺えたる白骨の文章を誦す。「嗟人生の無常一に何ぞ茲に至るや」と感慨久之。船に残りし三人、歸舟の遲きを憂へて來り、現場を觀睹して愕然たり。遂に火葬場を辭し、隱坊が家にて茶を喫し舟に乗る。蟲聲唧々月曇りて哀愁具さに至る。話頭また唄々として宗教を談す。

遂に河岸に船を繋ぎ、成田氏宅にて解散す。歸後、就寢したるは實に三更の頃なりき。忽ち見る一個の骸骨、踞跚砂丘に攀ちんとして能はず肉爛れ骨焦げ形相凄然たり。余愕然として夢醒むれば、流汗寢衣を拭し心臓の鼓動殊に高く、火葬場の臭氣尙殘るを覺え、時計變々の聲を聞くのみ。

八月二十八日、朝いと早きに、蕪賣る女來たり。彼の云ひけるは、「妾は煙管を用意す、願はくは煙草給はれ」とて、煙草を示せり。煙草吸ふ者も居らず、煙草のあるよしなれば與へざりしに、「されば蕪を買ひてよ」とてひとつ／＼値など云ひたり。「四十八錢なり」と云へる蕪を十五錢に値切りしに、直ちに、「されば負け置くべし」と云ひたり。容易く負

を見せて三錢をとるは餘りに情無し。活動寫眞の幕上る毎に、口開き爪立てて見るもいとをかし。濱崎吹上にて、山車の衝突より喧嘩ありて、

巡査その一人を連れ行きたり。雜沓調査簿第一の記入なりけらし。

八月六日、夜、陰曆乞巧奠の提灯を街上に觀る。華燈陸道の如く、美觀言はん方なし。

八月七日、十二年昔の今日は母の逝き給ひし日なれば、朝露踏みて墓を弔ふ。水泳講習會より歸りし程に、恰も老僧讀經の聲洩れ聞えてあはれいと深かりき。

八月十日、午後、水泳よりの歸るさ、一匹の鼠の水邊に死せるありけり。鼠鼠河に飲めども、腹に滿つるに過ぎずとの莊子の文とは異りて、

是は腹いと膨れ、飲過ぎの體なるはいと氣の毒なりき。

八月十七日、風邪の爲めか鼻惡し、玉木病院に診察を乞ふ。院内の空氣流石に他所と異に顔色蒼蒼然たり。外科室より兒童の泣聲聞ゆ。

八月十八日、醫院より歸りしに、水泳助手謝禮として金壹圓を買ひたり。獨力にての金儲けはこれが初めてなればいと尊き心地したり。

八月十九日、今日より世良醫師の診察を乞ふ。鼻茸の診察を受けて、始めて數學の拙劣なる所以を知る。長らく山田先生を煩すは蓋し此が爲なり。

八月二十日、夜世良醫師の許を訪ねて、「鼻茸の治療、請合にて幾許を要するか」と問ひたるに、「それは、餘りに家の普請めきたるわざなり」とて笑ひたり。

八月二十一日、午後、武田弦介氏宅にて、親友六人鳩首して追懷談をなす。西林氏後れて到る。即ち汁粉を喫し、西林氏より受けたる西瓜を食ひて相談す。夕食後、船を玉江川に泛べ月を賞す。放歌詩吟に時の移

けたれば、尙高きにやと思ひて又値切りたるに、負からずとて戶外に一歩踏み出すや、小聲ながらもほがらかにいとなまめかしき鼻歌歌ひつつ衣の袖ひるがへして、何處へか立ち去りたり。

我が見たる朝鮮の風俗 二學年 井上 盛義

朝鮮の風俗は、現今が、日本の平安時代と同様なる傾きがあるといふことを學んだ。我の見たる朝鮮の風俗が、如何に日本の今より後れて居るかにつき述べやう。併し我の見たる彼地の風俗は、朝鮮各地の風俗に非ざりて、唯京城附近のみなるので、其の範圍の狭い事を斷つて置く。

先づ第一に、彼の國人は、勤勉なるか、或ひは、怠惰なるかに就いて述べやう。

朝鮮人は、一方から云へば勤勉である。大きな建物等を建てるに、多く朝鮮人夫を役す。人夫が、土・木・石・煉瓦等を運搬するには、朝鮮特有の「チゲ」を用ひる。此の「チゲ」は、當地などに用ひる「オヒーコ」の様な物であるが、「チゲ」は、物を上げ下しする時に、倒れない様に支へる棒がある。此の「チゲ」にのせる物の大きい時は、其儘で、じやりや礎等の如き小さい物の時は、此上に籠をおいて、其の中に入れて、背負ふのである。此の「チゲ」を終日背負ひ、人夫となり、或ひは、物品運搬の用をなして渡世するものを「チゲクン」といふ。不思議ではないか、此の如く下等なる労働人に向つて「君」をつけるのは、併し、之は意味あつての君では無い、唯謙云ふとも無しに、此の様になつたのだ。

そこで、何か重い物、或ひは多大なる物を、遠方に持ち行く時は、すぐ通へ出て、「チゲクンチゲクン」と叫ぶ、すると、其處らにぶらついて居た彼等は、この聲を聞くや、否や、二三人飛んで來る。其の時、早く來

た者が勝である。これに負はせて、持つて行く。實に重寶で、貨錢が大變安い。我のはじめて渡鮮した時には、未だ其の頃は、日韓併合以前であつた故に、汽車は、釜山の棧橋迄通じてゐない。それで、停車場迄歩いて行くのであつた。その道へ、彼等が兵隊の様に並んで、皆「ちよんまげ」を結つて、恐しい目を見張つて立つて居る、其れが大變恐しかつた。

そこで、大きな會社をはじめ、物の工事には皆この「チゲ」を使役する。所が、彼等は朝早くから、夜遅く迄、よく働く。併し、少し手間がかゝるのが缺點である。

内地人は、此等の下等労働人を嘲罵する傾がある。就中、店屋の小僧丁稚に多い。能くこんなものを見るとがある。小僧等が、大きな荷物を、某宅へ持つて行くと店主などから命ぜられた時には、店先は、いや／＼持つて出るが、途中で「チゲ」に脊負はせて、自分は烟草ども吸つていばつて歩く。やがて、其の荷物を届けると、二三錢投げつけて置いて、飛んで歸る。「チゲ」はどうすることも出来ずたつた二錢三錢位の金で、甘んじて居らねばならぬ。

しかし、朝鮮人の中には、づるい奴も少くない。其の身健康にして、働くだけの力を持つてゐても働かず。乞食の群に入る。故に、京城等には、乞食團が澤山ある。乞食でも、乞食の類が別で、泥棒をする。道路を、炭・明太魚等を運搬するのを見つけると、後から行つて、人の見てゐても、かまひはしない。炭なら依に穴を開けて、二三本引抜いて行く。そして、それを出店等へ持つて行つて賣る。併、近年警察の目が嚴格になつたので、もう、さういふ事は出来なくなつたので、乞食團の減少に引換へ、不良少年の群が多くなつた。又彼地には、不具者が多い。足の

纏てつく。これはよく朝やるが、我等の登校の際のよき見物であつた。又「モヤシ」といふものを作る。これは小豆大豆を蒸し、發芽させた所を食べるのであるが、大變安くおいしいものである。

朝鮮の木挽は、日本と大いに異つてゐる。木挽は二人で一組を成し、切るべき木材を斜に縦に建て、一人は木の上に登り、一人は下で、交る交る挽き合ふのである。それで鋸も構造を異にしてゐる。大工は「鉋」を逆に使ふといふ點において異つてゐる。我々は鉋を向ふから、自分の方へ引くの、彼等は自分の方から、向ふへ押して削る。其の他、僧侶豆腐屋等に就いては、別に記す事も無い。

朝鮮人が食事をする時には、箸と匙とを用ひる。そしてつく／＼んで食べる。彼等は大變肉類を好む。故に、牛を大變殺す。随つて牛皮の産がある。京城では、日に何十頭も殺す。其の中、内地への供給も少くはないが、内地人の方は唯肉のみである。朝鮮人の方は何でも食ふ、目玉・腸・血等捨てる所は無い。其の他猫でも犬でも食ふ、序でに犬殺の事を記さう。町を歩いてゐると、彼等は何處でもかまはず、網を投げて首にひつかけて、ぐる／＼廻はして地にたゞきつけた所を、他の者が大きな棒で首を打ちつける。犬はもうたまらない。白い牙をむいて「キャン」と一聲、もう彼世への行客。實にこれを見てゐると、其の殘酷な殺方を憤慨するの情が勃々として起る。

着物は、上衣と下衣とを用ひるが、婦人の上衣は、大變に短いもので、脇の下から一寸程あらう。下衣は高く胸の方迄上げる、けれども乳房が出る。所が、乳房の出た方が偉いのださうである。男の上衣も女のように似てゐるが、少し女より長い。下衣は男子は股引のみであるが、女子は其の上へ袴を着ける。「チョンガー」(通常鮮童と記す。)の上衣は大抵赤

無い者・手の無い者・髻等色々な者が居る。此等の不具となつた原因は、少時の不孝に因るさうだ。不孝のため、親はその子の、足を切り、手を切りするのださうだ。若しこれが事實であるならば、慘酷極まる仕業では無い。

彼國人の、日本街にて商賣をする時の叫び聲は、日本語と朝鮮語と交ぜて云ふ。例へば「鹽や／＼」といふのを「鹽さりよう」と云ふ。故にさりようといふ朝鮮語は「や」と日本語に譯せらる。夏は大變に「まくわ」が多い。これを食べつて、飯の變りとするのは、丁度、甘露を食つて飯に當つると變りはない。野菜賣り等は例の「チゲ」にのせて賣る。其の外瓦賣・壺賣等も同じ。

當地にも居るが、彼地の名物は、朝鮮餛飩である。當地でこそ、こんな重い屋臺見た様な物で賣るが、向ふではあんなことをして賣りはしない。平たい箱の中へ入れ、紐で前に結び、さうして歩く。その呼出機械ともいふべき物は、大きな鈴切りである。此の鈴を「チヤン／＼」と鳴らして、人を呼び出すのである。

朝鮮語で居酒屋のことを「スリチビ」といふ。ここは居酒屋ばかりの商賣ではない、木賃宿料理屋も兼ねてゐる。チゲ君をはじめ、旅行者は皆これに泊る。飯は「サバル」といふ。白いちよつと日本の小さい鉢位あるのに、盛切り一杯で、大抵小豆飯である。漬菜を「キムチ」と言ひその漬物の中には、魚の頭でも、甘い汁でも、何でも入れて、うまい様にする。中でも、蒼椒を澤山入れる。彼等が餘りに愚鈍なるのは、これが原因であらう。そして食事の際は、此の「キムチ」の外には、餘り料理はない。

餅をつく時には、我國では白てつくが、向ふは厚い板の上で、大きな

が多い。男子は外出の時に、日本で言ふ羽織を着る。これは上下織きで上張りの様である。紐は右胸の所へ縦結びに結び、其の餘りの紐を長くたらし。女子の外出の時は、被物を被る。これは男の羽織と同じである。袖も着いてゐる。それを頭から被り、顔だけ出して歩く。それで、袖は不用である。大抵此は飾であらう。祭日の時などに用ひる衣は、大變派手なものを着ける。就中、子供は三原色の色ばかりで縫ひ立てたのを着る。殊に袖等が目立つ。帽子は「シルクハット」によく似てゐる。所が此の帽子は、元服した者で無くては戴かれない。乃ちあの人元服者か未元服者かといふ事がこれで分る。所が此の帽子は大變値が高い。その證據には、喧嘩の時には、これをぬいで、組みつく。帽子をぬぐと、「ちよんまげ」が出る。そこで喧嘩の時は、都合がよい様で悪い。その「ちよんまげ」をどちらも握る。すると頭の自由がきかぬ。足の喧嘩になつて、けりあひをやる。喧嘩が済めば、又帽子をかぶつてしまふ。そしてこの帽子の中には、額を固くしめた布の様な黒いものがある。此の様に値が高いので、元服した當時は簾で作つた帽子をかぶる。朝鮮人を二大區別して、元服者と未元服者とに分け、元服者は「ヨボ」と「ヤンバン」の二に分れる。未元服者は、所謂「チョンガー」で、常に輕蔑の念を以て、元服者に迎へらる。それでも堪忍して居らねばならぬ。

「ヤンバン」夫婦の中、男子を「ヨンガミ」、女子を「ネンガミ」と言ふ。「ヨボ」は大抵労働者、商買人中の元服者である。未だ妻とならぬ婦人を「キヂベイ」といふ。此の頃の鮮童は大抵してゐるが、以前は皆垂れ髪で、着物も、女子と左程異らなかつた。髪には共に一種の油をつける。多くつけるので、容の所は眞黒になる、朝立派な白衣を着ても、晝頃には最早黒くなつて居るといふ具合であつた。現今は大方廢れた。

朝鮮人が、白衣を洗濯するのは感心だ。あれ程不潔といはれてゐる彼等も、衣だけは清潔にする。如何に汚穢身にしみる冬の日も、又如何に苦熱やる時ない夏の日も、決して洗濯を怠らない。朝暗い頃から、バタリ／＼と洗濯をしてゐる。彼等は棒で衣をたゝきては、水につけ、又石の上へ上げて、たゞく。この水も小川の水を利用する。自己の家の附近に、小川がなければ、遠くても其處迄行く。

朝鮮の家は、皆温突建である。先づ地盤石を引き、その上へ小石と土壤とを以て壁を築く。壁といつても、低い事は當然の事である。そしてその上へ平い極薄い石を架け渡す。又この上へ土を塗り、乾くのを待つて、造紙を張る。此んな間が幾つも出来る。屋根は低く、天井板なく、唯色紙を張り渡すのである。この温突は、下から火で温めるのである。そこで、その温りは室外に出ない様に、入口一、窓一ぐらひである此の温突の効も或る程度迄よいが、度をすぎすと頭痛がする。それもかまはずにをるから、愚な一つの理由になる。木を焚くから割木が大變澤山いる。山のはげはこれからである。

彼等は煙草を吸ふ。きせるは大變長い。これの長い程身分が上であるさうだ。又金を勘定をするのに、土の上でする。併しこんな舊例は廢されてしまつた。

服物は皆縁がある。下駄高下駄草履などがさうである。こは皆緒といふものが無く、先は兩方が一所になつてゐる、それで足指が重なつてゐる。これは又他と異なつた點である。旅行は汽車舟馬與などで、朝鮮馬は大變に小さく、「驢馬」程しかない。

墓地は假頭見たやうに、丸い山である。汽車などで旅行すると、車窓から見ゆる山に、假頭の様な小さい小山があるのが見える。それが墓地

仙崎港の白壁が、きら／＼輝いて、懐しき萩の連山は、霞の中に模糊として立つてゐる。行くこと暫時にして、青海島に着いた。小舟は、一千尺の断崖を仰ぎながら走る。

本州本土は、遠く南の涯に消えて、數百間の彼方の岬を廻れば、澎湃たる水あるのみ。險崖は、處處に濼を作り、怪松を延ばしめて、懦夫をして戰慄せしめる。陸を離ると僅に一步、海は數十尋の深碧を湛ふ大の奇岩矗立し、怒れる浪は岩を咬み、吾等が小舟を呑まんとしてゐる。舟は已に沖浦に着いたのである。遠き海上には、點點と白帆撒けるが如く浮びて、水天一碧の彼方に、見島危く立つ。日は高く昇りて、岬の絶崖を照せば、赤き鋭角の岩石は、一様に人間の小さなを洪笑する如く聳え立つ。千古不可解の深碧は、之れ亦笑つて人間を呑み去らんとするやうである。

危く顛覆を免れて、岬を廻れば、東方、相島大島等の諸島、恰も豆を撒いたやう、奇岩は更に奇に、險崖は更に險に、深碧は更に濃くして、眼界一物の遮るなく、見上げれば、絶崖幾百丈、巨岩は口を開いて、今にも崩れ落ちんとする、その下、三個の怪洞あり、洞穴の深さ計られず深碧の浪、遠く忍び入りて、轟轟たる響き聞ゆ。食後、快談數刻、積日苦學の勞、何處にか洗ひ去られて、精神の爽快を覺えた。

海上の航走、更に四海里、沖浦を後にして歸途に就けば、夕靄、靜かに岬を包んで、出て行く漁舟幾十艘、日本海の夕風に、吾が小舟もゆるやかに走つてゐる。午後七時家に歸る。

御茶屋の池 二學年 磯松嶺造

越ヶ濱なる嚴島神社の前面にある池を、御茶屋の池と稱す。後に死火

だ。我々の見ると、同じ様な形をしてゐるのに、どれが自己の家の墓地であるかゞ分るのであらうかと思はれる。
人の死んだ時は、泣き男が附く。又夏などは、江邊の沙地で全身をその中にうづめ、顔だけ出して、太陽を浴びてゐるのがある。これは砂地療法とて老人に多く行はれる。

沖浦に遊ぶ

二學年 萩原新市

萩から西七里、深川といふ村がある。それが即ち僕の故郷である。深川村は深川灣に臨んで、曲浦三里、白砂青松の奇景を宿して、海濱への遊客を待つてゐる。飽く迄、濃碧に澄み切つた灣口には、突として、青海島が緑の姿を横へてゐる。西海島の西端を沖浦といふ。絶景を以て名が高い。

僕が、友人三名と共に、沖浦遊覽を思ひ立つたのは、八月十一日であつた。晴れ切つた青空に、残月低くかかつて、黎明の微光、幽に、東天に輝く頃、小舟は走り出した。ぼか／＼と、船頭が頬冠のまま吸ふ煙草の火が、夢の様に赤く美しく光る。船は帆をゆるやかに膨らして、細浪がひた／＼と叫くやうに舷を打つ。そよ／＼と吹き来る微風に、浴衣一枚の身は寒い位である。何といふ美しい夜であらう。白い海邊は、絲のやうに長く、松の並木は、只、黒く塗られてしまつた。園境の山山は、まだ深い眠に落ちてゐる。友のMは、詩吟を始めた。僕は、ひた／＼と舷を打つ海水に、手を浸して、暖い柔い快感に酔つてゐた。と何時とはなしに、軽い眠に落ちてしまつた。

ふと目醒ると、夜は全く明け放れて、海も陸も緑の色に輝いて、偉大な太陽が山を離れようとして、永く永く、海上に赤い一線を投げてゐた。山の笠山を負ふ。

往昔、毛利公遊樂の地たりき。怪岩奇石集りて峴となり、池は鏡の如く清く、蒼然たる綠樹の影を宿し、中央は色編碧なり。内に一小島ありて、此處にまた一祠あり。祠は小なりと雖も、一種の風趣あり。其の他燈籠・鳥居・石橋等、一として奇ならざるはなく、妙ならざるはなし。所々に風穴ありて、盛夏尙寒きを覺え、嚴冬は是に反し、温暖なり。池中に鯛・ばら・ちね等大小數多の魚群をなし、彼方に跳ね、此方に泳ぎ、此處に浮び、彼處に沈み、人をして目を怡し心を樂ましむ。

されば來り遊ぶ者、四時跡をたゞず。特に春の櫻の折、夏の盛の頃は瓢を携へ、杖を曳くもの最も多し。萩に來る者は、必ず此處を訪ひ、其の美觀を賞せざる者なし。

略

二學年 櫻井敬三

鷄鳴に夢破れて、床を離て戸外に出づれば、寒氣身を襲ふ。仰いて天を望めば、弦月潔として、梅梢に残る。肌をつんざく寒風は、遠くまだ近く、人語を送り來り、空氣新鮮にして、神氣爽快なり。古人の朝を賞び、又利用せしは、まことに理あるかな。時を經るにしたがひて、東天益々白み、四邊の色又刻々に變ず。この景や、吾人の志を得て、その目的に突進しつゝあるが如し。已にして、太陽は一點の輝爛たる金光に輝かれ。瞬時にして、その赫灼たる雄姿を現しぬ。忽ち見る。一團の黒雲、遠く西山の方に走れるを。これ非道者の、正義者に群易して逃げ行く姿か。予この自然の大觀に對して、多くの教訓を得しを喜ぶ。

説

林

教育勅語と士規七則

今年十一月十日をトし即位の大禮の行はせらるるや、我校は永く之を記念せんが爲に、校門の内一小丘を築き、上に當地の先覺吉田松陰先生の士規七則を刻せる石碑を建つることとなり、大禮の當日萬歳三呼の後其起工式を擧げたり。左の一篇は即ち該式場に於て予が我校の生徒に對して爲したる演説を筆録せるものなり。説く所膚淺皮薄固より識者の一顧に値するに足らざるべしと雖も、聖世に生れ曠古の盛典に逢遭し歡喜措く能はず、乃ち謹んで先帝の聖勅と前賢の遺文とを祖述し皇祖皇宗肇國の大義を闡明し、我國體の尊嚴を發揚して以て將來の國民をして矜式する所を知らしめんと欲せるのみ。是亦教育者の末班に列し聊か天恩の萬一に奉答せんとする微忱に外ならず。若し論じて精からず辯じて正からざるものあらば切に大方君子の是正を望むと云爾。

大正四年十二月一日

山口縣立萩中學校長村上俊江謹誌

今上天皇陛下の御即位の御大典を永く記念せんが爲めに、我校に於ては玄關の正面に車廻を築き、其上に當地の先覺廿一回猛士吉田松陰先生の作に係り、平素より我校の資て以て校訓とする所の士規七則を刻せる石碑を立つることとなり、其起工式を御大典を行はせらるる本日にて於て舉行するを得るは、諸子と共に深く慶ぶ所であ

る。此起工式に於て我校が松陰先生の士規七則を校訓とする所以、及び之を刻せる石碑を建設して本日の御大典を永く記念せんとする所以を陳述するは、決して無益の事ではないと信ずる。

抑々此士規七則は、松陰先生が安政二年正月五日其従弟玉木彦介の元服の時書いて贈られたるもので、其精神は明治天皇の下し玉へる教育勅語の御精神に全く吻合するのである。安政二年と云へば教育勅語の下れる明治二十三年に先つこと三十五年であるが、松陰先生が既に三十五年前に教育勅語の御精神に全く吻合せることを唱道し居らるるを見ても、先生が尋常一様の讀書子にあらずして、識見高邁、深く我國體の精神を領得せられたるを思ひ、今更ながらその人格を崇敬せざるを得ない次第である。然れば、教育勅語の尊ぶべきことを知るものは、又士規七則の尊ぶべきことを知るべく、更に之を裏面より云へば、士規七則の精神を解すること能はざる者は、恐くは教育勅語の御精神をも解すること能はざる者であらう。

教育勅語は、徹頭徹尾、我國民たるもの、特に教育に従事する者の遵奉すべき金科玉條にして、決して我等臣民の言議を挟むべきものにあらずとも、尙に按ずるに、『我皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我ガ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ』の一節は聖諭中の神髓なりと拜察し奉る。故に「明治天皇直ぐ其下に『此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス』と宣へり。松陰先生も亦士規七則の第一則に於て、先づ「凡生爲人、宜知人所以異於禽獸、蓋人有五倫、而君臣父子爲最大、故人之所_ニ以爲人、忠孝爲本」と説かれて居る。唯茲に注意すべきことは、明治天皇が「我臣民克ク忠ニ克ク孝ニ」と、他の國民に對して、特に日本國民に就て宣はせられたると異なりて、松陰先生は、他の禽獸に對して、廣く人類一般に就て説かれたことである。明治天皇が偏に日本の國民道德を御示しなされたに對して、松陰先

生は汎く人類一般の道德中忠孝が其根本たることを説かれたので、餘程哲學的である。然しながら、人と生れて父母を有せざる者なければ、何人も孝道は守らねばなるまいが、共和國に生れたる者は、其上に君主を戴いて居らぬ故に、忠を盡さねばならぬと云ふ義務はあるまい。我日本や英國や獨逸では帝王を戴いて居る故に、其國民たる者に盡忠の義務はあるべきも、佛蘭西や北米合衆國の如き共和國に於ては、此の如き義務があらう筈なければ、孝は兎も角も、忠が人類一般の道德の根本なりと云ふは甚だ受け取り難い論なりと反對する者あるかも知れぬ。然し此の如き反對論を唱ふる者は、畢竟忠と云ふ言葉の古來の慣用に囚はれて、必ず之を君主に仕ふる道と極めて狭き意味に解釋するより起る誤である。我等は言語の使用に關して決して古來の慣例に囚はれてはならず、時代の進歩や思想の發達に連れて我等の使用する言語は常に變化するものであるのみならず、場合によりては、我等より自ら進んで之に新なる意義を與へて差支ないと思ふ。忠と云ふ言葉も必ずしも君主に仕ふる道と云ふやうに極めて狭く解釋するを要せぬ。元來君主たるに大切なる資格は何かと云ふと、國家の統治權を總攬することである。故に君主に仕へて克く忠を盡すといふも、詮する所、克く國家の統治權に服従し之を擁護することである。然るに統治權を存在せざる國家はない。共和國に於ても亦統治權は存在するが、唯君主國と其所在を異にするのみである。故に共和國民にも忠といふ義務があるといふて差支はあるまい、否、人類は文明と未開とを問はず、總て團體を爲さねば生活することの出来ない動物であつて、團體を爲す以上は、必ず之を統治する權力を生ぜねばならぬ、唯其權力に強弱精粗の相違があるのみである。然れば人類一般に忠といふ根本道德の存せねばならぬことを首肯せざるを得ぬ。随つて松陰先生が第一則に哲學的に説かれたことも亦正理であるといはねばならぬことになるではなからうか。若し松陰先生の士規七則の第一則を首肯することが出来ないといふれば、教育勅語

に『之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ』と宣ふた御言葉も解釋することが出来なくなるであらう。忠といふ義務は日本や獨逸や英國の如き君主國の國民にはあるが、佛蘭西や北米合衆國の如き共和國の國民にはないといはば、忠といふ道は之を中外に施して悖ることになりはせぬか。國中國外に施して悖らぬ道は即ち人類一般に通ずる道であるといふことが出来ると思へば、松陰先生の士規七則の第一則は教育勅語の『之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ』といふ御言葉の御精神と吻合するものであるといはねばなるまい。

忠といふ言葉を斯くの如く廣義に解釋することは、一見すれば我國民道德を説く上に左程必要があるやうにも思はれぬが、善く考へると決してさうでない。斯く廣義に解釋してこそ我國體の本義も分明に領會せらるることと思ふ。我國に於ては、忠といふことは必ず 天皇に對して盡すべき道なることは今更申す迄もなきことであるが、その 天皇たる御方は必ず天祖天照皇大神の御血統を引かせられて、其上に統治の大權を繼承せられた御方であらねばならぬ。統治權を總攬せらるるといふことは、我國の 天皇にも最大切なる御資格である。故に 今上天皇陛下も、御踐祚後朝見の儀の際、群臣を召して下し玉へる御勅語の中に、『朕今萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ統治ノ大權ヲ繼承ス』と宣はせられた。而して統治權の繼承は三種の神器の繼承によりて定まるのである。三種の神器が 天皇の御踐祚に缺くべからざるものなることは、皇室典範第二章第十條にも「天皇崩スルトキハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク」とあるが如く、 今上天皇陛下が大正元年七月三十日御踐祚あらせられた時にも、賢所に御祭典を行はしめられ、同時に劍璽渡御の儀を行はしめられたのを見ても分ることである。賢所とは即ち八咫の鏡を齎し祀れる御殿である。本日御即位の御大禮を行はせらるるに就ても、 天皇は先づ神器を奉じて京都の皇宮に移らせ玉ひ、賢所は皇宮内の春典殿に渡らせ玉ひ、愈本日の午前、賢所大前の儀と申すを行はせられ

た、即ち 天皇は皇族内閣總理大臣等を率ゐて、春興殿内に御進御拜禮ありて、御踐祚あらせられし由を御親ら天祖天照皇大神に告げさせ玉ふたのである。是に由りて之を観るも、我國に於て皇位の繼承に三種の神器のなくならぬことが益々明に分るではないか。所詮、我國に於ては三種の神器の繼承によりて統治の大權が繼承せられたることになり、統治の大權を繼承せられたる天祖の御後裔が即ち 天皇である。此道理は我國體を解するに大切なることであるが、兎角此道理を辨へざるより、世間に大なる間違を生ずるやうになると思ふ。例せば先年帝國議會の大問題にまでなりたる南北朝論も、畢竟此道理が分らなかつたから起つたことではあるまいか。所謂北朝の天子は皇族とは云ひながら三種の神器を繼承せられて居らぬ。三種の神器を繼承せられねば統治の大權を繼承せられたとは云はれぬ。統治の大權を繼承せられねば 天皇と申すことは出来ぬ。既に 天皇と申すことが出来ぬ以上は所謂北方の朝廷も朝廷と申すことは出来ぬ。北朝と云ふことが出来ねば南朝といふことも出来ぬ。北朝に對する南朝であるからである。若し強ひて朝といふ言葉を用ひんとせば、所謂南朝を正朝と云ひ所謂北朝を僞朝と云はば語弊がないかも知れぬ。僞朝の僞天子を擁して正朝の正天子に弓を彎きたる足利尊氏一輩のものが亂臣賊子であるは勿論、此等の亂臣賊子に擁せられて統治の大權を繼承せられて居る天皇に叛かれたる所謂北朝の天子方も、其身は縦ひ金枝玉葉にあらせらるるとしても、矢張朝敵と申さねばならぬ。故伊藤博文公の皇室典範義解第四章に據るも「但シ君位ハ一アリテ二ナシ皇后ハ固ヨリ他ノ皇族ト均ク人臣ノ列ニ居ル」とあるが如く、皇族と雖も 天皇に對しては臣子である。臣子にして 天皇に叛かれるのであれば、唯朝敵と申すべきのみならず、更に亦亂臣賊子と申さねばならぬ。我等は日本國民として 天皇を擁護する爲めに、已むを得ず此等の皇族を討伐せねばならぬこと、猶仲哀天皇の庶子藤原忍熊の二王が兵を擧げて叛かれたとき、武内宿禰が神

功皇后の命を受け應神天皇を奉して二王を討たれた如くせねばならぬこと、信ずる。皇族を亂臣賊子と見做し之を討伐すると云ふが如きは甚恐多きことのやうであるが、我國の大義名分を明にするには、是非とも斯く云はねばなるまい。斯の如く大義名分を明にして置けば、將來に於て從來の我國史に見ゆるが如き皇族間の紛争を防ぐことが出来るのみならず、國民をして其去就を誤らしめざる事が出来るのであらう。建武の昔には、楠氏新田氏名和氏菊池氏の如きは幸に大義名分を辨へて居つたれども、國臣の多數は全く之を辨へず、皇族ならば孰れに臣隸するも差支無しと爲し、同じ皇族の中にも統治權を繼承せられたる御方と其他の御方との間には君臣の相違あることを知らざりしが爲めに、賊軍に加はりて逆臣足利氏をして能く其志を遂げしめたものではあるまいか。此の如く大義名分を明にすることが將來我國體を維持するに必要なりとすれば、南北朝に正閏なしと云ふやうな説は排斥すべきのみならず、更に進んで南朝をば正朝北朝をば僞朝と稱して以て其正閏を明にせざるべからざることではないか。然るに古來我國體の大義名分には通じて居るべき筈の歴史家が猶南朝北朝の言葉を用ひ、隨て其後の詩人共が、此等の言葉を借りて當時の史實を咏じて居るのは甚遺憾なることである。頼山陽は隨分大義名分を八釜數云ふた歴史家であるが、其奥國鐵鈴歌には埋在南朝香雲裡の句がある、然れば其弟子の藤井竹外も吉野の山寺に春を尋ねて、眉雪老僧時止、落花深處説南朝と咏じて居る、勤王詩人として名高き梁川星巖の芳野懷古の詩には南朝天子御魂香の句がある、然ればその弟子河野鐵兜も亦吉野の春色を探つて、露臥延元陵下月、滿身花影夢南朝と咏じて居る。元來南北朝と云ふ言葉は支那から借りて來た言葉である。支那の東晉の終りに其領土が分れて二つの獨立國が出来た。支那と云ふ國に於ては、如何なる方法にても苟も統治權を掌握せる者は天命を受けて帝位に上りたる者なりとする古來の慣例がある故に、南北に割據し各統治權を行使する者が同時

に二人出づれば、即ち二つの獨立國が出来たのであるから、一を南朝と稱し他を北朝と稱するも差支なければ、我日本の如き、「葦原千五百秋之瑞穂國、是吾子孫可王之地也」との天祖の勅によりて、天皇は祖宗の後裔にして祖宗の神器を承けられたる方ではなければならぬと定まれる國に於ては、同時に二個の統治權の存在を許さぬ。隨て二箇の朝廷の存在すべき筈なければ、必ず一方は偽朝ならざるべからず。一方を偽朝と稱すれば他方は正朝と稱せねばならぬ。正朝偽朝の稱呼は可なれども、南朝北朝と云へば、其間に正閏を分つことが出来ないやうに誤解を來たす虞ある故に、此名稱は用ひないやうにせねばならぬと思ふ。支那と日本とは全く國體を異にすれば、支那の言葉を借り來りて直に我國に應用すると大なる間違を生ずることあるを以て、我等は平素深く注意せねばならぬことである。

松陰先生は、士規七則の第一則に於て、先づ忠孝の二道が人類道德の根本なることを説かれ、更に第二則に入りて此忠孝二道が我日本帝國に在りては一種特別の發達を爲せるが爲に、我國體の世界萬邦に比類なきことを明かされて、冒頭に先づ「凡生皇國、宜知吾所以尊於宇内」と喝破せられた。次に其理由を説きて「蓋皇朝萬葉一統、邦國士夫、世襲祿位、人君養民以續祖業、臣民忠君以繼父志、君臣一體、忠孝一致、唯吾國爲然」と云はれて居る。此内、「邦國士夫世襲祿位」と云ふ一句は先生が封建時代に出生し存在せられたるが爲に、大名や士族が祿位を世襲する當時の制度によりて立言せられたれば、郡縣制度の今日に於ては全く通用せざるが如き觀なきにあらざるも、之を邦國人民世襲家督と云ふやうに便宜に解釋すれば、今日の制度に適合しないこともない。それは兎に角、「皇朝萬葉一統、人君養民以續祖業」と云ふ句は教育勅語の「我皇祖宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」の御言葉に吻合するものである。「皇朝萬葉一統」にして皇祖建國以來連綿として茲

に二千五百有餘年を経たるは、「我皇祖宗國ヲ肇ムルコト宏遠」なるものではないか。歴代の皇宗克く「養民以續祖業」玉ふは、即ち「德ヲ樹ツルコト深厚」なるものではないか。「邦國士夫、世襲祿位、臣民忠君以繼父志」と云ふ句は「我臣民克ク忠ニ克ク孝ニ」の御言葉に吻合するものである。我日本の如く家族本位にして家系を尊ぶ國に於ては、父子祖孫の關係甚密にして、父祖の志は子孫に傳り、子孫は亦能く父祖の志を續ぎ、父祖が曾て國君に忠節を盡したる故に、其子孫も亦其志を繼ぎて父祖の仕へたる國君の御子孫に忠節を盡すこととなる。此子孫が父祖の志を續ぐは子孫たる者の父祖に對する孝道である。歴代の國君が國民を撫育して德を樹て玉ふこと深厚なれば、國民も亦總て子々孫々相續ぎ益々一系連綿の國君に忠節を盡し、「億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟シ」「君臣一體」となる。而かも父祖の志を續ぎて「克ク忠」なるは即ち「克ク孝」なる所以なれば「忠孝一致」である。斯く忠孝二道が一種特別の發達を爲せるは、世界に國多しと雖も、「唯我國爲然」から 明治天皇は之を「國體ノ精華」と宣ひ、松陰先生は之を「吾所以尊於宇内」と述べられた。上述の如く教育勅語と士規七則とを對比し來ると、松陰先生は教育勅語の御下賜に先つこと三十五年前に、豫め聖勅の衍義を著して、其御精神を發揮せられたのではないかと思はれる程である。特に「君臣一體忠孝一致」の八字は頗る簡なりと雖も、我「國體ノ精華」を道破して餘蘊なき文字であることを知らねばならぬ。

次に 明治天皇は「爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ボシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレバ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」と宣ひ、逐一我等日本國民たる者の履行すべき本務を擧げて懇に御諭しになつて居る。松陰先生も亦殆ど同様のことを説かれて居る。其中、孝の本務は第一則及び第二則に極

力高唱せられて居ることは前述の如くである。「兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ」の御聖諭に相當する言葉は士規七則中にはないが、第一則中に、人の禽獸に異なる所以は人には五倫あるによると説いてあれば、兄弟の友夫婦の和朋友の信は、五倫中の長幼の序夫婦の別朋友の信に配當することを得る故に、松陰先生も亦之を説かれて居ると云うて差支あるまい。次に教育勅語の「恭儉己レヲ持シ」の御言葉は我等が修養上最も着目すべき點なりと思ふ。若し古人が謂へる如く、修身齊家治國平天下の本は自己の心を正らし意を誠にするにありとすれば、我等は修養の第一歩として先づ「恭儉己レヲ持シ」することに最も多く力を致すべきものであらう。然ればにや、松陰先生も亦此點に重きを措かれたものと見え先づ第三則に士の道を説いて、「士道莫大ニ於義、義因勇行、勇因義長」と云はれ、次に第四則に士の行を説いて、「士行以質實不欺爲要、以巧詐文過爲耻、光明正大皆由是出」と云はれて居る。道とは吾人の率由すべき Principle であり、行とは其 Principle が實地に見はれた言動である。而して吾人は何を以て吾人の Principle とすべきかと云ふに、松陰先生は義より大切なるものはないと云はれ、且つ其義は勇の徳ありて始めて實地の作用を現はすが、勇の徳は亦義と云ふ Principle を守ることに因りて其力を増すものであると説かれた。然らば勇の徳によりて義の Principle を實地に作用せしむるには如何なる心得を要するかと云ふに、質實にして欺かざることが肝要であり、巧詐にして過を文ることを耻辱と思はねばならぬ。此の如き心得ありて始めて一言一動悉く「光明正大」なることを得ると説かれて居る。松陰先生の言葉を今日の通用語に言ひ換ふれば、第三則の「義」は道徳的知識に當り、「勇」は道徳的意思に當り、第四則の「以質實不欺爲要、以巧詐文過爲耻」は道徳的情操に當る。故に士規七則の第三則及第四則は畢竟智情意の三作用を調和的に陶冶して以て品性を養成する方法を示されたものであると云ふてもよからう。松陰先生の説かれた所は頗る精微に

涉ると雖も、之を要するに「恭儉己レヲ持シ」するの工夫に過ぎないのである。近頃瀆職の官吏や瀆職の軍人や瀆職の銀行員や瀆職の代議士が頻々として輩出するが、彼等にして苟も教育勅語の「恭儉己レヲ持シ」と云ふ御聖諭を守り、松陰先生の士規七則の第三則及び第四則を遵奉するの精神があつたならば、瀆職の汚名を蒙りて囹圄の中に呻吟するが如き事なくして済みたるべきに、洵に國家の爲に長大息すべきことである。松陰先生が七則中特に二則を割いて、我等が修養上真先に着手すべき所を懇切に説かれたのは、實に故あることであるが、別して現代に於ては「光明正大」といふことを高調力説する必要があると信ずる。次に教育勅語の「博愛衆ニ及シ」といふ御言葉に相當することは士規七則中に見えぬけれども、結文の中に「擇交以輔仁義之行」といふ言葉がある。汎愛衆而親仁といふ古語を考へ合せると、此仁義の行と云ふ中に「博愛衆ニ及シ」といふことも含まれて居るとせねばならぬ。故に松陰先生の思想中にも、教育勅語の「博愛衆ニ及シ」といふ本務の觀念は存して居つたと云ふことは當然の結論であらうと思ふ。

「學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ」と云ふ御聖諭に對しては、松陰先生は極めて簡單に之を第六則に説いて、「成德達材、師恩友益居多焉、故君子慎交遊」と述べられて居る。「達材」とは即ち「智能ヲ啓發シ」に當り、「成德」とは即ち「德器ヲ成就シ」に當る。而して明治天皇は智能の啓發德器の成就の手段として「學ヲ修メ業ヲ習ヒ」と宣ひしも、松陰先生は之を修學習業の指導者補助者たる師友に歸し、「師恩友益居多焉」と説かれて居る。茲に注意すべきは「師恩」といふ文字である。「成德達材」には「師恩」多きに居るに拘らず、今日の學生は兎角「師恩」を忘れ勝ちである。嘗に之を忘るゝのみならず、舊時の教師に對し敬意を表しなかつたり、現時の教師に對して同盟反抗などする者がある。此の如きは「恭儉己レヲ持シ」と云ふ御聖諭

に悖るの甚しきもので、實に教育の爲に痛嘆すべきことではないか。松陰先生が士規七則中に於て、「恩師」に言及せられたことは、特に今日の學生に對して大なる教訓である。

『進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ』といふ御聖諭に相當することは、遺憾ながら士規七則の中に見出すことが出来ぬ。此點は士規七則の教育勅語に比較して不備なる點であつて、我等は今更ながら御聖諭の至れり盡せるものなることを感佩し奉らざるを得ない次第である。強ひて辯ずれば、是亦結文中の所謂「仁義之行」といふ中に含まれて居ると云へやう。次に『常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ』といふ御聖諭に相當することも、亦士規七則の中に見出し難いが、松陰先生の時代には、まだ嚴然たる成文の憲法も法律も備つて居らなかつた故に、其見出し難いことは尤むべきことではあるまい。當時の日本はまだ今日の如き法治國にあらざりしを以て、之に處するには今日に於けるが如く國憲國法の知識を要することは尠かつた。然れども無學無識にては立派に世に處することは出来ぬ故、古今の書を讀み聖賢の教を稽へて今日の所謂常識を養ふことは當時に於ても必要であつたに相違ない。然れば松陰先生も亦第五則に於て「人不レ通_レ古今_二不_レ師_ニ聖賢_ヲ、則鄙夫而已、讀書尙友、君子之事也、」と説かれて居る。若し先生をして今日に在らしめば、先生も亦御聖諭に宜へる如く、國憲國法の知識の尊ぶべきこと、之を遵奉するは國民の義務たることを説かれるであらう。

最後に 明治天皇は「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉シテ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」と宣せられたが、我等臣民たる者は此御言葉を十分徹底的に解釋せねばならぬ。余の見るところでは、此御言葉は一旦緩急ある場合には天壤無窮の皇運を扶翼する爲に生命を犠牲に供する覺悟なかるべからずと解釋せねばなるまいと考へる。『義勇公ニ奉シ』と云ふ御言葉の中には犠牲の精神が含まれて居る。語を換へて之を言へば、死して而して後已むの精神

が存せねばならぬ。故に士規七則の第七則「死而後已」四字、言簡而義該、堅忍果決、確乎不_レ可_レ拔者、舍_レ是無_レ術也」と通ずる所がある。惟 明治天皇は或る特別なる場合を擧げて御諭しになり、松陰先生は一般の場合に適するやうに説かれたのであるが、我國に於ては、皇運を扶翼し國家を擁護する場合は、あらゆる場合の中、最大切なる場合であれば、此の如き場合に於て、「死而後已」の精神を振ひ作すべきことは今更申す迄もなきことである。先生は自ら之を實踐躬行に示されて居る。渡米の壯圖一たび敗れて其身は小塚原一片の露と消えられたるは、是れ皇國の爲に義勇奉公して死して後已みたるものではないか。先生は言行一致の人である。自ら作られた士規七則も一一之を實踐躬行せられたが、就中七則中の最後の一則を實行して以て其一生を終られたる一事は、百代に亘りて永く人心を動かすに足ると思ふ。然しながら唯皇室若くは國家に緩急ある場合にのみ死して後已むの精神を以て之に當るは、先生の本意ではあるまい。先生の望まざる所は、何事につけても死して後已むの意氣込であらう。思ふに、「死而後已」の四字には、二個の意味が含まれて居る。一は死ぬる間際までやるといふことと、他は死ぬる覺悟でやるといふことである。死ぬる間際までやるといふことは、大切は大切であるが、縦ひ死ぬる間際までやるとしても、其間に熱心と努力とを關いたならば、何事も成就はすまい。そこで死ぬる間際までやるといふ上に、死ぬる覺悟でやるといふことが大切になつて來る。言ひ換ふれば、一身を賭しても成し遂げずば措かぬといふ熱心と努力とが必要である。寧ろ玉碎するも瓦全を恥づるのである。奮闘生活である。努力主義である。北米合衆國の前々大統領ローズベルト氏が會て Strenuous Life としふ一論文を書かれ、之が我國にも傳はり、奮闘的生活といふことが盛んに唱へられたことがあつた。又伯林大學の哲學倫理學教育學の教授で、今より六年前に没せられたパウレンといふ學者が、倫理學上 Energetism としふ説を唱へ、努力主義を鼓吹せられて、

我國にも亦之を祖述せる者少からざりしことがあつた松陰先生の士規七則の第七則も亦ローズベルト氏の奮闘生活バウルゼン氏の努力主義の思想を含むものといふて差支あるまい。

是まで述べ來りたる所によりて、吉田松陰先生の士規七則が、教育勅語の御精神に吻合せるのみならず、能く之を發揮せるものなることが分つたであらう。吾等日本國民たる者、教育勅語の御精神を解釋するに、松陰先生の士規七則を以てし、日夜拳々として之を服膺して之を遵守せば、明治天皇の宣へるが如く、獨り陛下の忠良の臣民たるのみならず、又以て我等祖先の遺風を顯彰するに足るであらう。元來松陰先生が此士規七則を書いて贈られたる玉木彦介氏の家は、夫の乃木大將の家より分れたるものにて、此縁故より大將は年少の折彦介氏の父文之進氏の家庭にて世話を受けられたことがある。随つて大將は彦介氏が松陰先生より授けられたる此士規七則を早くより知られて居つたと見え、深く之を服膺し、仄かに聞く所によれば何時の戦場に於ても肌身離さず之を所持せられたと云ふことである。乃木大將の人格は士規七則の實踐躬行によりて出來上りたるものであると云ふも不可なからう。否寧ろ吉田松陰先生の一代の大文章たる此士規七則の精神が凝つて乃木大將といふ一代の大人物と現はれたと云ふ方が適切であらう。乃木大將は實に士規七則の權化である。我國にも將來乃木大將の如き人物が續々輩出すれば、皇基を振起し國運を發展せしむること期して待つべしと思ふ。本日 今上天皇陛下が御即位の御大典を擧げさせらるゝにつき、謹んで我皇運の彌榮えに榮え玉はんことを祝し奉ると共に、永く此曠古の盛儀を記念せんが爲に、我校に於て特に松陰先生の士規七則を擇び之を石に勒して校舎の前に建設する微意は、最早喋々絮説するを要せずして明かであらう。庶幾くは我校の諸子、朝暮此記念碑の邊を來往して矜式する所を忘れず、益々志操を砥礪し學業を修習し、以て他日の盡忠報國を期せんことを、

山本京大學生監演說要目

渡邊正壽筆記

昨日、校長から見せていただいた校友會雜誌の卒業生諸君の名簿の中で、特に私の目に留りましたのは第三回に卒業した文學士兼常清佐君であります。此人は今或研究に従事してゐますが、未だ日本に於てはあまり知られてゐない。多分諸君も太した人物ではあるまいと思つて居らるゝでせうが、西洋の専門家には既に知られて居て、今四五年も経つたならば有名な人となるゝ事と信じてゐます。今から此人のことについて少し御話しようと思ひます。私は私の教へた學士しかも此學校出身の此の有望なる學士のことに関して、現に此校に學ばるゝ諸君の面前に於て話して、多少なりとも諸君を興起せしめる事を得たならば充分満足に思ふのであります。

兼常清佐君は學問に従事する人として感心すべき人でありませう。高等學校は第二部志望でありました。一概に高等學校と申しても、各異つてゐるので、第一高等學校は勿論、第二第三などは天下の秀才が多く集るので、從つて入學試験の難易も違ふ。時に第二部に於て一高と三高とは最も優れてゐる。兼常君は一高の第二部を卒業し、東京帝大に入り、自分の趣味に考へ、京都大學の文科に轉じ、學問としては哲學を専門としましたが、此人は他に得意とするところがあるので、先輩と相談しまして、専門をかへました。東京ではピアノ及共作譜を研究せられて、其間と申すものは毎日三回位も研究に出かけられたのである。一體學問にしる何にしる、一日一度一時間位教はつたのみでは大した發達は豫期する事は出來ぬものである。否、それ位の勉強では何事も成就するものではない。私は謠を少しやりますが、私の流儀はこの教頭と同じく實生でありまして、此流は諸流の中で一番よい

と云はれて居ます。此流で名人と云はるる人も居りますが、一體謠曲のみならず、何事でも、名人と稱するのは有名なる人と云ふ意味と思つたらそれこそ大間違である。謠曲の名人と申せば謠曲に關する萬端の事を知つてゐて且つ之を自由に謠ふことの出来る人でなくてはならぬ。是の如き人であつて始めて眞の名人といふ事が出来るのであります。謠に於ては、實生九郎には誰も及ばない、實に名人であると申しますが、嘗に謠ふことのみが上手であると云ふのではないのであります。此の實生九郎と云ふ人が己の弟子を教へるのに、朝飯後・晝飯前・晝飯後・夕飯前・晩と云つた具合に、朝から晩迄、毎日五六度も弟子供に謠はせる。かくて始めて謠曲が筋肉に切り込まれると申してゐます。かくの如き熱心な修養を、二十年も三十年も毎日缺かさず続けさせてゐる中に、始めて立派な弟子が出来るのであります。此人の弟子の中で上手な人が二人ありますが、四十歳前後になつた今日でも、毎日缺かさず三度位は先生の前に出て謠つてゐます。此様に毎日幾度も勉強せなければ、眞の稽古には決してならぬ。眞の名人とは勿論なれませぬ。私は加賀の生で、殿様は前田家でありました。此の前田家に能を以つて仕へてゐた人があつて、維新後能をやめてから後も、毎朝六十度づゝ舞臺のまはり歩き廻るのが常でありました。其譯を尋ねた所が、其人の云ふのに、「舞は殿様が無くなつたから、今は人が頼んでも舞はないが、毎朝の行事は能にたづさはる人の嗜であるから止める事は出来ぬ」と申したさうであります。兼常君の研究に於けるも亦其通りで、嗜好と一心とにより続けられてゐるのであります。或夜、友人共が多く集つた席上で、皆から、「何か藝をやつてくれ」と云はれた時、他に藝がないので、ピアノの譜を書いて、「是が私のピアノに熱中した時の賜である」と云つて見せられたことがあります。

話は元に戻つて、兼常君が大學を出られて、始めは哲學を研究せられたが、今度は高等學校の第二部に入學し

て居られた關係などから、他の研究即ち日本音楽史及音楽の根本である音の研究をしようと思ひました。しかし、卒業後、學資金がそんなにある筈はない。斯く申すと、御父さんも當地に現存せらるるさうで、甚だ失禮の様ではあるが、何處の家でも、在學中はいざしらず、卒業後迄も學資金を送つてくれる様なものは實際あるべき筈がないのであります。そこで、君は人が十圓費するものは、己は九圓ですませると云ふ風にして、金は持たなくても研究はやめぬと云ふ意氣込で儉約しながら音楽の研究に従事して居られます。人は皆かくあらねばならぬこと、思ひます。一體音楽と云ふものは、書物を讀んだ丈ではわかるものではなく、實地研究が必要であります。日本で最も古い音楽を研究するとなると、先づ奈良朝時代のもので、東大寺興福寺等に其當時の書き物が少しはあるさうである。平安朝時代の音楽では、延暦寺に傳つたもので、今日尙儀式の時稀に行はるるものがある。又高野山にも古い樂が傳つてゐるし、其他催馬樂もあれば、朝廷に傳つた音楽もあるのであります。兼常君は是等を研究せらるるのであるが、大變骨が折れると云ふのは、此等の音楽は寺に儀式の行はれる時間聞くことが出来る位のことと、年に一度か二度か位のことで、滅多に聞く事は不可能である。殊に宗教上の儀式は幽寂の性質を尊ぶところから、多く夜中に行はれて、晝間行はれると云ふことは殆どないと云つてよい。されば、朝一時二時頃から研究に出掛けられねばならぬ。元來身體がさまで健でないから、或時などは血を吐いた様なことさへあつて、大變困りましたが、決して苦しいからと云つて止めない。私も音楽など聞きに行く様な事でもあると、何時でも兼常君を見ないことはない。音楽研究に値する機會は決して失はぬのであります。實に音楽のためには、血を吐かうがどうせうが、己の存在を認めないかのやうに研究に熱心であります。此熱心こそは氏の特に最も發達した性質であります。一般に山口縣人は其特長として熱心であり熱烈であるが、是人に於て其の最も特に然る

を見るのであります。かく氏は摯實熱心に研究に従事してゐるが、前に申した如く、五年に一度とか管長のかはり目にはみ行はれるとか云ふ様な音楽もあるもので、まだ全部の研究は出来て居らぬが、然し大部分は出来て居る。鎌倉時代のものなどは調べる法も可なりあるもので、何流はかく、何流はかく歌ふべきであると云ふことは勿論知つて居るのみならず、實際に歌ふのであつて、至つて卑近なる薩摩琵琶なども出来るのであります。平家琵琶は鎌倉時代から足利時代にかけて出来たもので、源は宗教上に萌したものださうで、平家琵琶は其後謡曲となり、謡曲より義大夫などが起つたものである。それ故、謡曲の出来る人なら、義大夫をやるのはさまでむづかしい事はない。私などでも真似位充分出来る。それなら平家琵琶はやれるかとなると全く出来ぬ。かく源より末に、上より下に、音楽を辿るといふ事と、下より上に、音楽を研究してのぼることとの難易といふものは固より比較にもならない。是に於てか兼常君の研究が思ひやられるのであります。平家琵琶は、數年前迄は、京都の老人に知つて居る人が唯一人ありましたが、今ははや知つて居る人もない。しかも兼常君は之を文章を以つて表はす事迄は出来るのである。これ全く熱心なる研究の賜であります。前にも御話した如く、苟めにも其研究に關する場所には必ず出掛ける。私が音楽會などに行つた時に、氏の居なかつた事なく、其研究的態度は實に驚くべきであります。此間も、朝鮮に研究に行きました。元より金は餘りないのであるにもかゝらず、朝鮮の朝廷に仕へて音楽にたづさはつてゐる老人が死にでもすると研究上大變と云ふので、唯百圓の金を携へて出掛たのであります。汽車賃に宿料に却々澤山の費用がかゝつて、研究は半途ながら歸らざるを得ぬやうになりました。私は之を聞いて大變同情して、奔走もして見たが、金坑の探險とか炭坑の研究のために金を出す人はあつても、音楽の研究のために金を出して呉れる様な人は未だ日本には居なかつたので、遂に朝鮮の音楽の研究は出来なかつた。

琉球の音楽も日本のものと大關係があるので、研究に行きたいが、やはり金の都合で行く運びにならぬと話しましたから、私は其熱心と希望とのために、沖繩縣知事に面會した時、「音楽を知つてゐる人を二三人よこしてはどうであらう」と話した事がありました。私が拒絶されました。兎に角兼常君の研究態度は實にすばらしいものであります。それかと云つて、身體上から云ふときは健全な方ではないが、其研學的精神に至つては眞に健全偉大であります。日本音楽史を研究してゐる人は君より他に聞いた事はないが、私は此の研究の出来る人は氏を除いて他にないと信ずるのであります。

今度は、音の研究のことについて話しますが、御承知の如く、音は耳にのみ由るものではなく、諸君の心樂しき時は楽しく響き、悲しき時は悲しく感ぜらるゝもので、實は人々の心に由るのであります。物事に實際より間違つて感ずる例は多くあります。例へば黒板の上に白紙を載せたものと白紙の上に黒紙を載せたものと其紙の大きさはいづれも同じであるに、前者は後者よりも大きく見え、又腹の空いてゐる時は、同じ食物でも美味に感ぜられる。此の如く自分はさう當になるものではない。音の耳に入る場合でもその通りであるかもしれぬ。或は又物理学上論ずるが如く、幅・強さ・高さの三要素のみによるものであるかもしれぬ。此疑問こそ兼常君の大なる研究の存する所である。若し三要素のみによるものでないとしたならば、それこそ音楽上に根本的動搖を與ふるもので、兼常君はこの大研究に従事して居ます。君の考では、音を寫眞に撮らうと云ふのである。かく申すと、大變異な事の様であります。歌から生ずる振動をフィルム上に現さんと欲するのであります。此事は兼常君に依つて始めて氣附かれたのではなく、米國に於て已に二三人も之に従事したのもあつたが、皆數學的知識技能に於て缺くる所あり、孰れも其計算統計が一顧の値なきものゝみでありました。此點は蓋し君の得意とする所で、

毎日大學に出頭して機械をかり研究をやつて居ますが、其研究が非常にむづかしいので、其歌ふ人の振動も亦フイルムに寫るので、其振動を如何なる程度に於て計算中に入れなくてよいかといふことが一つの困難な研究問題であります。且つ大學の機械は、晝は學生が使用するので、夜間地下室で助手と二人でこの研究に従事してゐます。この研究が出来上つたなら、歌は如何にして快く感ぜらるゝかと云ふ事が根本的に明白になるのであります。既に少しは發表せられ、又遠からずして發表の時期に達するであらうが、日本人は全く無頓着であるかの如くである。外國の音楽家の日本に遊ぶ人などは屢々兼常君を訪れるさうであるが、四疊半のきれいにない間に來られては實に困ると云つて居ました。日曜には大學が休みて、研究に出掛ける事が出来ぬので、得手の數學を研究して居ます。朝飯を食ふのが手間どると云ふので、床から出ないで氏のすきな茶を啜りつゝ研究に取り掛ります。實に其研究ぶりの熱心と云つたらえらいもので、人が散歩しても自分は散歩せず、一心に勉強して居ます。全く一の奇人と云ふべきであります。かくの如き人は又面白い廻合せがあるもので、食事や掃除や其他萬端は氏の友人某によつてせられつゝあるのであります。氏の生活は衛生上からは或は非難すべき點もあらうが、君の如き人に對しては音楽さへ研究してもらへばよい。他を要求してはなりません。兼常君は今こそ音楽學校の教授であるが、私は遠からずして一層光榮ある地位の氏を迎ふる事を信じてゐるのであります。日本に於て眞に音楽を研究する人は氏一人である。私は兼常君の研究の話をするのみではない、氏が己の職分、學問研究に對する其熱心なる態度を諸君につけて、諸君が學問勉勵の參考としたいのであります。

萩には夏蜜柑が多く植ゑてあるが、昨日も畑を見れば、木にあるよりも落ちた方が多い。聞けば風と寒とで三分の二以上落ちたといふ事であるが、萩の橙は將來有望であるかどうか疑はざるを得ない。一體あんなものは人

力車夫か労働者か極少數な人々の食ふもので、中等以上の紳士は已に口にせぬ。萩の人々は是より以上に確なる立派な生産をなすべき方法はないであらうかと云ふことを考へる事は實に重要な問題ではありますまいか。又昨日、校長に導かれて松陰神社に参りまして、道で鰯を賣つて居るのを見ましたが、價の安いには實に驚きました。今の世にあんな安いものはありませぬ、私の郷里にでも鰯はとれるが、あんなに安いものはありませぬ。私の方では、あれを酢や醤油で煮たり、味噌をつけて焼いたりして食べるが、こちらでは肥料にまでするさうであります。何等か方法を講じて、有用に且つ高價にうる事は出来ないのであります。かく申すと、すぐ雑詰にでもして西洋にでも賣り出したらよからうと考へる人もあらうが、そんな雑詰など西洋の眞似なら誰でもする。そんなことでは日本の生産の獨立といふ事は出来ませぬ。そんな事をしなくても、隣の朝鮮や滿洲や支那など人種嗜好が我々と大變よく似た國に送り出すやうな工夫はないであらうか。食ふ事を知らぬならばどんどん送つて教へてやるべしである。自ら進んで新なる工夫をせねばだめであります。學校に就いて云つても、諸君が一致して設備其他の事々物々皆新なる方面に發展改良して行くといふ事が必要であります。何事でもこれで充分といふことはないもので、いくらでも改善の餘地を見出す事が出来ます。其他諸君が諸君の周圍のあらゆるものを新に善なる方面に解決して行くといふ精神がある時は、我國家は益々發達して行くのであります。私は諸君が兼常君のその通りにならるゝ事をのみ希望するものではありません。唯其業務に忠實熱心なる彼の如き習慣を養はれん事を切望してやまないであります。

三宅雪嶺博士講演要旨

松渡 原 淨 二筆記

此度山口高等商業學校十周年記念式に招かれて参つたので、序に當地に参ることゝなりました。今日此處で皆さんと會つて御話をする様になつたことは私の光榮とする所であります。昨日來、萩の景色を彼處是處と見せて戴いたが、先づ得たる印象は景色の甚だよいと云ふことであります。私がこちらへ参る前に、人の話に依つて聞いて居たのは、「萩へ行けば夏橙が澤山植附けてあつて、其畑の其處此處に在る屋敷の趾などは何某出生地何某舊宅など書附けた札が建てられてあるのを見る」と云ふことであつた。なる程來て見れば一面の夏橙畑であつたが、建札は一向目につかなかつた。然し誕生地舊宅地など稱する者は色々拜見しました。

萩近傍から人物の輩出したと云ふことは當地人の能く知る所で、私の喋々するを要せざる事でもあります。人物に就いて云へば種々議論があつて、長所もあれば缺點もあります。批評をすれば長くなりすから今日は申しませぬが、兎に角有力なる人々が當地方から多く出たと云ふ事は否定する事は出来ないのであります。然らば何故有力者が當地から殊に多く出たか、其原因を尋ねるならば色々事情もありませうが、一言を以て之を盡すならば當地方人士の奮發心であります。是も一朝一夕の事ではなくて遠く關ヶ原以來の事である。否、或は其以前からであるかも知れませぬ。何にしても十餘州の人々が防長唯二州に押込められたのである。或は自分から引込んだのかも知れぬが、そのために報復の心は常に防長人士の胸中に溢れて居たのであります。是は或人に聞いた事であるが、國家老が元旦に出仕すると「幕府御追討は」と挨拶する。さうすると殿様が「未だ早からう」と答へら

れるのが例になつて居たさうであります。かく防長人は徳川に對して復讐してやらねばならぬと云ふ反抗心が盛んであつたので、其心が一旦破裂して明治維新の如きものとなつたのであります。初は薩長土肥と唱へられて居たものが、終には長門全盛となつた。閩のわるいことなどは山口の高商で云つたのでこちらでは云ひませぬ。閩と爲つては善くないが、其閩の出来る様になつたのも實際人物が多いかつたからであります。

此の山水明媚なる萩の地は昔も今もかはらないが、此の地に生れて居る人の中から、山川の昔の色を變へぬ如くに依然多くの人物が出るか否かは將來の疑問であります。誰が云つたか「富士山を仰ぐ地からは人物は出ぬ」と云ふことがありますが、果してさうであらうか素よりたしかなことではないが、かく信じて居る人もあります。是の如き事は別として、「偉人の輩出した地からは復偉人は出ぬ」と云ふ理由がありませうか。昨日巡覽したところでは僅に偉人の俤を見る事が出来たのみで、其趾はよくは残つて居ない様でありました。第一城も荒れ果て、居るし、舊遺物として見るべきものとしては實に鮮い。しかし人物の多く出たことは事實である。現今此の地の名物は人物でなくてはならぬ。今其遺跡を尋ねて一種壯嚴なる感に撃たれたのであるが、こゝが實物教育の効果の偉大なる所である。斯の如き偉大なる感化を人に及す所は他に少ないのであります。松陰神社に詣でて、先生の米を舂きつゝ本を讀まれたと云ふダイガラを見たが、なる程こゝが偉かつた所だとわかつた。が、なる程偉いは偉いが、餘り感心しぎると感じまけをする。「過ぎたるは猶及ばざるがごとし」とはこの事である。偉人はもとより尊敬すべきである。しかし程度がある。彼も人であるから、尊敬も或程度に止めて置かねばなりません。餘りに尊敬に過ぎるのは尊敬せざるに等しい。之を神として崇めると云ふのはどうでありませうか。先生が米を舂きつゝ本を讀まれたと云ふことは、如何にも感ずべきが如くにしてさうでない。一度思ひ反すと、米を舂きつゝ棚

に本をのせて讀む位の事は決して難事と云ふべきではない。寧ろ容易なる事と稱すべきであります。唯先生が其位迄も努めて後、志を立て力を振ひ成功に務めて斃れて後に已まれた所に先生の偉大があるのであります。米を舂きつゝ勉強せられた如き事に感心し込んだら、それこそ感心負けをしたのであります。若し偉大の逸話に就いて聞き遺跡に就いて尋ねるならば感心すべき事のみであります。其に感心してばかり居ては一向意氣地のないこととあります。維新の際長州から人物の多く出たと云ふことは、二百年來幕府に睨まれた爲で、其爲に反抗心を起し、其氣が鬱積してあれ程の仕事が出来たのであります。そして今日の長州の先輩は此情力で顯榮なる地位に就いて安心して贅澤をして居るとすれば一向役に立たぬ者であります。長藩の者が徳川に反抗する爲に起ち、目的を達したので已むならば、徳川に反抗の必要のない時代には人物は出ぬ筈であるが、其では實に詰らぬ事とあります。此に大なる反抗の必要が有ります。今後の反抗には努力の一層大なる者を要する。幕府に對する此等先輩の反抗心は已に昨日の歴史的事實であります。長藩の人々が今の國家に導いて來たとして、今後此國家は果して安全と稱すべきでありますか、其發展上に於いて順潮に行くべきでありますか。

近世史の少し前迄は、歐人は歐洲のみで活動した。其迄は今の如く世界到る處に彼等の足跡の印せられぬ所はないと云ふ程では無かつた。今でも東洋人の方が數は多いが、あちらに行くといふ排斥せられる。現今では移民の排斥位に止つて居るが、今後は如何なる程度に迄擴張せられるかわからぬ。其處になると、徳川に對して位の反抗ではすまぬ。徳川に反抗して目的が達せられた爲に氣が緩む様では將來をどうしますか。東洋人は西洋人の爲に壓迫を受けて居る。唯例外として日本人のみが僅に之に反抗して居るに過ぎぬが、今の日本は將來も果して安全とありませうか。今頃の先輩共は贅澤をして居るが、其ですむと思つて居るのであらうか。尊王攘夷とは一體

何であるか。尊王とは立憲政治を意味し、攘夷とは即ち國權の振張を意味したのではないか。先輩の中には之が爲に一命を抛ちたる者が多々あるのみならず、或は七たび人間に生れて迄も遣り遂げねば已まぬと云つた人さへも有りました。今の所謂先輩は以前の先輩とは違ふ。何も感心すべき必要がない。富も相當に作るのは決して咎めぬが、死なずに残つて居る先輩共の贅澤ばかり遣つて居るのはどうでありますか。見かけは如何にあらうと。斯の如き者は役には立ちません。眞の先輩は自分の思ふ所に突進して已まないのであります。「かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂。」贅澤をすれば出来るけれど、其は身を亡す元である。唯已むに已まれぬ大和魂が有るので、己の有する目的に向つて突進せねば已まれぬ。歌の精神は種々の場合に當飲るのであります。若し長州人が眞の先輩の心を心として居るならば、偉人は依然として出る筈であります。必ずしも高杉晋作などの如き人ばかりとは限らぬ。商業に工業にあらゆる方面に人物が出るべき筈であるが、之に反して今の先輩たちの有様を真似ることのみを心懸けるならば、偉人は決して出ない。萩の地は已に悉く過去に屬したのであります。若し眞の先輩の通りにすれば、偉人は詰度出ます。先輩の糟を嘗めて濟ませる様な人は眞の先輩の志に逆行する者で、身を殺した先輩達の罪人であります。

長州人は維新の際には働いたが、其後先輩が血を以つて築き上げた勢力を随分如何しい方に使ひました。しかし長州には昔から確乎たる精神が何處かに流れて居ると見えて、世人が「長州の先輩共の中には大變悪い奴が居る。彼等は國賊である。斃してしまへ」など云つて居る時、丁度乃木大將が死なれました。是に由つて世の人々の心に、「長州の先輩中には腐敗せる者も居るが、長州人士の心の裡には目に見えぬ或精神の潜んだ者があるに違ひない」と云ふことが思はれたのである。大將は萩の人ではないが、萩の地にも其精神は有るに違ひない。眞に

崇め尊ぶべき人物でも、「舜何人ぞ我何人ぞ」と云ふ精神で崇めることが必要であります。「我も勉むるならば斯の如くなる事が出来るのみならず、より以上の人物になることが出来る」と云ふ精神意氣が必要である。今の先輩の様に大なる邸宅を構へ、立派なる乗物に乗るのを真似る事はない。そんな事位日本の商人の中にも澤山居るし、西洋などには之に百倍千倍する者も居る。そんな真似をしても役には立たぬ。萩に人物が出来るか否かはそこで別れるのであります。眞の偉い先輩を學ぶべきである、屑の先輩の眞似をする必要は少しもない。若し眞の先輩の眞似をするならば、徳川を倒した位の先輩のみではなく、世界的大人物が萩の地から出るであります。此の如き責任を萩の人は感せねばなりません。萩が商業地として盛んになるか否かは問題にはならぬが、維新後も偉大なる人物が出たと云ふことになれば其で結構であります。其後はサツバリ人物が出ぬと云ふことになつては實に詰らない。萩は景色がよい、夏橙と恩給取りで立つて行くと云はるゝのみで萩人は満足が出来てせうか。曾て功勞の有つた爲に恩給を貰つて餘命を送つて居るのは悪いと云ふことはないが、此大なる人物輩出と云ふ名譽ある地に居て唯屑の先輩の眞似をするのみなら寧ろ萩に居らぬがよい。眞の先輩と屑の先輩とは萩の人々は無論能く知つて居らるゝでありませう。此處に居らるゝ人々を一寸見た所でも活き／＼した風があるが、或は此區別のわからぬので、屑の先輩の眞似をして居る人も有るかも知れぬ。併し大部分に於いてはさうでは有るまい。殆ど皆の人々は其區別を知つて居らるゝこと、信じ、又信じて善からうと思ふので有ります。

今迄御話した中には失禮に涉ることがあつて、意外の感起された人もあるかも知れませんが、性來の訥辯で已むを得ませぬ。失禮の事が有つたら其は取消します。併し屑の先輩と云つたことは無禮であると思はるゝ方も或は有るかも知れぬが、是丈は取消しません。

陸軍中將渡邊男爵講話

白吉 根田 鶴 松 筆記

私が只今校長殿より御紹介になりました渡邊であります。一言でも宜しいから話して呉れよとの事でありましたから少しばかり愚見を御話します。御話をすると自然批評的に涉りますが、私の話と學校の教育とが相容れぬといふことが、或はあるかも知れませぬ。私の話しました事を後で校長殿なり先生なりが御訂正なされる事があつたならば、其時は全然その方に御改めを希望いたします。皆様の大切なるは、學問をせられて智慧を研ぎ、飲食動作を慎みて體力を天的に維持せられることとあります。學問をするには如何にするが肝要であるかと申しますと、校長や先生を神のごとく信ずることが大切であります。賢くなるには、教へられた事を暇ある毎に考へ、又教へられた以外な事まで眞實に腹に入る様に研究するのであります。私は學問について喋々する資格はありませぬ。曾て、佛人に就いて學んだ時、成績が甚だ悪くて、百人中の第六番目になつた事があります。初めから第三番より下つた事はなかつたのに、この様に下ることになつたのはとりもなほさず私の不勉強の結果であります。この様な鹽梅で私は學問の事を話す資格はありませぬが、人から聞いた事を話せば差支は無いから御話致します。學問が上達しよう、賢くならうといふには、一圖に先生を神の如く信ずる事が肝要であります。先生は親に代つて教育せられるので、昔は先生といふものはなく、親が自分にしたものであります。支那で、商の伊尹が、學校教育をせねば、父兄が用が多くなつては到底子弟の教育まで出来ないと云ふので始めたのであります。日本の昔の學校の制度は上級の生徒は知つてをらるゝ筈であります。下級の生徒には解りませぬが、調べて見られた

らXは容易に出て來ます。學問をし智慧を研くには、偏に先生を神の如く信ずると同時に、學校は如何なるものかといふ事を知らねばなりません。學校にはいる時に、裏門からはいつても表門からはいつても拜禮をせねばなりません。人に教育が無かつたら禽獸よりも劣るものである。學校は其教育を施す所でありますから誠に有難い神聖な處であります。その學校へはいる時拜禮するのはあたりまへの事であります。

この事は後に云ふ心算でありましたが、序だから今申し上げます。先程校長殿について校内を歩きましたが、其途中で敬禮をした生徒が一人もありませんでした。この敬禮をするといふ事は、先生が教へられるのではなくて、皆様が已にチャント心得て居られるのであります。皆様がチャント父母の顔を覺えた位な幼い頃、祖先や神様や御客の前で御辭儀をするのは、父母が殊更に教へるのではなく、自然と覺えるのであります。皆様がこの學校の門をはいられるに就いて心はづかし事は無いかと思ひます。昔は學問は木蔭などで教へたものであります。學校が善くて學問知識が上らなかつたなら、其は丁度金蒔繪の鶯籠の中へ雀を入れた様なものであります。立派な鶯が雀籠の中へはいつたのはよいですが、雀が鶯籠の中へはいつてはをさまりが付きませぬ。誰も能く松下村塾と云ひますが、塾の出來た時は素より松陰先生に金の有る筈もなく、毛利家其他に之を補助した者が有つた譯でもなく、只誰は柱を持つてこい、誰は屋根を葺けといふ風で先生と弟子と皆が寄つて造つたので、座板も何もなかつたのであります。伊藤公爵等も、この柱を持つて來たり、屋根を葺いたりした仲間であります。今は立派な學校を建ててもらつて、多くの先生を得て居て、それでも人並に出來ないとはどうした事でありませう。時には先生の教へ様が悪いなどいふて不平を漏す生徒があるが、實に怪しからぬ事であります。私は先程教場を拜見しましたが、これには一言もない。多少望ましからぬ事が無かつたでもないが、概して善かつた。學問は遠きに非ず行

儀作法から起る。五年生は誠に立派なもので、足の踏付けがさまり、目は先生について居て、私はいて行つても一向頓着せなつた。教室では、目や耳は決して先生からはなしてはならぬ。私が金モールの正限に十四の勳章でもさげて行つたら、ヒョットすると視線が狂ふかも知れぬが、それではいかぬ。神より何より先生が一番尊いと信じて、否、念じて常に先生から視線をそらしてはならませぬ。流石は五年生だけあつて立派に出來て居ました。一年生になるとドンと落ちる。頭をかく、足をがたつかせる、欠をする、流石に一年生だと感じました。行儀作法が學問が出來賢くなる初であります。學問は誰にでも出來るものであります。人には出來て、自分には出來ぬといふ事はない。出來ないのは心の持ち様が悪いからであります。不具者は仕方がないが、不具でない者は必ず出來る。學校の示方と齟齬するかも知れませぬが、校長殿や先生方の訂正があると信じますから、申しませんが、學問するには規律が必要であります。朝起きて顔を洗ふにも順序がある。先づ柄杓で水を何杯とチャントきめて入れます。それから手を洗ひ、口を嗽ぎ、顔を洗ひ、頭を洗ふと順序を立てて時間も間違へずにやる。小さい事の様だが、天下の大政治家となるも、陸海軍の將となるもわづかなところにあるのであります。衣服の着様、足袋のはき様、すべて凡帳面にせねばなりません。支那の詩人が、「小さい事には頓着するな」などと云つた事があります。そんなものではありませぬ。

今日見た所で、教場での態度は、一年二年三年四年五年とその年級に正比例して善くありました。私は名古屋及び東北で師團長をして居り、今は廣島で隱居をして居ますが、學問は國家の爲後進者の爲大事であるから、時に學校を見に行きよりました。規律の能く立つた學校はいつても善い學校でありました。それから、卒業生が間違へて居る事があります。萬事人に勝らうとするこれがかぬ。これでは學問は出來ても人格が出來ぬ。智慧は

出来ても、正智が出来ぬといふのはこゝであります。小學に「勿_レ妄_ニ求_ム勝_ト」とあります。己と人と比べてみると、どうも彼が勝つて居る。どうかして彼に勝ちたいものだ。彼の父が死ねばよい、法事等の爲忙しい。彼が病氣をすればよい、その間に追ひ越してやらうなんか考へるものがある。こんな量見では到底學問は出来ない。學問はやはり友達が出来なければ己も出来るものでありませぬ。松下村塾に諸生が澤山居りましたが、互に相助けで學問したもので、皆大親友でありました。人に勝つよりも、書物を充分に研究し、それを行ふ事が出来たならもうそれで善からうと思ひます。競争といふ事に對しては目標を大きく立てねばなりません。山口は縣の中心であるが、その中學の生徒と比較するとどうか、名古屋は日本の大都會だが、その中學の生徒と比較するとどうか、東京の日比谷の中学生と比較するとどうか、我々が上であつたら、益々勉強して下らぬ様にし、若し劣つて居たら、大に奮發して追越す様にする、これは至極宜敷い。友達同志互に争ふのは面白くありません。若人に勝つ様になれば元氣が無いと云ふが、元氣は大きな處へ出さねばなりません。

長く話すと飽きが出るかも知れぬが、私は根性の悪いたちで、かう話しながらも、一年生の動作と五年生の動作とを比較して居ります。或地に中學が四つあります。失敬だが全く駄目だ。或校は敬服します。その學校へ行つて話をしました時、先づ一年生を見た。行儀が甚だ善い。一年生でさへそれだから、上級生は見る必要もありませんが、五年生は全校の指導者だから、中を飛ばして五年生を見ました。私は其時戦争の記念話をして居ましたが、ピリットもせぬ。時間はかれこれ二時間もたつたが、姿勢は正しく、面は皆こちらへ向つて居る。校長は餘り話が長いから、「御年齢の事だから御疲れてせう」と止めさせ様とせられたが、私は一向聞えぬ振りをして、到頭九時から十二時まで三時間ブツブツで話しました。それでも生徒はピリットもしませざつた。私はこれな

ら結構だと感服しました。それから校長に、「今の三時間の話を、生徒に十分間に筆で書かせて呉れぬか」と頼んでみました所が、その學校には將校の子供も數人居ましたが、皆學校から褒美を貰つて居る。聞いてみると、八分以内に書いた者は褒美を下されたとの事でありました。他の校では行儀はまるでなつていませぬ。姿勢を崩す、話をする、欠をする、實に怪しからぬ事でありました。私は皇室の事は餘り知りませぬが、軍事參議官の事務で隔日に參内致して居りましたので、希望によつて、上奏儀式の事を話して居りましたが、とてもこれでは駄目だと思つて二十分位で止めました。後で校長代理が斷りに來られました。五年四年等は已に行儀作法は自然に出來て、一年二年三年等は殊更につくらねばなりません。欠が出た時などは後でシマツタといふ心が起らねば駄目です。四年から五年になると大變むづかしくなるといふが、決してそんな事はない。順序に教へてあるから同じ事である。只行儀作法が出來て居らぬからむづかしいのである。私は廣島に居りますから、古い話が希望ならいつでもします。何か質問はありませぬか、質問がなければこれでやめます。

澤柳博士講演要旨

F

生筆記

私は唯今村上君から紹介のありました澤柳政太郎であります。私は一度當地へ來て見たいと永い間願つて居たにも拘らず、どうしても希望を達することが出來ませんので遺憾に思ひましたが、今日漸く其希望を達することが出來ました。

今日は明治天皇御祭日で我々臣民の記念すべき日でありませぬ。此記念すべき日に、此記念多き地に於いて多数の青年少女に一言することを得るは私の光榮とする所でありませぬ。諸君は屢々當地出身の諸先輩や當地來訪の方諸名士の談話を聽かるゝてありませうから、今私が御話すべき事は何も無いのでありますが、折角來訪したのでありますから、少許感じた所を御話致しませう。當地に來ての感想は何人も同様であらうと思ひませぬ。されば私の御話することは諸君の是迄屢々聽かれた話と同一趣旨の事であるかも知れませぬが、其は恕して貰はなければなりません。

唯今の村上君の話の如く、當地はどう見ても交通不便と云はねばならぬ。交通が不便であるときは新しい事業の起ると云ふことはどうしても困難であります。何年か先になれば鐵道の便もつき港灣も開かれる様な事がないでもありますまいが、當地にそんな便利が開かれる頃には他は益々便利の土地となるてありませう。商工業農産物の集散の中心となるにはどうしても交通の便が必要であるとすると、當地の如きはそんな事は到底望がないと云はねばなりません。今日以前の萩は王政維新の策源地とも云はれて、多数の偉人名士も輩出し、立派な事業が出来たが、將來の萩は日本の文明には無關係であるから、假りに商業工業に依らざれば國家の發展は期すべからざる者としたならば、當地の如きは到底見込はないと云はねばなりません。然しながら國家の發展進歩は決して物質的の進歩のみではなく、どうしても立派な人間を要するのであります。其立派な人間は商工業の中心たる地からでなければ出ぬ者であるかと云ふと、決してさうでないのみならず却つて其反對と云つてもよい様であります。維新の際の事を考へて見ても、交通の不便は今日よりも一層甚しかつたに違ひないが、其でも人物は彼の様に出して居り、殊に吉田松陰先生の如きは天下の大偉人であります。さうして見ると、此地方は人物を出す

には適して居ると云ふことは争はれないのであります。土地としてはさうであります。將來も果して彼様な立派な人間を出すことが出来るかどうか問題であつて、諸君の奮勵を要することでありませぬが、是にも諸君は非常に善き材料を持つて居らるゝのであります。松下村塾は勿論、其他の諸名士の遺跡が澤山残つて居て、昔の俳を偲ぶ事が出来る。松下村塾の如きは遠方の人が態々之を見に來るのであります。是は決して物數寄に名所古蹟を尋ねると同様の考を以て來るのではなく、之に接して其感化を受けたいと思ふのであります。然るに諸君は毎日目前に此等の好模範に接し、感奮興起すべき材料を澤山に有せらるゝのであるから、修養上には此上ない好都合である。此地方から人物が出て何處から出ませうか。

當山口縣下には多くの中學校がありますが、子弟を教育するには當地程好都合の處は多く有るまいと思ひませぬ。然るに本年萩中學校入學希望者の状況を聞いて見ると、縣下中學校中で一番少なかつたと云ふことである。入學するに便利な地を擇ぶは無理からん事では有るが、此地ぢやからと云つて相應に便利も有つて、父母を省ることも出来る。品物を求むるにも、市街に出づれば大抵の事は辨ずるて有らうと思ふ。長い間に人物を陶冶するには土地の便不便を論ずる必要はない。四圍の事情の最も教育に適する處を擇ぶのが第一であります。我々より見れば、萩の希望者は他より多からねばならん筈であるのに、事實がさうでないで、縣の報告に怪異の思をなしました。此様な状況は恐らくは一時的の事で、村塾の感化が段々廣く及ぶに従つて希望者の數も漸次増して來る事と思はれます。しかし一面に於いては、萩中學校たる者は國士の面目を十分に發揮する様に努めねばなりません。校長教員も努力教導に従事せらるゝ事なれば、生徒たる者は能く其教を守りて勉強するは言ふまでもなく、此由緒多き土地に學ぶが爲に自重せんければなりません。人數が多いから人物が多く出ると云ふ様な譯もないから、

假令人数が少いからと云つても、努力次第では人物が澤山出る事もありませう。諸君の父兄も特別に盡力せらるる事でありませうから、諸君は十分勉強して有爲の人物となり、忠孝の道を能く守り、一旦緩急あれば義勇公に奉ぜんければなりません。かく申したからとて、人間が國家に盡すは軍事のみと云ふてはない。商業でも工業でも農業でも皆其々に國家に盡すことは出来ませう。

忠孝の道は日本國民たる者の特に能く守らねばならぬ所の者であります。私は曩に孝道奨励の目的を以て「孝道」と題する詰らない著述を致しました。新聞紙上などに現れました孝子の記事は平生注意して切抜きました。其中に久原房之助と云ふ實業家の親孝行の話がありました。其後一度其人に逢つて見たいと思つて居ましたが、此度當地に来て始めて此地方の出身の人であると云ふ事を知りました。故伊藤公の政治家たる事は誰も能く知つて居ますが、末松博士の「孝子伊藤公」を讀んで見ると、公は又立派な孝子であります。實業家として成功した久原も亦孝子であつて、其老母に事へるに極めて親切であると云ふ事です。久原氏は青年時代から艱難の中に處して、長く學校に在りて學問など研究せられた事はなかつたさうです。孝子は必ず學問した者と云ふことはない。今日相當の位地あるものでも皆孝子であるとは云ひ難いので有ります。私は先年日立鑛山を見ました。技術上から云つても經理上から云つても實に行届いた者であります。私には専門の智識がないから立入つた批評は出来ませんが、風紀が實に能く保たれ、役員は皆質素で、道徳が立派に行はれて居るから、斯る處には珍しく警察事故がないさうであります。其經營者は久原氏で、當地の出身者である。久原氏と云ひ藤田氏と云ひ、當地の出身者で、實業界に立派な成功をした者も澤山あります。此等の富豪が、中學校の奨學資金とか、女學校の建築とか、又此講堂の建築とか、各種の公共事業に資を投じて公衆の利益を謀らるゝ其精神の偉大なることは實に想像する

に堪へて居ります。他の地方からも實業界に成功した者は段々出て居りますが、此等の事は企て及び難い所であります。諸君が春秋に富み、多望な前途を有して、彼様な人々の特志に成つた建物の中に日々修學せらるゝのは實に幸福の事である。諸君は必ず、成就する所がなくてはなりません。成就すると云ふのは、諸君が皆々政事家や軍人とならるゝを望むと云ふのではなくて、先輩諸氏に耻ぢざる立派なる人格の人とならるゝ事を望むのであります。

大人物の出たと云ふ事は誇るに足る事では有りますが、唯過去の事實として遺る丈では妙は有りませぬ。其感化を受けて、跡を繼ぐ者が絶えず興つて來る様でなければなりません。支那の如きも、昔は孔子とか孟子とか云ふ様な人も出て居り、其外にも英雄豪傑が續出して居り、革命の有つた様な時には、何時も相應の偉い人が出たと云ふ事は、支那は世界に誇るに足つて居ります。希臘の如きも、古は學者や美術家など、世界に有名な人物が澤山出て居り、羅馬も亦其通りである。然るに其等の國々は今日はどうでありますか。伊太利も昔の伊太利ではなく、希臘も振はず、支那もあの通りであります。して見ると、過去に人物が出たと云ふ丈では未だ必ずしも誇るに足らないと思ひます。

諸君が、此地方に、歴史上特筆大書すべき偉人傑士を澤山に有せらるゝ事は實に諸君の幸福であると思ひます。がしかし、今日の後、其等の偉人傑士の跡を繼いで興る者が出なかつたならば、支那人が孔・孟・漢高・唐の太宗などに誇り、希臘・羅馬の人がプラトン・アリストテレス・ミケルアンゼロ・ラファエル等を誇るとどれ程の差がありませうか。諸君は或は此と同様の考を以て、此地方から偉人傑士を多く出したと云ふ事を漫然と自慢して居らるゝのでありますまいか。繰返して申しますが、歴史上に特筆大書すべき大人物を出したと云ふ事は此地方の誇

であつて、誠に尊ぶべき事でありませぬ。諸君は此様な好き模範を以て居らるゝから、勵精刻苦して、其跡を繼ぐ者となり、此實の値を十分に發揮し、實の持腐とならぬ様に務められなければなりません。私は是から松下村塾を觀に行く積りでありませぬが、定めし深い感動を與へらるゝ事と思ひます。私の今の御話の中には、或は皮肉な事を申し過ぎた様な事もありましたが、其は諸君の寛容を願ひます。御互に日本帝國の臣民たる者は、此國家の爲に努力せねばなりません。諸君が努力して立派な人物となられたら、其地方の名譽たる事は言ふ迄もなく、實に日本帝國の名譽でありますから、諸君が此點に注意して努力せられん事を希望します。

序に今一言申添へて置きたいと思ふ事があります。こんな事を申しては失禮かは知りませんが、郷里に對しては何人も特別の考を持つのが人情でありますから、當地方から出られた諸先輩は當地方には特別の考を有せらるる事もありませうが、諸君に若し多くの先輩を有すると云ふことを特む心があるとしたならば、其は彼の最も恐るべき依頼心を増長せしむるの弊に陥る者であつて、深く自ら警戒せんと方針を誤る様な事になるかも知れませぬ。先輩を有せん者は依頼する所がないから却つて自ら努力する事が多い。昔の諺にも「艱難は汝を玉にす」と云ふ事がある。艱難は望まじき者ではないが、しかし人間は艱難辛苦を経て始めて立派になるものであります。諸君が先輩を恃んで依頼心を増長させると云様な事があつたらば、先輩の意志に負く者であると云はねばなりません。地方で最も多くの先輩を有する土地を擧ぐれば薩長であるが、薩長の青年が果して先輩に依頼するの弊に陥つて居ると云ふ様な事が有りはしませんか、諸君の深く省みて警戒せられん事を望みます。

松陰先生の中心思想

松陰追慕會に於ける村上校長の演説

松浦 原忠 次筆記

今月今日は我等の日常敬慕する吉田松陰先生が江戸は小塚原と言ふ所の斷頭臺上の露と消えられた日である。此の日を記念する爲に、松陰神社では秋季大祭が行はれる。後刻我々も參拜しなくてはならぬが、其前に毎年の例により、先生の遺徳を敬慕する爲に追慕會を開くのである。昨年迄は、先生の遺文を掲げて、是に就いて講義をするのが例であつたが、今日は少し様子を變へ、先生の中心思想とも云ふべき先生の全精神の中心を占めて居た思想に就いて話すつもりである。先生の中心思想は、御若い時と御晩年とでは少し違つてゐるが、御若い時は尊王攘夷の四字を以て包括する事が出来る。是は王室を尊び、歐米諸外國人即ち夷狄を討ち攘ふと言ふ意味で、先生も始には是を中心思想とせられたのであるが、だん／＼思想が熟して來て、御晩年には勤王討幕主義になられたのである。是は其の文字の示す如く王室に勤め幕府を討つと云ふことであつた。何故先生の思想が晩年にかく變つたかと云ふことには種々の事情があるが、是を説明するには更に二三時間を要する故、今日は是を略し、御晩年の事のみについて話すのである。尊王と攘夷との二主義は維新前には随分喧しかつたが、元來此二者の間には密接なる關係はない。王室を尊ぶと云ふことから夷狄を打攘ふと云ふことは出てこないのだ。關係がないのに二者がくつつけられたと云ふのは當時の志士の識見が浅かつたからだ。其の證據には、今日現に諸外國と交際して居ても皇室の御稜威は年を逐うて益輝くではないか。されば尊王と攘夷とは論理上くつついたものではないが、先生にも御若い時は是の思想が有つたことは「小少尊攘志早決」の句があるので分る。併し乍ら晩年には、

晩年と云つても、死なれたのが僅か三十歳であるが、御死去前の事を晩年と云ふのである。其の晩年には勤王討幕論者となられたのである。勤王論と討幕論とは論理上結合すべきもので、王室に勤めんには必ず幕府を倒さねばならぬのだ。是は國史關係に通ぜざる者は必ず知つてゐることであるが、當時は徳川氏の勢力が強かつたので、之をあからさまに稱へたものはなかつたけれども、元來徳川の初代頃から萌して居たのである。第一に、親藩たる徳川光圀の日本史が既に此思想を養成するに與りて大に力があつた。其後、山鹿素行の中朝事實・山縣大貳の柳子新論・淺見綱齋の靖献遺言等の著書が續々出て此思想を鼓吹したのである。此等も明ら様には書いてないが、眼光紙背に徹する識者が讀む時には、此を看破せざるを得なかつたのである。我大日本帝國は萬世一系の天皇が統治さるべきもので、今上天皇御踐祚の勅語の中にも、「朕今萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ統治ノ大權ヲ繼承ス」と仰せられてある。即ち是が日本の國體で、我國では統治の大權は天子様が握られなくてはならないのだ。所が、源氏が起つて以來、統治の大權は武門に遷つた。是は我國體に矛盾して居るのである。此國體を神武天皇御即位當時に返すには、大權を朝廷に返さねばならぬ故、勤王の思想には必ず討幕の思想が伴ひ起る可き筈なのだ。徳川十五代中、勢力の有つた時代にはあからさまに之を唱へる者はなかつた。然れども、大日本史・中朝事實・柳子新論・靖献遺言を讀めば、此思想は誰にでも起らざるを得ないのである。然し、此等の書を讀まぬにしても、幕府の専横なる振舞が吾々の眼に映じたなら、自然起るべき筈であり、又實際吾人の眼に映じたのだ。其の一二を話すと、只今の東京の宮城は實に壯麗なもので、試に二重橋の外に立つて之を拜觀しても、自ら天子様の有難さが分る。或る支那人も「不見皇居壯、安知天子尊」と云つてゐる。然れども、之も維新前迄は徳川氏の立籠れる江戸城なのだ。處が、其反對に京都の禁裏は如何かと云ふに、素より徳川氏も修築若くは再建したので、左程見す

ぼらしきものではないが、之を江戸城に比較すると粗末なものだ。數字を以て明に之を證明することが出来る。前者は十萬五千餘坪あるに、後者は僅に三萬三千餘坪に過ぎない。つまり、江戸城は禁裏に比して三倍以上の大いさを以つてゐる。されば、寛政の三奇人の中の高山彦九郎正之是人は上州新田郡の出身なれば義貞と同郷であつて、非常な勤王家であつたが、京都に上るには江戸も通るので、徳川氏の居城の壯大なのを見た目で京都に入つて慷慨禁ずべからざるものがあつたらしい。聞説く彼は三條橋上に端坐し、遙に皇城を拜して流涕長大息したと云ふことだ。是でも幕府の傍若無人の態度は善く分るが、之は猶恕すべしだ。まだ／＼是以上の事がある。幕府は天下三百諸侯に參勤交代をさせて居た。之を話せば長くなるから他日に譲るとして兎に角、年を極めて幕府の御機嫌を伺はせたのだ。固より斯あるべき筈であるが、參勤の途中、大名小名が京都に立ちよつて天子様の御機嫌を伺ふことは許さなかつた。然し、我毛利家だけは代々勤王の志厚く、毛利元就は正親町天皇御即位の料を献ぜられ、其後も、石州の銀山を以て御費用に充て、年末年始には必ず献上物をせられた故、參勤の途中朝見せらるることができた。然し、是は特別で、其の他は悉く駄目であつた。これは未だ恕すべし。將軍自身は入朝したかと云ふと、自分は江戸城に傲然と構へて、御伺した事と云つては、第三代の家光の時と、それから遙か下つて十四代の家茂の時それも御召に依つて入朝したのみだ。始は一年に一度、後には三年に一度、天下の諸侯を江戸に呼び付け乍ら、自分は京都に入朝しなかつた。此様な不敬、不敬も不敬大不敬を見せつけられては、大日本史を讀まんにした所が、志有る者は切齒扼腕せざるを得ないのだ。矢張三奇人の一人なる蒲生君平は高山彦九郎の郷里に近い野州宇都宮の産で、歴代の皇陵の廢頽せるのを慨き、山陵誌を書かれた程の人だが、京都の歌人にして勤王の志篤き小澤蘆庵の宅に寄居せられた時、或日、蘆庵が御馳走をこしらへて待つて居るのに、一切歸つて

來られぬ、夜深けて漸く歸つて來られたから、其の理由を問へば、「實は今日足利氏の菩提所である等持院に行き、尊氏の像を四五百鞭打つて來た」と言はれた此を唯其だけに聞くものは、未だ君平の心事を付度することの出來ぬ者だ。彼は、恐らくは、尊氏の木像を借つて、家康を始め歴代將軍の頭を毆つたつもりだつたらう。其後、時勢は益々進歩して、終に幕末には、開祖家康公の出られたる三河の國、而かも譜代大名の藩士より熱烈火の如き勤王の志士を出した。三河の國に刈屋と云ふ所がある。本校の足立先生の御郷里の近くであつて、維新前は二萬三千石の土井氏と云つて譜代の大名が居た。此は土井利勝の分家で、利勝は家康・秀忠・家光の三代に仕へたる大忠臣で、特に家光を佐けて大功があり、青山忠俊・酒井忠世と共に寛永の三輔と云はれた人だ。其利勝の三男利長の封ぜられたのが三州刈屋で、其藩士中から熱烈火の如き勤王家松本奎堂と云ふ人が出た。彼は十津川の戦に三十四で戦死せられたが、若い時、家康の遺骸を葬れる駿河の久能山に登つて、有名なる詩を作られた。なか／＼よく出來てゐる。「石燈盤回老樹間。此中何事設重關。鐵鎚難入三泉底。知是祖龍埋骨山。」此詩は當時人口に膾炙したもので、特に最後の二句が大切だ。之を説明するには、支那の故事を説明しなくてはならぬ。其は一昨年も話したが、韓の遺臣張良が、秦の始皇の韓を亡したるを恨み、壯士を雇ひ、博浪と云ふ所で、始皇の車に大鐵鎚を投げさせた。然し、惜しい哉中らなかつた。此を此處に用ゐられたのだ。我も亦家康を撃ち殺さんとするも、今や其死後三百年、此處は唯彼が埋骨の地なり、今更鐵鎚を振上ぐるとも如何せんと嘆ぜられたのである。是れ蒲生君平が言はんと欲して言ふを憚つたことを唱破したものはあらざるか。既に幕末とは云へ、徳川の餘勢猶存する時、然かも、譜代の藩中からは是の如き人物を出したのである。かやうな世に於いて、勤王の志篤き毛利藩より松陰先生の如き人物が出られたのは當然の事である。一體、松陰先生の精神は先生一代の精神ではなく、

父上から受けられた思想である。先生の父上は百合之助と云ひ、書物好きであつた。就中尤も仁孝天皇の文政十年二月十六日の詔と廣島の神官玉田某の神國由來と云ふ著書とを愛讀せられた。元來、松陰先生の實家杉家は貧乏で、「所謂貧乏暇なし」なれば、毎時も稼がなくてはならぬ。そこで、常に田に出たり山に行かれたりしたけれども、山や田の中で勉強せられ、又先生の兄さんなる民治氏後の梅太郎、先生の大次郎等もみな田圃の間に教育し激勵せられたのである。それで、先生の詩の中にも「耳存文政十年詔。口熟秋洲一首文」と云ふ句がある。一體文政十年の詔とは如何なるものかと云ふと、本學期の始めにも話したが、復繰返すと、仁孝天皇は、文政十年二月、家齊を大政大臣に拜し、嗣子家慶を従一位に叙せられた。征夷大將軍にして大政大臣を兼ねたるものは頼朝以來始めて、天皇は二月十六日を以て之を天下一般に御布告なされた。百合之助さんは此の詔を見られて憤激せられたのだ。幕府の専恣、皇室の式微は此詔に依つて明に想像ができる故に、常に二子梅太郎、大次郎にも讀んで聞かせて勤王討幕の思想を鼓吹されたのである。家齊父子は生ながら此優遇を受けて、入朝して拜謝せなかつた。天下の諸侯をば參勤させながら、己は決して入朝せぬ。かかる高位高官に叙せられ乍ら、臣下中の三親藩ならまだしも、極めて小さい白川城主松平越中守定信の息子の當年十八九歳なるを使として拜謝せしめた。實に頼朝以來始めての榮譽であるのに拘らず、其謝禮には小さい譜代大名の息子を出したのである。之を聞いて憤慨せざるものは日本國民に非ずだ。松陰先生父子も亦同様に憤慨せられたのだ。天下の志士を鼓舞して勤王討幕の義舉に出でしめるには必ずしも徳川光圀卿の大日本史・山鹿素行の中朝事實・山縣大貳の柳子新論・淺見綱齋の靖獻遺言等の著書を要しない、幕府の目に餘る所行で十分であつた。つまり幕府を倒したのは幕府自身で、誰をか怨まん、みな身から出た鏑だ。これで勤王討幕論の來歴主旨が略分るだらうと思ふ。一體、防長二州は徳川氏

に對しては又特別の關係がある。是も始業日に話したが、元來、毛利家と徳川幕府とは兩立し難き歴史を以つてゐる。之を説くには秀吉がまだ天下を取らぬ時に迄溯らねばならぬ。秀吉は主君信長の命により中國征伐に赴いた。流石は名將、戦へば勝ち、攻むれば取り、終に備中に入り、天正十年四月、高松城を攻むるに至つた。高松城は城將清水長左衛門宗治毛利氏の爲に之を死守して長く降らなかつたので、終に水攻にした。水はだん／＼増して、城運旦夕に迫つた。然し、秀吉之で満足しない。毛利氏を攻むる爲に主君信長の出馬を願つた。そこで、信長は先づ明智光秀、筒井順慶等を遣し、自分も出發せんとして本能寺に宿つた。毛利家は之を聞いて媾和の使者を出したが、秀吉はなか／＼聞かない。其の内京都から使者が来て信長の變死を報じた。秀吉は心中大いに驚いたが、之を發表しない。此日、高松城は終に陥つて、守將宗治は自殺した。毛利家からは再び使者が来て頻りに媾和を願つたが、秀吉は決して承知しない。明日來いと云うて追ひ歸した。明日使者は復來た。所が、豪傑は違つたもの、一伍一什を打開けて、「實は我信長公は光秀の爲に變死せられたが、毛利家は猶和議を望まれるか、若し拙者を撃たれば今日に越したことはあるまい、篤と熟考せられるがよい」と云ふて使者を返した。毛利家では之を聞いて大いに喜び、諸將は口を揃へて、「媾和は信長に對して二度願つたが、秀吉に願つたのではない。信長が死んだ以上は構ふことはない、其軍氣阻喪せるに乗じて秀吉を撃ち破つたらば毛利家の幸運も一層開ける」と主張した。併し、其時毛利の智慧袋ともいはるゝ小早川隆景が進み出て「拙者の見る所は諸君と異なり、信長の變死は毛利家の幸福にあらずして、秀吉の幸福である。抑々應仁以來、七道分離して争亂相踵き、今日に至りて其の極に達してゐる。天は將に一豪傑を生じて天下を平定せんとしてゐる。拙者熟々秀吉の舉動を視るに正に其人らしい。信長の死後、其の子弟諸將の内秀吉に優る者は居ない。今主君の變死に際し恰も當方より和議を申

込みたるに、常人ならば必ず其れを秘して直に我申込を容るべきに、一伍一什を打明けて我決心を促す如き其洪量、豪膽測るべからざるものがある。拙者窃に彼の陣營を視察せしむるに平日に異ならず。今彼と戦はば、曲我に在りて、彼は深く我を恨み、死を決して來り戦はん。我能く彼を撃ち破りて、彼を捕へる事ができるや否や。若し彼をして遁れ歸らしめば、他日必ず雲蒸龍變して我を撃ち亡ぼすに至らん。然れば、此際前約を踏んで和議を講せば、彼は我を徳として永く厚く我を遇し、功名富貴將に我と共にすべし」と言はれた。輝元公も此の説に賛成せられ、媾和した上に更に秀吉の請を容れ、弓銃各五百・旗三十・騎士一隊を假して光秀を討たせられた。かかる關係から、秀吉は甚だ其の恩誼に感じて毛利家を優遇したものだ。其後、征韓の役も終を告げない内に、秀吉は大患に罹られ甚危篤になられた時、大將株を呼んで遺言せられたが、第一に呼ばれたのが徳川家康で、「幼兒秀頼を佐け、征韓の事を托すべきものは貴公を措いて外にない。秀頼が成長して、天下に主たるの器量なくば、立つると立てざるとは貴公の意に任すべし」と言はれた。其時、家康は流涕して、「殿下百歳の後、郎君を奉しな

い者があるとは思はれぬ。併し、天下の事は、拙者は不才、到底其の任にあらず」と云ふて固辭したのである。英雄の涙は兎角信用が出来ない。そこで、石田三成や増田長盛に圖つて五大老・三中老・五奉行を置いて天下の事に當らしめられた。五大老とは徳川家康・前田利家・毛利輝元・浮田秀家・上杉景勝の五人である。處が、一度、石田三成が兵を擧げて關ヶ原の戦となるや、毛利家は太閤に對する從來の義理上西軍に與みせざるを得なかつたのである。誰も知る如く、この戦は西軍の大敗となり、毛利家の領地山陰山陽十三州より僅か防長二州に削られた。然し、かくなつたのも勇氣の爲だ。古人も「人生感^カ意氣^キ。功名誰復論^カ」と云つてゐる。一體、勇氣のないものは人間が甚だ面白くない。少々損はしても恩義に報ゆると云ふ勇氣がなくてはならぬ。毛利氏は豊臣氏の爲に勇氣

を出して、十三州の太守は防長二州の太守に成り下り、僻陬の藪に引込んだのだ。此歴史ある以上は、毛利家が徳川幕府に對して心平かならざる事は當然の事である。故に、松陰先生の勤王討幕論は徳川光圀以來醜釀せられたる思想を本となし、之が傍毛利家の徳川家に對する關係によりて培養せられたるものと考へねばならぬ。勿論、此思想は先生の存生中には實現せられなかつたが、先生の死後愈々花を開き實を結んで、終に明治維新の新天地を齎らしたのだ。故に、吾々は此思想を抱いて、防長士民否天下萬民を提撕せられたる先生の偉大なる人格を追慕せなくてはならないのである。

余平素行篤敬ならず、言忠信ならずと云へども、天性甚柔懦迂拙なるを以て平生多く人と忤はず。又人の惡を察すること能はず、唯人の善のみを見る。故に宗族郷黨より朋友故舊に至る迄、多く余を怒嫉する者あらず。

松 陰

校 誌

山本良吉氏來校

二月三日、京都帝國大學々生監山本良吉氏來校せらる。恰も長途競走舉行當日なりしを以て、競走の概況を覽て歸宿せられ、翌四日、改めて來校、午後一時より、講堂にて一場の演説をせられたり。要旨は載せて説林欄に在り

卒業式

三月二十日、午前十時より、第十五回卒業式を舉行せらる。知事代理として警視長笹井幸一郎氏來校せられ、來賓としては、能美少將小倉大佐玉置野北兩中佐内田町長神代少佐米原實科高女校長谷井信國井町の各小學校長波多野修善女學校長中村萩町助役以下三十餘氏の出席あり、例に因り、校長勸語を捧讀し、卒業生六十七名に卒業證書を授與せられ、次ぎて知事代理の、懸賞與規程に據れる賞品の授與、校長の賞品授與等あり、校長の告辭朗讀終るや、笹井氏の長官告辭の代讀あり、能美少將來賓總代として祝辭を述べられ、第四學年生吉田操君在學生を代表して祝辭を朗讀し、卒業生總代柴田省三君答辭を讀み、式は十一時三十分を以て終りたり。

長官告辭

本校茲ニ卒業證書授與式ヲ舉クルニ臨ミ卒業ノ諸子カ多年洋瀛ノ成跡

校 誌

ヲ觀ルハ本官ノ深ク喜フ所ナリ願フニ諸子ノ目的ハ今後尙進ンテ高等ノ學術ヲ修メ或ハ直ニ實務ニ從フ等其期スル所一ナラスト雖モ何レモ將來國民ノ中堅トナリテ國家ノ進運ニ貢獻スヘキ重大ノ任務ヲ有ス而モ複雑極マリナキ社會ニ立タントスル必スヤ千難萬難ニ堪ヘ得ヘキ確固タル修練ナカルヘカラス我邦方今文化日ニ隆盛ニ赴クト雖モ世界ノ大勢ハ一日ノ儉安ヲ許サ、ルモノアリ諸子ハ人生ノ最モ大切ナル青年期ニ在リ今日中學ノ業ヲ終ヘテ是レヨリ志ス所ノ道ト其意思ノ堅否トハ單リ諸子一身ノ榮辱ヲ分ツノミナラス將來諸子ヲ以テ中堅トスル國家ノ安否ニ關スルコト甚タ大ナリ諸子宜シク思フ茲ニ致シ本校教養ノ旨ヲ服膺シテ益々其ノ品性ヲ修養シ各自ノ天職ヲ恪守精勵シテ以テ其目的ヲ遂行シ上ハ、聖恩ニ奉答シ下ハ父祖ノ囑望ニ報インコトヲ期スヘシ之ヲ告辭トナス

大正四年三月二十日

山口縣知事從四位勳三等 赤 星 典 太

校長告辭

卒業生諸君余ハ諸君ノ卒業ヲ喜ヒ諸君カ今後一層自重奮勵シテ以テ將來大ニ爲ス所アラソコトヲ切望シテ已マサル也今ヤ曠古ノ大戦亂ニ際シ我國モ亦其戰局ニ關係シ新ニ歐洲ノ最強邦獨逸ノ東洋ニ於ケル根據ヲ覆シ國威益揚リ國光愈輝ク惟フニ東洋ノ問題ヲ解決シ以テ其平和ヲ確保シ其福利ヲ増進スルノミナラス將來東西兩洋ノ文明ヲ打テ一丸ト爲シ以テ世界ノ進運ニ貢獻スルモノ我國ヲ措テ亦之アラサル也諸君ノ先輩ハ五十年前維新ノ機運ニ際會シ不朽ノ大業ヲ成就シテ我國ヲシテ能ク今日アルコトヲ得シメタリ諸君タル者斯ノ世界的變動ノ一大機運

七十五

ニ遭遇シ豈ニ諸君ノ先輩ニ辜負シテ可ナラン乎昔者中原ノ風雲正ニ急ナルヤ半夜雞聲ヲ聞キ友ヲ蹴テ起テ舞ヘル者アリ諸君モ亦能ク此ノ如キ意氣ト抱負トヲ有スルヤ否ヤ若シ希望ヲ未來ニ繫クルコトヲ知ラス從ニ目前ノ歡樂ヲ追ヒテ其他滿ニ耽溺スル者アラバ實ニ是レ我輩卒業生ノ名ヲ辱シムル者ニシテ諸君ハ須ク此輩ヲ擯斥シテ尙セサルヘキ也歐洲ノ戰雲猶未タ收マルヘクモアラス東亞ノ天亦風雲ノ穩ナラサルモノアルニ際シ茲ニ我輩第十五回ノ卒業證書授與式ヲ舉ゲ諸君ニ囑望スル所極メテ大也諸君夫レ旆ヲ勉メヨ

大正四年三月二十日

山口縣立森中學校長 村上俊江

當日の受賞者左の如し

一、銀時計 壹個 縣賞與規程に據る者 村岡淺一

一、漢和大辭典 特別賞 柴田省三

右本學年間精勤シ學力優秀ニシテヨク校則ヲ守リ且ツ伍長トナリテヨク其任務ヲ盡シ卒業ノ際成績特ニ優秀ナルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、チャンパーズ英語辭典 壹部

- 竹内基雄
- 西林鴻介
- 五峰作一
- 石津連
- 大津藤一
- 田總時俊
- 下瀬茂雄

右入學以來五箇年間一日モ懈怠セズ其精勤實ニ衆生ノ模範トスルニ足ル因テ頭書ノ物品ヲ賞與ス

賞品賞狀の授與

四月八日、午前八時より始業式舉行せられ、校長より一場の訓話あり終りて、賞品賞狀の授與ありたり。

受賞者並に賞品左の如し。

一、半紙壹束宛 第四學年松浦榮作 第三學年齋藤清治

右本學年間精勤シ學力優秀ニシテヨク校則ヲ守リ且ツ伍長トナリテヨク其任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、半紙壹束

第四學年 玉置 一

右本學年間精勤シ學力優秀ニシテヨク校則ヲ守リタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、半紙壹束第四學年吉田 操 同白根鶴松 同中村貞夫 同吉田 稔 同松村正一 同高 武夫 同池内 久 同櫻井義彦 同石井精一 同桑原仁作

第四學年宮崎恒介 同進藤常雄 同倉重義雄 同木村幸一 同中本義助 同岡崎文治 同長嶺元治郎 同原田俊人 同桑原芳樹 同見玉義清 同大野 寛

第二學年河村宜介 同金子重惠 同大田 豊 同和田義忠 同入江糾夫 同國近圭三 同田中政太 同横山良晴 同原田信次 同友森茂人 同吉村潤一 同金子 武 同尾崎信一

第一學年櫻井敬三 同小松成一 同熊谷眞夫 同河村久三郎 同松浦孝義 同志賀義雄 同磯松嶺造 同福川秀夫 同玉一市五郎 同山田基 同小枝慎一 同石田藤一 同森重干夫 同吉浦文治 同井上庸造 同東 高安 同杉山興二郎 同藤原敏男

一、半紙 貳束

横山繁介

右本學年間精勤シ學力優秀ニシテヨク校則ヲ守リ且ツ伍長トナリテヨク其任務ヲ完ウシタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、半紙 壹束

- 齋藤八郎
- 飯尾定治
- 兒玉才三
- 馬庭長一
- 西林鴻介
- 松原淨二
- 片岡勝資

右本學年間伍長トナリテヨク其任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、精勤賞狀

- 齋藤八郎
- 榎木長衛
- 竹内基雄
- 武田弦介
- 松井三雄
- 松井武夫
- 井本明治
- 田中英熊
- 下瀬幸男
- 田北幸一
- 岩武了

右本學年間伍長トナリテヨク其任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、半紙壹束 第三學年齋藤 剛 同河内利作 同岡田守也 同中野治作

右本學年間室長トナリテヨク其任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、精勤賞狀 第四學年杉 義夫 同伊藤俊光 同小田安一郎 同大谷 梓 同白根鶴松 同光藤省一 同横山義秀 同中山靜太 同山本賢次 同藤原忠二 同池谷 澄 同見玉 忠 同井上榮一 同大島喜一 同辻野有一 同村上俊夫 同林 秀生 同松村正一 同杉山良一 同山本悟一 同大谷晋久 同林代二郎 同中村貞夫 同宇野忠夫 同原田 胤長

第三學年宮崎恒介 同白井正夫 同岡崎文治 同藤井元治 同津守謙 同木村幸一 同原田俊人 同花村吉萬 同兒玉義清 同中島武彦 同中野治作 同村上三郎 同伊藤敏三 同中本義助 同大崎恭次郎 同仁尾重人 同齋藤虎雄 同戸倉靖次 同松尾剛助 同宇野徳兄

第二學年原野邦男 同藤田郁夫 同吉村潤一 同金子 武 同藤村六雄 同花田好定 同小澤重一 同小方 皓 同村上壯一 同大田 豊 同入江糾夫 同林 尙武 同信常兼道 同田中明三 同和田節二 同和田義忠

第一學年伊藤富士雄 同小松成一 同百濟芳雄 同椎木右手雄 同山本義夫 同熊谷眞夫 同來見田茂平 同河村久三郎 同鷺海 一 同須子正雄 同津田 信 同川上清水 同大野榮作 同板垣正規 同藤田重成 同岡 五郎 同武田 正 同磯部哲次 同伊藤繁行 同松崎

寛爾 同藤原敏男 同廣 榮一 同安藤義雄 同磯松嶺造 同井町敏正 同今田正一 同高 勉 同福川秀夫 同石田藤一 同山本登代治 同寺田重郎 同小枝慎一 同世良信一 同池永正治 同田中丈夫 同村橋徳治

昭憲皇太后御一週年祭遙拜式

四月十一日、午前八時より、昭憲皇太后御一週年祭遙拜式を講堂に行はる。校長以下順次拜禮し、終りて、校長御製和歌三首を引きて、皇太后御坤徳の大なりし事に就きて説話せられ、九時式を終へたり。

修學旅行

五月三日、午後二時、修學旅行隊は長崎に向つて出發し、豫定の如く各地を巡覽し、七日午後七時、無事歸着せり。旅行中の状況は左の日記に詳なり。

修學旅行日記

松浦 義夫 杉梁 義夫

春も半を過ぎ、今や旅行の好時期に入れり。我五學年修學旅行の議定るや、生徒をして地理人文を調べ、旅行先地圖を描かしめらる。五月一日、放課後、校長より旅行に就きての訓辭あり、終りて、風紀・衛生・交渉・寫眞・記録・庶務等の役員任命あり。

五月三日、天は我を恵み給ふか、先日來の雨天に引變へ、今日は好適の旅行日和なり。放課後、金谷祠前に集合す。四時出發の豫定を變更して、二時に早めし爲、遅参者數名ありしも、諸先生及下級生諸君に送られ、足立・庄野・中村三先生引率の下に、二時十五分出發す。浜生ゼリ。箱崎驛を過ぎ、埴松の間を走る事數分、右に巖々と聳えたる赤煉瓦は工科大學なり。十時十五分、吉塚驛に下車すれば、門司よりの打電に依り、旅宿よりの案内者已に來りて一行を待てるあり。

直に東公園に遊ぶ、園は即ち千代の松原なり。今や松縁に砂白き此地も、嘗ては唐紅の鮮血に染められたりしを思へば、人をして轉た凄慘の情に堪へざらしむ。龜山帝の銅像を拜し、日蓮の銅像(寫眞隊諸君の撮影あり)の巨大なるに驚き、パノラマ館に入れば、元寇の戦況を映出せり。此處を出て、大學病院を訪ひ、旅宿に向ふ。昨日來の疲れし足を曳摺り、埃塵に塗れつつ、正午過、上紙園町第二高島屋に投ぜり。直に晝食を喫し、錢湯に入り、見物に出づ。「成るべく、共進會・西公園等に行き、五時迄には一應歸舎すべし」との命令あり。時恰も九州沖繩聯合共進會開會中なるを以てなり。驛前にて電車に乗じ、縣廳前に下車す。會場は縣廳に隣せり。入場料を拂ひて、屹然空を突く會門をくぐれば、大國主命の塑像あり。正門白壁の建物こそ陳列場なれ。陶磁器・漆器・竹細工・織物・食料品其他種々の出品甚だ多し。教育館に入れば、諸學校の成績品・参考品の陳列ありしが、最も人目を引きたるは帝大出品の死體なるべし。其他特許品陳列場・國産品販賣部・電気應用館・南洋館等ありたり。分らぬ乍らも觀覽者をして驚嘆せしめたるは電気應用の廣きことなるべし。五時迄には悉く歸舎せり。五時半晚餐を終へ、九時迄自由散歩を許可せらる。余は電車を借りて西公園に遊び、光雲神社に参拜す。社は芟津山に在りて、黒田孝高・長政二公を祭る。社前よりは福岡博多を眼下に見下すべし。そもそも當市は九州第一の商工業地にして、海陸交通の要衝に當り、附近には名所舊蹟甚だ多く、電車は市の内外を貫通せり。其名産とする所は博多人形、

松に至りては、徐に別離の悲哀を感じ、權現原を過ぎては、香川・冷泉等の四氏が暗殺當時の落情を偲び、殉難二士の石碑の下にて暫く休憩す。是に於て遅参者も悉く來會せり。四時、進みて明木を過ぎ雲雀峠を越え、赤郷村大字雲雀山の一茶店にて携へ來りし辨當を食す、時に六時を過ぎる事數分なりき。太陽漸く西山に没し、炊煙欄引く頃、給堂を過ぎ、八時を過ぎる數分にして大田に着し、天神祠前に休憩す。當日、下關要塞砲兵一箇聯隊來りて演習中なり。九時、隊伍を整へて、此地を出立せしが、益々加る疲勞と睡臥との爲、隊列も自ら亂れ、前後の間隔も甚だ大となれり。湯の口を経て小郡に着せしは翌朝一時前後なりき。

四日、草鞋を靴にかへて、停車場構内に休息す。三時四十七分發の下り列車に乗り込みて下關に向ふ。車は心地好き曉風に吹かれつつ、五時五十六分着關、直ちに聯絡船に乗じて渡航す。海峡の曉色は朝霧に包まれて、折から碇泊中の大船巨船は模糊として浮び、織るが如き小汽艇は、朝霧の中より表れて、又其中に没し、海峡を扼せりと云ふ砲臺は見る事能はず、十五分にして門司に上陸す、流石に九州の關門内海の咽喉なれば市況甚だ活氣を呈し、海峡を出入する大船巨船は殆ど此港に碇泊するを以て將來の股賑想ふべき者あり。七時三十分、門司を發して福岡に向ふ。沿道に石炭の山積せられたるを見、筑豊炭田に入れるを知る。戸畑驛を出て、枝光を過ぎ、八幡に至る間、右に製鐵所あり、其規模の宏大なる事、眞に東洋第一たるの名に堪はず。又北方、帆橋の林立せるを望むは即ち若松港なり、筑豊鐵道の起點にして、石炭輸出の船舶輻湊せり。遠賀川の鐵橋も渡り、赤間福間も打過ぎて、古賀に到れば、大規模の砂丘到る所に起伏し、丘上今は小松を

博多織等なり。前方黒き漆に圍まれたるは福岡城址なり。慶長十六年長政公の築かれし所にして、今は一部の城樓を遺すのみにして、第四聯隊の兵營となれり。祠後に廻れば、海陸軍の征露紀念碑二基あり。今や太陽已に没し、暮色蒼然と落ち來り、泉の聲のみ寂しく聞えたり。北方博多灣を挟んで黒く走れる一線は海の中道なるべし。其先端稍々大なる黒塊を成せるは志賀島なるべく、其左方、陸地との間なるは殘島ならん。間中に道を辿りて海岸に降れば、黒瀬神社あり、岸に沿ひて福岡築港に出で、歸途小田部の藤を訪ね。藤花今や眞盛にして、球燈は隙なく點せられたり。九時、床に就けば、昨夜の睡眠不足と疲勞とは、吾等を驅つて忽ち安樂郷に逍遙せしめたり。

五日、四時起床、佐世保鎮守府副官に宛て到着時刻を報ずる庶務掛諸君の打電あり。六時廿五分、汽車は福岡驛を發し、往昔の水城の跡を眺めて、二日市に着す。太宰府天滿宮は、此處を距る僅に廿五丁なれども、時間の都合上参拜するを得ず、唯天拜山の昔の儘に屹然と聳えたるを見る。汽車は蜿蜒として曠漠たる筑紫平野を走り、窓外に植の林を眺めつつ、鳥栖驛に着せり、時に七時廿一分なりき。發車に間あれば、附近の逍遙を許さる。此處は八代・長崎線の分岐點として可成の繁盛を呈せり。七時五十五分發車して、鍋島氏の城下たりし佐賀・温泉に因りて知らる、武雄・陶器に有名なる有田を過ぎ、十時三十八分、早岐に着す。此處にて寫眞隊の撮影あり、又佐世保及び長崎に打電す。佐世保線に乗換へ、搖られ搖られて、十一時九分に、佐世保に着し、驛前の商家に荷物を預く。交渉員諸君先發して鎮守府に到り、一行の到着を傳へらるる等種々の盡力により府内觀覽の許可を得たり。二名の兵士に案内せられて、先づ海兵團に入り、練習用大砲・砲彈等を觀、

次に工廠に赴く。門前に待たさるる事少時、此間附近地理の説明を聞く。時恰も日支交渉中に在り、危機漸く迫れるを以て、金剛・利根・霧嶋を始め水雷艇・潜航艇・御用船海を埋め、弓張岳の無線電信中央よりの飛電を傳へんか、直に出動すべく準備をさし、怠なし。一步足を廠内に入れば、鐵槌の音は耳を劈き、汽車は縦横に走れり。近く開かれたる繋船池を觀る。是亦我國海軍の一大勢力たり。其岸に一基の大クレーンあり、英國製に繋る。之に匹敵すべきは英國唯一基を有するのみと聞く。時しも大なる鐵材を輕々と吊り上げたり。向小なるものは到る所にあり。今は廢物同様になれる舊船渠を見てさへ驚ける一行は新船渠の深く廣きには驚かざるを得ざりき。軍艦肥前は入渠修理中なれば、全體を四分し、各一人の水兵に尋かれ艦内を見學し約三十分にして出づ。前方、橋頭のみを露せるは金剛なれども、時間の都合上近く觀る能はざりしは遺憾なりき。厚く好意を謝し工廠を辭し、急足驛に向ひ、先に預けたる荷物を受取りて乗車し、午後二時廿五分、佐世保を發し、二時四十九分、早岐に着し、長崎線に乗換へて、三時卅五分に發す。汽車は風光明媚なる大村灣を迂回して浦上を過ぎ、山上に醫學專門學校を見れば、已に長崎に近づけるを知る。六時十三分、長崎驛に下車すれば、中山(中山靜太君の嚴父)來島阿部(來島眞介君阿部時彦君の令兄)の三氏出迎へらる。三氏の好意により、副船に乗じ小蒸汽に曳かれて港内見物に出づ。長崎港は、元龜の頃より、本邦唯一の貿易港文化輸入の門戸として、幾多外交の歴史を有するは夙に世人の知る所なり。横濱神戸の繁盛に赴けると共に漸次衰運を來し、復昔日の面影無しと雖も、曩に六百萬圓の巨費を投じて港灣の改良を施し、結果、如何なる大船巨舶と雖も陸岸近く碇泊するを得、殊に港

内風浪の患無く、世界有数の安全港として數へらるゝに至れり。一行は先づ東海岸に沿ひて走る。三氏特に一行の爲に説明の勞を執られ、且數個の双眼鏡を貸與されたるは深く感謝する所なり。海岸は三菱造船工場其大部分を占め、山の手は社宅軒を列ねたり。時に碇泊中なる義勇艦櫻丸・海底電線敷設船等を見たり。神崎を巡りて西岸に沿へば、檢疫所・小菅の引揚船渠等あり。大波止場の上陸し、七時半、浦五島町京屋旅館に投ず。是亦三氏が盡力の賜なり。十時半迄、隨意に市中を見物するを許さる。余等數名は外人居留地向ひたり。市の中央稍、高き所にある宏莊なる建物は縣廳なり。縣廳より、出島・出師の二橋を渡れば即ち居留地にして、各國の領事館あり。獨逸は先に引揚げたるが爲に頗る寂寥たり。支那領事館前を過ぐるに、火光窓外に漏るを見ても其多忙を察すべし。支那町を通り、再び縣廳前を出て、歸宿床に就けば、夢は故郷の山河を逍遙せり。

六日、五時起床、壯快なる曉風に吹かれつゝ、中山氏に尋かれて櫻町・勝山町を通り、國幣神社諏訪神社に參拜す。社は西山に在り、市の東北に當り、土地高燥、港内の全景一眸の中にあれども、朝霧立ち籠めて展望を妨げられたるは遺憾なりき。其神苑は諏訪公園にして、櫻樹甚だ多く、新緑滴らんばかりなり。園内に武徳殿あり、又數基の紀念碑・銅像を見る。是時、乗車上の都合に由り急に豫定時間を變更せらる。乃ち一旦宿に歸り裝を整へ、更に各自停車場に向ふ。中山來島二氏の見送を忝うし、厚く謝して別を告げ、七時四十分發車、歸途に上れり。早岐鳥橋も何時しか過ぎ、福岡驛を経て、やがて黒崎に到れば、電車との競走起れり。互に一勝一敗する中に門司に着す。少時休憩の後、例の如く聯絡船によりて下の關に上陸すれば、長崎よりの報知に

一日行軍

五月八日、一日行軍を行はる。第四學年生は登清穴に、第三學年生は川上に、第二學年生は三見に、第一學年生は越ヶ濱に向ひたり。

雪嶺博士の來校

五月十日、午前九時半過、文學博士三宅雄次郎氏隨行森田義郎氏と共に來校せられ、十時より、講堂に於て、余輩の爲に一場の講演を爲されたり。要旨は載せて説林欄に在り。

小野田中佐の來校

五月二十一日、聯隊區司令官小野田中佐來校せられ、一同を會し、徴兵検査の際、壯丁の花柳病に罹れる者を見る事年々増加の徵有る事、トラホーム患者の多き事、教育程度と處刑者數との反比例を示せる事、毎年壯丁中甲種の減じて丙丁種の多くなる事、歐米人に比して體力の劣る事、近視眼の多き事等を、一々比較表を示して説明し、終りに、歐洲各國の軍事上の實力を數字に由りて表示し、我國民の益々智體體の養成に力めざれば、國家の將來憂心すべき者有る事を諒説し、大に警戒を與へられたり。

海戰講話

五月二十七日、海軍紀念日なるを以て、海軍中佐桂頼三氏來校講話せられたり。氏は先づ日露海戰當時の實況を述べ、終りに、長州藩と海軍との關係を語り、本縣人の海軍に志願する者少きを慨し、盛に海軍に志

依り、先輩古谷實井三介二氏の出迎へらるゝあり、又二氏の配慮により考院館に投ず。夜は自由散步を許可せらる。時節柄春帆樓・引接寺等に杖を曳く者最も多し。二氏より菓子を寄贈せらる。茶話會を催す。餘興として蓄音器あり。古谷氏の懷舊談は吾人に深き感動を與へたり。十二時過、三氏に深謝して別る。又、本日、九鐵役員工學士井上幸一氏(玉置一君の令叔)よりも一行に丁重なる菓子果物の寄贈あり、亦吾等の深く謝する所なり。

七日、四時起床、五時十一分、下の關を發し、硫磺・セメント二會社の煙突聳ゆる小野田を経て小郡に下車せしは八時三分なりき。待つこと一時間、吾等が乗るべき汽車は來れり。九時十三分、此所を出て、九時四十三分に山口驛に着す。恰も高尙十周年紀念日の前日なれば市中は裝飾を施せり。直に一ノ坂を攀づるに、蟻の聲初夏を報じて、流汗玉の如し。佐々並驛にて晝食し、一升谷も一氣に下り、鹿脊隧道外の茶店に憩へば、既に下級生諸君の一行を待受けらるゝ者ありたるは嬉しかりき。隊伍を整へ、軍歌の聲勇ましく金谷祠前に到れば、校長始め諸先生併に生徒諸君の來迎せらるゝあり。校長より簡單なる慰勞の辭ありて解散せしは豫定の如く午後七時なりき。

伊藤書記の長逝

五月七日朝、玉木病院に入院加療中なりし休職書記伊藤義光氏は藥石効なく長逝せられ、八日午後七時、享徳寺に於て葬儀執行せられたり。本校校長以下生徒一同會葬し、校友會より生花六對を寄附せり。氏は在職十三年、孜孜として其職に務め、日曜祭日の如きも大抵出校執務せらるゝを當とせしかば、會計の事務整然として些の晦澁なかりき。惜い哉。

願すべきを登通し、困苦缺乏に堪ふる體力を養ひて、將來世界に雄飛すべき素地を作らざる可らざるを説き、多大の益を興へられたり。

毛利公爵の來校

六月四日、午前九時四十分、毛利公爵來校、一同を講堂に會し、松浦近侍長より一場の挨拶あり、十一時歸去せられたり。

渡邊中將の來校

六月七日、陸軍中將男爵渡邊章氏來校、午前十一時より、一同を講堂に會し訓話せられたり。(要旨は載せて説林欄に在り)

山根代議士の來校

七月一日、午前十時、本縣選出代議士山根正次氏來校、乃木大將逸事に就きて演説せられたり。氏は平生大將と交義あり、大將を讃ること最も深く、時々感極りて聲涙共に下り、人をして涙の襟を濡すを覺えざらしめたり。(要旨の筆記せる者あれど曩に氏の冊子として公にせられたる者あり本校にも圖書館にも並に一本を蔵すれば本誌には載せざる事とせり)

澤柳博士の講演

大津郡の講習會講師として來縣せられたる文學博士澤柳政太郎氏、講習會終りての歸途、八月二十九日を以て當地に來着せらる。村上校長の幹旋に因り、三十日午前八時より、明倫講堂に於て博士の講演あり、我中學生を中心として、一般有志の參聽を許したり。講演終りて、博士は

堂を下りて外庭に立てば、瑞氣の山川に磅礴するを覺えぬ。

提燈行列

同日、午後七時半より、本校は祝意を表すべく提燈行列を舉行せり。四學年有志に由て組織せられたる樂隊の吹奏に和し、募集に當選したる四學年生重友毅君の作歌に庄野教諭の作曲せられたる者を高唱し、第一中隊より順次に行進を始め、平安古八丁御許町東田町を過ぎて、住吉神社に詣り、米屋町吳服町を経て歸校し、一同に紅白の祝餅一重宛を分ち萬歳を三唱して解散せり。

松陰先生追慕會

十一月二十一日、午前八時三十分より、例に依り松陰先生追慕會を舉行せらる。村上校長の「松陰先生の中心思想」なる演説あり、(筆記あり説林欄に收む)十一時より松陰神社に參拜せり。

送迎彙報

教諭岡本祐澄先生は、暑中休暇に歸省中、不幸にして病に罹られ、當分静養の必要ある由にて辭任せられたりしに、九月三十日附を以て許可せられたり。

十月四日、新任教諭心得石井登久一先生の紹介式行はる。先生は岡本教諭の後を承けて、國語科の授業を担当せらるべし。

十一月十一日、久しく病氣にて轉地中なりし教諭上江知太郎先生辭職

村上校長に導かれて松陰神社に詣り、指月城址等を巡覽せられ、夜は當地教育家諸氏の歡迎會に臨まれ、橋本川中流の舟中に、閑に教育上の抱負を語られたりと聞く。(講演要旨は載せて説林欄に在り)

眞鍋中將の來校

九月七日、陸軍參政官陸軍中將男爵眞鍋氏來校、各教室の授業を參觀し、午後、講堂に於て訓話せられたり。

御聖影奉戴式

十月二十六日、午後九時三十分、御聖影奉戴の爲山口に向はれたる西川教諭御聖影を奉じて無事歸校せらる。夜稍々深けたるを以て、直に御聖影室に奉安し、翌二十七日、午前八時、一同を講堂に會し、奉戴式を舉行せられ、校長の訓話ありたり。

御大典奉祝式

十一月十日、國家無上の大慶を奉祝すべく、本校亦午後一時三十分より嚴肅なる式を擧げられ、御聖影の拜賀、奉祝唱歌、校長の御大典に關する講話等あり、二時、町役場一發の號砲を合圖に萬歳を三唱して式を終ふ。

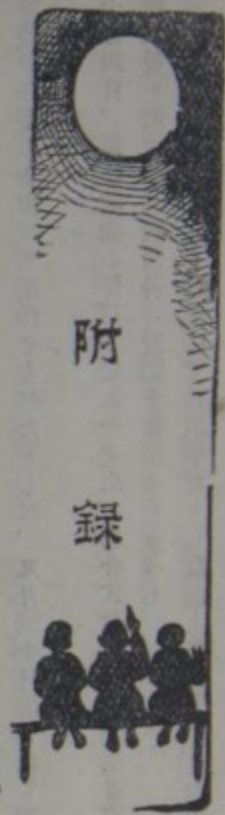
願許可せられたり。

十一月十八日、教諭梅村清光先生の紹介式行はる。先生は土江教諭の後を承けて、地歴の教授を担当せらるべし。

人間僅か五十年、人生七十古來稀、何か腹のいえる様な事を遣

て死なねば、成佛は出来ぬぞ。

松陰



山口縣立萩中學校沿革略

本校は舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に濫觴す○後改めて公立中學校となし明治十一年五月又改めて山口中學校の分校として大に教則を改正す○十七年山口中學校の高等中學校となり文部省の所管に歸するに及び三月十一日を以て本校は萩分校と改稱せられ高等中學校の豫備校となれり○二十年四月一日改めて萩高等小學校別科と稱せられ重見經誠氏主幹となる○同年八月重見氏轉任し綿貫謙輔氏代る○同年十二月萩學校と改稱せらる○二十一年一月職制の改正あり綿貫氏校長に任ぜらる○二十三年四月公立を改めて私立とせられ防長教育會の所管に歸せり○二十九年九月防長教育會之を本縣に寄附し山口縣立山口中學校の分校となし校則の全部を改正す○四月一日綿貫氏萩分校主事を命ぜ

らる○三十年八月三十一日山口縣尋常中學校萩分校と改稱せらる○三十一年三月教諭渡邊盛次郎氏代りて主事心得となる○同年四月渡邊盛作氏主事に任ぜらる○三十二年九月一日分校より獨立して山口縣立萩中學校となり縣令を以て規則を發表し職制並に事務章程を定められ元萩分校生徒二百九拾三名に加へて新に百十名の入學を許し渡邊盛作氏校長心得を命ぜらる是より先校舎は江向村なる明倫館跡に在りしが是に至り堀内村なる新築校舎に移る○同月十八日雨谷蓋太郎氏校長に任ぜらる○十月十八日開校式を行ひ此日を以て本校の紀念日と定む○三十四年四月十五日第一回卒業式を行ふ卒業生三十七名。是月始めて補習科を設く○三十五年二月新築寄宿舎を開き舎生を收容す○同年四月十七日第二回卒業式を行ふ卒業生四十二名○三十六年三月二十九日第三回卒業式を行ふ卒業生五十一名○三十七年三月三十日第四回卒業式を行ふ卒業生五十二名○同年十月十二日雨谷校長病歿せられ教諭塚本又三郎氏校長事務取扱を命ぜらる○同年十二月七日塚本氏校長に任ぜらる○三十八年三月二十七日第五回卒業式を行ふ卒業生四十三名、是月縣令を以て共通入學試験の制を

定めらる○同年八月塚本校長第二高等學校に轉任せられ教諭岩田博藏氏校長事務取扱を命ぜらる○九月長崎縣立島原中學校長羽石重雄氏校長に任ぜらる○三十九年三月二十七日第六回卒業式を行ふ卒業生六十一名○四十年三月二十三日第七回卒業式を行ふ卒業生五十六名○四十一年三月二十四日第八回卒業式を行ふ卒業生四十四名○十一月三日戊申詔書奉讀式を講堂に行ふ○四十二年三月二十三日第九回卒業式を行ふ卒業生三十八名。本年より縣令を以て共通試験を廢せらる○四月三十日羽石校長岩國中學校長に轉任せらる○五月七日熊本縣立八代中學校長村上俊江氏校長に任ぜらる。七月七日戊申詔書奉讀心得を願つ○四十三年三月二十四日第十回卒業式を行ふ卒業生四十九名○十二月一日寄宿舎の名を定めて誠之學舎といふ○四十四年三月二十四日第十一回卒業式を行ふ卒業生四十七名○四十五年三月二十四日第十二回卒業式を行ふ卒業生五十二名○七月一日久原氏獎學金給與規程成る○大正二年二月七日訓令第五號を以て山口縣立中學校共通入學試験施行規程を定めらる○三月二十七日第十三回卒業式を舉行す卒業生五十九名○十一月四日久原氏獎學金給與規程

第五條の次に現第六條を追加し元第六條以下を順次繰下ることとなれり○三年三月十九日第十四回卒業式を舉行す卒業生五十九名○四年三月二十日第十五回卒業式を行ふ卒業生六十七名。

吾性迂疎堅僻。於世事無所通曉。
獨知以一身先物。以犯艱冒險而已。

松 陰

職員表(大正四年十二月末現在)

受持學科	職名	就職年月	氏名	原籍地
修身、英語、歷史	校長	大正二年四月	村上俊江	山口縣
代數、幾何	教諭兼舍監	大正二年五月	西川五郎	神奈川縣
英語、漢文、習字	教諭	大正二年九月	藤原甚吉	山口縣
國語、幾何、三角	教諭	大正二年十月	安藤多介	同
算術、代數、幾何	教諭	大正二年十月	山田藤吉	三重縣
國語、漢文、習字	教諭	大正二年十月	木田兵吉	愛知縣
英語、物理、化學	教諭	大正二年十月	藤井百輔	山口縣
物理、化學	教諭	大正二年十月	山元章次郎	滋賀縣
英語、物理、化學	教諭	大正二年十月	足立喜三郎	愛知縣
英語、物理、化學	教諭	大正二年十月	田中市郎	山口縣
英語、物理、化學	教諭	大正二年十月	廣田近三	大阪府
英語、物理、化學	教諭	大正二年十月	庄野貞一	德島縣
英語、物理、化學	教諭	大正二年十月	田總百合之助	山口縣
英語、物理、化學	教諭	大正二年十月	長東有隣	香川縣
英語、物理、化學	教諭	大正二年十月	金子乙助	山口縣
英語、物理、化學	教諭	大正二年十月	田邊友吉	同

受持學科	職名	就職年月	氏名	原籍地
國語、漢文、習字	史	大正四年四月	梅村清光	茨城縣
國語、漢文、習字	同	大正四年四月	石井登久	岡山縣
國語、漢文、習字	同	大正四年四月	山本百合熊	山口縣
國語、漢文、習字	同	大正四年四月	中村正治	同
國語、漢文、習字	同	大正四年四月	相島直一	同
國語、漢文、習字	同	大正四年四月	岡田與三	同
國語、漢文、習字	同	大正四年四月	三輪昂	同
國語、漢文、習字	同	大正四年四月	丹ニエル、シ、フカナン	英國
國語、漢文、習字	同	大正四年四月	末永柳一	山口縣
國語、漢文、習字	同	大正四年四月	玉木丞輔	同

卒業生一覽(いろは順)

第一回(明治三十四年三月)

郵電卒業會社員	伊藤治郎	陸軍砲兵大尉	陸軍砲兵大尉
陸軍歩兵中尉	井上四郎	早大法學士高文合格	早大法學士高文合格
南滿鐵道會社員	石田藤八	在米國桑港實業	在米國桑港實業
在大連	堀清一	豫備海軍少尉冒險世界主筆	豫備海軍少尉冒險世界主筆
在郷	岡村喜一	死亡	死亡
大阪高商卒業	岡本精一	東大農實科卒業	東大農實科卒業
直輸出商	岡村喜一	高知縣小林區署	高知縣小林區署
陸軍歩兵大尉	河野厚造	陸軍工兵大尉	陸軍工兵大尉
死亡	香原祐江	海軍少佐	海軍少佐
技光製鐵所員	柏村博	死亡(日露戰役旅順)	死亡(日露戰役旅順)
岡山醫學士開業醫	横田直藏	死亡(於テ戰死)	死亡(於テ戰死)
東京商船卒業	横田直藏	北農實科卒業	北農實科卒業
早稻田實業卒業三越店員	田中三造	北海土別御料局	北海土別御料局
東大工學士鐵業	都野正一	東商船卒業郵船會社	東商船卒業郵船會社
全州農工銀行員	中村章一	陸軍歩兵大尉	陸軍歩兵大尉
在朝鮮鏡城	中村敏輔	書家	書家
死亡	梨羽次郎	以上三十七名	以上三十七名
外語卒業中等教員	山田藤助	第二回(明治三十五年三月)	第二回(明治三十五年三月)
廣島高師卒業中學教諭	山本政人	陸軍歩兵大尉	陸軍歩兵大尉
海軍大尉	山本吉徳	死亡	死亡
死亡	山本吉徳	東大工學士三池炭坑	東大工學士三池炭坑
死亡	山本吉徳	京城通信局吏員	京城通信局吏員
死亡	山本吉徳	早大卒業小坂鑛山	早大卒業小坂鑛山
死亡	藤井達吉	岡山醫學士陸軍一等軍醫	岡山醫學士陸軍一等軍醫

陸軍步兵中尉 青水英一
 國學院卒業中 有田國介
 等學校教諭 阿座上長一
 海軍大尉 阿武清
 山口高商助教授 佐藤虎介
 死亡 佐伯益豐
 東洋協會卒業在臺灣實業 杵築市助
 死亡 木村彌三
 京大法學士在郷 菊屋孫輔
 京大法學士陸軍理事 湯原桐
 死亡 三宅彌太彦
 富田町鹽專賣局出張所員 品川鴻介
 以上四十二名
 第三回(三十六年三月)
 死亡 飯尾強介
 未詳 稻田茂太
 在朝鮮新聞記者 今井省三
 會社員 波多野晋平
 東美卒業同校助教 波根義三
 早大高師英部卒業中學教諭 林壽香
 在郷醬油釀 友永儀三郎
 造兼米商 太田明治
 東大工學士鐵道院技師 大多和作太
 東高商卒業會社員 太玉完

兵庫縣技師 渡邊儀賢
 山高商卒業潭陽地方金融組合 片山市太郎
 京大文學士大學院學生 兼常清佐
 死亡 吉田光胤
 在下關商業 高木孫治
 大阪高醫卒業 田中唯一
 海軍大尉 田村能介
 廣島高師卒 玉木正行
 海軍機關大尉 田坂信一
 東高商卒業海軍大主計 曾根昌一
 死亡 中村文治郎
 在郷 中野清
 早大商科卒業 中島常介
 京城東洋拓殖會社員 内田贊
 東大農實科卒業林業技手 宇野英一
 陸軍步兵中尉 上田米太郎
 東慈惠卒業高繩病院醫員 口羽雅介
 釜山稅關吏 八谷俊一
 在郷 山田正一
 在大阪藤田氏邸内 松本淳
 在京城實業 松本民介
 死亡 藤井勉
 東大農實科卒業在郷 厚東健二郎
 寺田林市

福井縣土木 出淵熊雄
 出張所事務員 栗屋昌介
 在下關實業 阿部昌介
 在下關會社員 赤川省吾
 慶大卒業體育スタン 坂本治郎
 ダイドオイル會社員 佐古良一
 在東京實業 紀藤庄助
 海軍大尉 木村磯治
 犬吠崎燈臺 三浦國藏
 陸軍輜重兵中尉 村上磯治
 在郷 白上貫之助
 陸軍步兵中尉 篠原五郎
 東高工卒業神戸鐵道院 島尾平七
 海軍書記 島田八重丸
 明大卒業 弘毅太郎
 三井物産會社員在朝鮮 杉道助
 慶大理財科卒業浪 末岡周介
 速紡績會社支配人 以上五十一名
 豫備陸軍砲兵少尉教員 伊藤傳次
 早大商學士 今井武方
 未詳 井田晋
 在朝鮮 井山正作
 陸軍輜重兵中尉 原田信藏

京大工學士三池炭坑 林俊香
 東京高商卒業奉天 橋本秀
 東亞烟草株式會社 西村昌一
 陸軍工兵中尉 岡本武男
 牧稅屬 和田正敏
 陸軍步兵中尉 桂木庄市
 在郷酒造業 香積見彌
 陸軍砲兵中尉 吉見一郎
 死亡 吉武傳一
 吉林燐寸株式會社 橫田三介
 東商船卒業在神戸 高橋熊太郎
 死亡 津田武雄
 北大農學士農 根來行藏
 商務省農務局 慶大卒業在兵庫縣 根來行藏
 死亡 中村良強
 大阪醫大在學 中村敏介
 未詳 室田貞一
 陸軍步兵曹長 村橋孫市
 東高工卒業 村田發太
 京大法學士會社員 浮里俊道
 陸軍步兵中尉 乃美忠次
 海軍大尉 能美留壽
 死亡 信國武尙
 京大文學士中學教諭 久保田庄作
 外語卒業 山田俊治

在朝鮮 神戶燐寸會社 山田昌介
 朝鮮郡山郡吏 山下盛太郎
 朝鮮龍山鐵道局 山本公介
 陸軍二等主計 松尾英一
 東大法學士在神戸 正木孝介
 小學校教員 藤井晴一
 東大工學士 福田信彦
 死亡 小池武彦
 安東縣警務署 兒玉馨四郎
 慶商卒業在東京 寺西啓太郎
 海軍大尉 青原忠一
 死亡 安間定次
 早商卒業在郷 佐古芳二郎
 神高商卒業臺灣銀行倫敦支店 佐原孝一
 直方三井炭坑事務員 佐々木義彦
 山高商卒業東京倉庫 木津谷泰夫
 株式會社大阪支店 木村精男
 死亡 三浦九一
 休職陸軍三等主計 宮原藤吾
 朝鮮總督府 白根政輔
 死亡 新庄一
 海軍大尉 杉山俊亮

第五回(明治三十八年三月)
 死亡 羽崎勝五郎
 熊本醫學士開業醫 岡田信太郎
 大高工卒業 落合兼文
 東高商卒業大倉 大谷清記
 組シF=1支店 大谷卓造
 陸軍步兵中尉 大賀幾太
 東大法學士在東京 太田三郎
 北大農學士大連製鹽公司 太田健太郎
 早大商卒業阿武郡寄記 河名謙雄
 京佛大卒業本願寺有教師 河野利長
 慶大卒業在郷 河野利長
 慶大理財科卒業 河野利長
 下關百十銀行員 河野利長
 早商學士肥料會社大阪支店 河野利長
 會社員 河野利長
 明大卒業 河野利長
 死亡 高橋信一
 東高工卒業新潟鐵工所 高橋信一
 山高商卒業 仲井義輔
 在郷 仲井義輔
 豫備陸軍步兵少 中村芳樹
 尉森中學校教諭 中村正治
 死亡 中村正治
 陸軍步兵中尉 中村正治
 死亡 野村仁介

在下關
防長自動車會社
死亡
豫備陸軍步兵少尉小學校教員
陸軍步兵中尉
岡山醫學士開業醫
死亡
成興農工銀行
滿洲鐵道會社
海軍大尉
熊本高工卒業在朝鮮
臺灣銀行支店
東洋大卒業大
田福田寺住職
早大卒業在下關
陸軍步兵中尉
岡山醫學士陸軍
在兵庫縣生野
在郷
在福岡縣箱崎町
在郷小學校教員

國弘 壽
口羽 素介
國重 照
山田 八郎
前原 四郎
増野 純亮
藤津 蒼梧
厚東 洋
神崎 一郎
寺田 幸吉
赤川 義助
東谷 光亮
田中正 範
笠原 武一
南方 秋亮
下瀬 政三
弘中 馨
日比 豐
百井 盛次
水津 貞輔
伊藤 八郎

長崎高商卒業在大阪
北大農學士在大連
在神戸實業
未詳
山口師卒業小學校教員
死亡
在臺灣基隆田中組鐵山武丹坑
保險會社員
京大法學士在京都
死亡
陸軍步兵少尉
死亡
在郷
海軍機關中尉
在郷國藝
長崎醫學士玉木病院
三井登川炭坑事務所
在郷小學校教員
慶大理財科卒業會社員
東大法科
小學校教員
大阪高工卒業

石原 忠亮
石津 半治
石村 勘次郎
井山 謙輔
波根 又介
長谷 千代一
西山 七郎
堀 俊雄
堀 永伸三
堀 澤正政
大柳 欽一
岡 萬藏
小田 甚三
大 中秀次
大 深真輔
奧 田又助
和 田涉
加 藤保一
金子 精一
柏 村堅吉
高 木良輔
田 中武雄
田 村繁人

陸軍砲兵中尉
大阪高工卒業在郷釀造業
在東京銀行員
山口師卒業小學校
慶大理財科卒業銀行員
死亡
在旅順實業
山口高商卒業在朝鮮
大阪高工卒業日立鐵山
山口高商卒業下關瓦斯會社
死亡
京大法科生
山口師卒業小學校教員
在郷役場員
會社員
山口高商卒業京
都第一銀行員
在朝鮮慶山
外語卒業在神戸
東大農學士帝室
林野管理局技師
在東京實業
小學校教員
早大商學士
阿武郡書記
會社員在長崎
海軍機關大尉

小林 京介
厚東 芳介
兒玉 忠彦
神 田 幸
江 原 一 郎
阿 川 義 人
阿 川 環 亮
秋 本 精 昭
佐 藤 良 文
來 島 元 助
水 間 義 繼
三 戶 良 一
水 井 精
三 浦 正 夫
品 川 廣 平
平 川 春 助
守 永 五 郎 吉
善 甫 正 三
杉 山 清 一
鈴 木 昇 二 郎
以上五十六名

千葉醫學士開業醫
在米岡桑港
下關郵便局員
東大法學士高文合格
海軍中尉
小學校教員
朝鮮草藥鐵道
山口高商卒業防長農工銀行
東大法學士會社員
陸軍步兵中尉
陸軍步兵少尉
以上六十一名
第七回(明治四十年三月)

木村 六郎
三好 謙一
溝部 九一
三浦 惟一
箕妻 準二
宮原 道廣
鹿野 政一
平島 哲郎
森重 忠作
森山 半二
伊藤 利博
波多野 壽福
原田 淳一
羽倉 市熊
林 義助
長谷川 秀一
德富 周平
岡田 亮一
小野 栢一
大谷 二郎
奥野 眞一

未詳
在東京
東高商卒業
陸軍二等主計
小學校教員
早大商學士在郷
在米岡桑港
神戸稅關吏
死亡
東高商卒業新橋荷物取扱所
死亡
東商船卒業
陸軍步兵少尉
阪鶴鐵道會社
在鳥根縣
陸軍二等主計
死亡
在東京
早大工卒業茨城無烟炭坑
陸軍砲兵少尉
九大醫在學
陸軍步兵少尉
京大工學士京大講師
大連土木出張所

河北 一三
河野 次郎
金子 雨一
金山 幾太郎
吉岡 恒郷
吉村 頼正
吉浦 緒信得
横見 莞爾
田原 四郎
田 中 豐
田村 壯介
長岡 忠雄
中村 樹介
中村 誠一
村上 欣一
村田 歳一
村崎 敏行
國重 孝幸
黒 瀨 白
山下 寛一
松井 式部
益 田 謙
藤 井 寛
福岡 四郎

死亡
小學校教員
海軍中尉
稅務署吏員
大阪高工卒業
名古屋高工卒業川崎造船所
在東京
山口高商卒業 善五郎改
東同文卒業同校教授
臺灣水産株式會社
山口高商卒業日韓銀行
在朝鮮
陸軍步兵少尉
山口高商卒業在臺灣實業
死亡
神戸鐵道院
釜山稅關
東高商卒業小坂鐵山
京大法科
在東京
在朝鮮實業

岩崎 利七

在郷 岡山醫學士開業醫 伊藤時重
陸軍歩兵少尉 石光憲一
山口師卒業小學校教員 波佐間一
在郷 原純一
在朝鮮仁川 早川純一
海軍中尉 濱屋七平
在朝鮮北金泉本町 西村基介
東高師卒業中等教員 富田義一
在郷商業 岡田德一
在郷 岡藤又七
陸軍歩兵少尉 小倉誠一
大阪高工卒業 小倉誠一
江界地方金融組合 大草又七
在郷 落合實三
山口高商卒業小野田 河内通祐
セメント大連支店 高垣重一
早大商學士會社員 高垣重一
死亡 モト上田
東商醫專卒業 田中喜一
陸軍砲兵少尉 竹重頼三
東高工卒業 津坂榮助
東高工卒業 津守完
千葉醫學士 津守猛
東亞同文在學 中村信介
東高工卒業佃島製作所 中村道生
死亡 村田泰

死亡 山口師卒業小學校教員 榎木貞一郎
東高工卒業東京市電氣局技師 野村昇輔
川崎造船所 山根四郎
在郷 山本顯祐
陸軍砲兵少尉 松浦純一
三井鑛山會社 藤田秀八
大阪高工卒業在郷 藤井愛咲
官吏在朝鮮仁川 栗屋潔
熊本藥劑士須磨病院 齊藤新一
海軍機關中尉 齊藤敏多
東高商卒業會社員 木原直孝
官吏朝鮮總督府 來島良平
海軍機關中尉 三戶由彦
早大師部卒業 白井洗
陸軍歩兵少尉 平川新太郎
在門司市外大里 杉本基良
山口高商卒業在郷 末永一郎
以上四十四名

第九回(明治四十二年三月)
熊本高工 伊藤義雄
樂石社員 石川光一
東大工在學 早川富正
小學校教員 西村武光

東大法在學 堀正一
臺灣瑞芳鐵山 堀永修
在郷 大谷祇詮
大阪高工卒業京都 大田良吉
陸軍火藥製造所 千葉高農卒業在郷 渡邊迪知
千葉高農卒業在郷 渡邊迪知
大阪高工卒業青島發電所 釜山稅關吏 金子勘助
在郷 未詳 神田直光
陸軍歩兵少尉 吉澤正太郎
陸軍歩兵少尉 武安明
陸軍歩兵少尉 瀧退一
山口師卒業小學校教員 中村誠
臺北龍匯口庄 長井要藏
東高工卒業川崎電氣會社 中西作介
京大理在學 永松要
死亡 在郷工業 村田三介
在郷工業 宇野四郎
在郷工業 黑瀬貞祿
桑原雅亮
窪井隆三
山本傳一
松野十一

山口高商卒業田川炭坑 松野信次
山口師卒業小學校教員 松浦好輔
陸軍歩兵少尉 增野雅一
在郷商業 古谷實
東京高工卒業室蘭製鋼所 兒玉一男
東高商卒業川崎電氣會社 安藤芳彦
未詳 齋藤武夫
京醫專卒業開業醫 齋藤定一
小學校教員 三村惣一
北大林實科 白井曉彦
以上三十八名

第十回(明治四十三年三月)
關大商 石津美禰
山口高商卒業大阪近江銀行 戶田剛三
慶大理財學士在郷 土井武一
胸農實卒業在山梨縣 落合健
水陸卒業 小野本亮
陸軍歩兵少尉 和知孝任
朝鮮元山實業 渡邊寛治
山口師卒業小學校教員 高信一
陸軍歩兵少尉 金子眞一
山口高商卒業 横田秀一
熊本高工卒業朝鮮京城 田邊一
東高工卒業電氣試驗所 田中貢

陸軍歩兵少尉 田中敬藏
陸軍歩兵少尉 田村孝亮
陸軍歩兵少尉 田村正之
陸軍歩兵少尉 玉木正之
陸軍歩兵少尉 織原吉雄
陸軍歩兵少尉 中原吉雄
陸軍歩兵少尉 村田繁
陸軍歩兵少尉 村井勝
陸軍歩兵少尉 梅田吉郎
陸軍歩兵少尉 植村九一
陸軍歩兵少尉 野北重利
陸軍歩兵少尉 工藤峻
陸軍歩兵少尉 山一源吾
陸軍歩兵少尉 山田耕作
陸軍歩兵少尉 前田孝男
陸軍歩兵少尉 松浦茂
陸軍歩兵少尉 益田直美
陸軍歩兵少尉 藤井百合松
陸軍歩兵少尉 藤井百合松
陸軍歩兵少尉 藤田敬二郎
陸軍歩兵少尉 福島俊一
陸軍歩兵少尉 枝村匡輔
陸軍歩兵少尉 榎本勝虎
陸軍歩兵少尉 榎本三郎
陸軍歩兵少尉 阿部時治

小學校教員 山口高商卒業京城通信局 上利賢介
小學校教員 山口高商卒業 安達茂作
小學校教員 山口高商卒業 朝枝櫻英
小學校教員 山口高商卒業 阿武重元
小學校教員 山口高商卒業 齊藤忠明
小學校教員 山口高商卒業 佐々木四郎
小學校教員 山口高商卒業 三輪啓祐
小學校教員 山口高商卒業 三浦嘉七
小學校教員 山口高商卒業 三好敬一
小學校教員 山口高商卒業 柴田信智
小學校教員 山口高商卒業 平佐幹
小學校教員 山口高商卒業 善甫友三郎
小學校教員 山口高商卒業 須子伴二
小學校教員 山口高商卒業 須子伴二

第十一回(明治四十四年三月)
東洋專在學 伊藤道顯
新潟醫專在學 伊藤香
在郷百十銀行員 飯尾三郎
未詳 原田正三
關大在學 林孝一
山口師卒業小學校教員 波佐間久
小學校教員 西山彦三
小學校教員 豐中善實
小學校教員 富田強吉
山口高商卒業 富田強吉

陸軍主計候補生 大田 茂輔 在福岡縣大牟田町
 海軍少尉候補生 大谷 雄介 小學校教員
 鐵道院北海道管理局 大野 暢夫 小學校教員
 大阪高工在學 河口百合長 九大醫在學
 在郷 兼田 唯助 山口師卒業小學校教員
 九大工在學 兼谷 善二 陸軍步兵少尉
 在吳 高橋 藤太郎 大阪高醫在學
 在東京 探本 清一 東商醫專在學
 熊本高工卒業一年志願兵 津田 等 未詳
 山口師卒業小學校教員 村橋 通 慈惠醫在學
 山口高商卒業朝鮮銀行安東支店 村田 新一 京大文在學
 在郷 上田 嘉一 在京都
 京大法在學 上野 義清 山口高商卒業自營實業
 小學校教員 信國 久堅 東高商卒業
 水講在學 桑原 義輔 以上四十七名
 山口師卒業小學校教員 栗栖 靜 第十二回(明治四十五年三月)
 京大文在學 矢田 篤 陸軍步兵少尉
 山口高商卒業名古屋銀行 山崎 秀輔 陸軍步兵少尉
 駒農大在學 山本 直正 陸軍士官候補生
 陸軍步兵少尉 松井 隆美 東高商在學
 慶大豫在學 松崎 周介 山東鐵道管理部
 山口師卒業小學校教員 藤原 政一 東高商在學
 東大工在學 藤村 良作 七高在學
 陸軍三等主計 古橋 清一 小學校教員

厚東剛四郎 山口高商卒業在郷
 小枝 義雄 京城小學校教員
 江原 茂 大阪高工在學
 寺田 篤 在大阪藤田家
 關 好應 六高在學
 齋藤 二郎 在郷
 齋藤 武文 京釜鐵道員
 櫻井 秀康 在東京青山
 三浦 敬造 陸軍三等主計
 柴田 龍三 山口高商卒業戶畑旭硝子會社
 廣兼 來藏 未詳
 榎木 史朗 山東鐵道營業部
 守永 自由平 岡山醫在學
 末成 茂 小學校教員
 伊藤 義彦 陸軍士官候補生
 伊藤 清忠 在堺市大小路
 生駒 林一 京佛大在學
 伊佐 小次郎 陸軍候補生
 石田 四月 山口高商卒業
 波根 彌六 在朝鮮
 原 嶺 陸軍士官候補生
 羽鳥 陳 陸軍步兵少尉
 萩響海館員

モト有倉

豐田 延雄
 岡田 行雄
 大津 正一
 奥田 準一
 渡邊 四郎
 渡邊 梅吉
 片山 豐助
 柿並 修三
 河内 山隆輔
 吉田 耕造
 高橋 保勝
 田村 貞一郎
 坪井 三介
 辻野 喜一
 內藤 千里
 長宗 純
 南部 法電
 室田 五郎
 村上 正文
 上野 實造
 久保 田誠
 黒瀬 知一
 山田 專一

大阪高工卒業在郷 モト岩崎 山縣 吾一 未詳
 在郷 松原 慶市 在東京
 長崎醫專在學 松永 知義 在朝鮮
 山口高商卒業神戶三井物産支店 松永 隆亮 陸軍士官候補生
 未詳 藤本 貢 三高獨法在學
 東洋協卒業 福田 忍 山口高商在學
 兵役服務中 福永 隆太郎 熊本高工在學
 陸軍步兵少尉 厚東 四郎次 在大阪
 未詳 秋丸 哲夫 七高在學
 東美日高科在學 秋本 市郎 東高商在學
 陸軍步兵少尉 佐伯 繩四郎 未詳
 山口高商在學 佐藤 政之 臺灣瑞芳金山
 東高工卒業 佐々木 四方介 兵役服務中
 山口高商在學 木村 榮太郎 五高在學
 陸軍步兵少尉 下村 福治 死亡
 馬山昌原郡廳 廣瀬 五郎 大阪高商在學
 山口高商在學 平島 公平 大阪高工在學
 陸軍砲兵少尉 日野 二郎 慶大在學
 京佛大在學 守重 哲成 七高在學
 長崎醫在學 杉山 守輔 臺灣北興直公學校教員
 陸軍步兵少尉 陶村 政一 六高在學
 第十三回(大正二年三月) 以上五十二名
 以下○符を附するは久原氏 要學金を受くる者

岩本 南洋 山口高商在學
 伊藤 諒吉 陸軍士官候補生
 磯村 惣久 未詳
 井町 照久 大阪醫大在學
 池田 秀猛 東商船在學
 馬場 健一 東農大實科在學
 馬場 勝次 在郷
 原田 景三 釜山稅關在勤
 堀 信一 大阪醫大在學
 德永 英介 未詳
 岡田 節藏 山口師卒業小學校教員
 小野 富貞 陸軍士官候補生
 大田 元輔 三高在學
 ○河崎松之助 在東京
 河野 一雄 早大在學
 香取 敬藏 早大在學
 片山 平作 在郷
 金子 生一 陸軍士官候補生
 拍村 稔三 岡山醫專在學
 橫田 弘 岡山醫專在學
 橫山 莊介 明大在學
 高原 正臣 萩銀行員
 多田 俊雄 陸軍士官候補生

竹内 久治
 竹重 英治
 格武 忠
 坪井 彌太郎
 長岡 正人
 村上 愛次郎
 村田 芳彦
 村田 義嗣
 村木 義一
 上岡 讓熙
 上田 久芳
 植田 瑞穂
 内山 芳忠
 卜部 豐
 浮里 宜也
 野田 保男
 野村 四朗
 口羽 忠介
 熊谷 巖
 柳屋 良輔
 松尾 潔
 增野 雅治
 藤田 俊彦
 藤永 智

陸軍士官候補生
大阪醫大在學
小學校教員
未詳
京佛大在學
慶大理財科在學
山口高商在學
陸軍士官候補生
陸軍士官候補生
陸軍士官候補生

以上五十九名

第十四回(大正三年三月)

伊藤實三
伊藤英二
石川長介
石津清
石光三輔
池內清
飯田治郎
波多野五郎
長谷川濟
堀幸一

關山醫專在學
陸軍士官候補生
兵役服務中
山口高商在學
五高在學
山口高商在學
在東京
長崎醫專在學
在門司市
明治專門在學
在鄉

旅順工科學堂在學
在鄉
山口師卒業小學校教員
神戶專賣局員
慶大在學
小學校教員
門司稅關吏
慶大在學
山口師在學
旅順工學在學
鹿兒島高農在學

遺藤俊雄
赤川勝
上利祥介
阿武茂雄
笹村潔
三上孝之
白石英男
篠田直武
守永喜平
森重橋雄
鈴木清

關倉勘一
戶倉健三
友森文彦
小川義雄
小澤亮一
渡邊久
香川景介
金子潤介
兼重政輔
幸月富士昌
橫田國香
田中健藏
竹重保衛
永松元治
樹木弘
上田九一
植田源熊
植村美人
內田信平
榎原孝一
野原英式
野上猛三郎
能美猛

在神戶三菱造船所
在朝鮮釜山
在東京
熊高工在學
在朝鮮釜山
在東京
山口高商在學
門司稅關吏
兵役服務中
陸軍士官候補生
六高在學
在京都
在東京麻布毛利男邸內
五高在學
熊本高工在學
東高商在學
未詳
未詳
一高在學
東高工在學
慶大法在學
森自動車會社
京佛大在學

○下
杉山顯正
杉山時雄
平原茂
平山一郎
重枝夫
三宅十六
宮國武
光本照夫
三好輝夫
三輪一輔
秋山新熊
安部寬
江本敏武
後藤琢一
藤山二郎
藤田保忠
松原義方
安田安
山下真一
山田雪三
矢野壽造
八谷榮三
熊谷謙介

第十五回(大正四年三月) 以上五十九名

在鄉
在京
大阪高工在學
在鄉
陸軍士官候補生
下關稅務署員
山口高商在學
未詳
熊本藥在學

岩武了
伊藤誠輔
伊藤通利
伊藤好春
五峰作一
今道三吉
石津連
飯尾定治
井本明治
西林鴻介
富田積
小河千里
大津藤一
綿貫秀雄
渡邊正規
渡邊壽
河野匡四郎
加藤萬壽夫
片岡勝資
金子武馬
○橫山繁介
田中英熊

在東京
六高在學
在東京
在鄉
在鄉
在鄉
在鄉
在鄉
在鄉
在鄉
在東京
東京鐵道院
五高在學
五高在學
下關簿記學校在學
在鄉
在東京
在東京
在東京
在東京
在東京
在東京
在東京
山口高商在學

附錄

田村尹夫
武林治郎
武田弦介
竹內基雄
田坂耕造
田北浩一
中村一郎
中山節郎
村岡語朗
村岡淺一
村岡達男
村木好郎
黑瀬貞盈
國弘美治
山根貞義
山中尙夫
山本虎吉
八木榮一
松原與七郎
松原淨二
松井三雄
松井武夫
馬庭長一

京佛大在學
死亡
東高商在學
在鄉
未詳
在東京
在上海三井物產支店
在鄉
大阪高工在學
小學校教員
在鄉
在鄉
大阪高工在學
未詳
東高師理科在學
在枝光製鐵所
在東京
兵役服務中
在鄉

○以上六十七名
鈴木
持山太兵衛
勝野秀信
下瀨幸雄
下瀨茂雄
下瀨幸男
榮田省三
三浦四郎
三浦勝象
桐山幸男
齋藤八郎
阿武良雄
阿武耕
秋山誠一
綾木長衛
兒玉才三
後藤樹造
藤井直章
藤井四郎
藤井信次
松岡六雄

會 告

- 一、本誌は會友諸君の寄稿を切望す。期限は十一月末日までとす。用紙隨意。
- 一、會友にして、本誌の寄送を望まらざる諸君は、郵税共實費金貳拾貳錢（郵券代用妨なし）を豫め送附し置かれし。本誌の發行は毎年三月とす。
- 一、卒業生一覽に載する所の會友諸君の現況中には實を失へる者鮮からざるを信ず。御氣附諸君の御一報を請ふ。

大正五年四月十五日印刷
大正五年四月十八日發行

（非賣品）

發行兼編輯者

山口縣阿武郡格村

三 輪 昂

印刷者

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

窪 政 鉄

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

株式會社 秀 英 舍

